
夢見る心

姫姫姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見る心

【Nコード】

N7392T

【作者名】

姫姫姫

【あらすじ】

今もなお続いている私自身の9年前から現在まで一人の女性を愛して依存してしまった話です。

出会い

彼女との出会いは私がまだ社会人に成り立ての二十歳の時でした。私の職業は病院の調理師で彼女はそこに働きに来ていたパートだった彼女にはまだ幼い子供が二人いて、もちろん旦那さんもいた。その人を今も愛し続けているのが私である。

彼女は当時25歳、生意気で小悪魔みたいな人だったとても二人の子持ちとは思えないほど顔も童顔で私と同じ年齢かと思えるぐらいに見えた。私はその小悪魔っぷりを別の例えにして彼女の事をお姫様みたいだねと言った。その事で全てが始まった。私と彼女が隣で仕事をする時だけ私は彼女の事を姫ちゃんと呼ぶようになった。その時からか、私と姫はお互いに凄く仲良くなり色々プライベートの事を喋るようになった

私は姫を好きになりはじめていたが旦那も子供もいたし叶わぬ恋だと思い、あきらめていた。それから少しして姫は旦那に言われ、パートを辞めなくてはならなくなった。私はその事を知り、いてもたってもいられなくなり行動に移した

「ねえ姫ちゃん、俺寂しくて耐えられないよ。せめて最後に今日飲みに行つて俺に奢らしてよ。二人でお別れ会しよ」

私はダメもとで言ったのだが姫は快くその誘いに応じてくれた

「ホントに奢り？なら行っちゃおかな」

無題

そしてお互い仕事が終わリそれぞれ一旦帰路についた。若かった私は心臓が張り裂けてしまうほどのなんともいえない幸福感をえた。

あの憧れの人と二人っきりで飲みに行けるのである。当然の結果だ。

待ち合わせ場所まで行きドキドキしながらその時を待った。数分後、いつもとは違いお洒落な服装で姫が現れた。とても可愛くて今でもその姿は焼き付いている。世間話などをしながら目的地に向かう。

「さあ着きましたよ姫ちゃん。今日はいっぱい飲んで盛り上がりましょうね」

「うん。今日はとことん飲んじやうぞ。覚悟しときなね」

あまりにも理想的な展開で私の心は最高潮だった。今までの仕事の話し、お姫様のあだ名のいきさつ、姫と旦那の馴れ初め、旦那の愚痴などを時間を忘れて話しあった。気づくともう終電の時間である。夢の様な楽しい時間は残念ながら終わりを迎えた。店から出た直後に嬉しい事が私を待っていた。姫は結構飲んでいて頬をピンク色に染め、かなりご機嫌だった。そして私の腕に抱き着き、顔を肩に乗せて寄り添ってきたのである。

「大丈夫、姫ちゃん？ 飲みすぎたんじゃない？ 歩ける？」

「全然大丈夫です。でも少しだけでもいいからこうさせて」

とは言うものの、明らかに酔っていて歩くのが難しいみたいだった。私は腕に抱き着かれながら幸せを噛み締めていた。でもこのままでは終電に遅れてしまう。そこで私は姫をおんぶしてしまおうと考え

た。

「姫ちゃん、俺おんぶしてあげるから背中に乗って」

「は〜い。よろしくね。」

なんとも可愛い甘い声である。そして姫をおんぶして改札に向かった。これが恋人同士であつたら、なんて羨ましい事だろうと私は感じていた。最寄駅に着き、またおんぶをして帰り道を話しながら帰った。

「もう1時過ぎだね。旦那さんに怒られない？こんな時間までごめんね。」

「やばいかもね。でも今日は凄く楽しかったし、ストレスも発散出来たよ。本当にありがとう」

「また飲みに行こうよ姫ちゃん。俺も凄く楽しかったし最高だったよ。姫ちゃんは凄く可愛いし惚れちゃいそうだよ」

私は思わず口からポロっと惚れちゃうと言ってしまった。その後事件が起きた。

「まだ家に帰りたくない。私に惚れちゃいそうなの？そんな言葉言われたら私もう……」

そう姫は私に言いながらキスをしてきた。あまりに突然で、一瞬私は何が起きたのかわからなくなっていた。でも今私は夢の様な現実にいる。姫ちゃんのキスは優しく甘くてそして卑怯なキスだった。

「姫！俺、仕事場で初めて見た時からずっと好きだった。でも、家庭持ちだから今まで言えなかった。大好きです。付き合ってください。」

私は自分でも信じられない言葉を発していた。

「ありがとう。私もね、実は好きだったんだ。でも私は子持ちだし旦那もいるから気持ちを抑えてきてたの。こんな私でいいの？」

私の答えは決まっている。「もちろんだよ。姫ちゃん大好きだ！」私達はまたキスをした。

「ねえ、この辺で休めるとこないの？ある？」

「あるといえはあるけど…」

私達は職場の付近で今までの会話をしていた。時間帯は2時30分を迎えようとしていた。

無題

その時私の頭の中に浮かんだのは職場の事務所であった。私は職場から信頼されていて、出入口の鍵を持っていた。事務所の中には四畳半の畳の部屋が更衣室がわりにあるのだ。

「職場の事務所に行こうか？俺、鍵持ってるし、この時間帯ならまず誰も来ないよ。そこなら座れるし。」

「うん。じゃあ行こっ！」

私達は暗闇に紛れて警備員に見つからないように職場の出入口を指した。

「着いたね。見つからないうちに早く入ろう。」

なんともいえないスリルと緊張感で、すくなくとも私は異様なくらいドキドキしていた。私達は無事に事務所にたどり着き、畳の部屋に腰をおろした。

「なんかドキドキしたね。俺、緊張しちゃったよ。」

「私もだよ。でも違う意味でも凄くドキドキしてる。どうしよう」

そう言うとき姫は私の手を取りその手を胸にあてた。姫のその行動で今思うとその時の私は頭が真っ白になっていたと思う。そして、手を胸にあててる状態で、

「すごいドキドキしてるでしょ？わかる？私、ドキドキでもうおかしくなりそうだよ。」

その言葉と同時に私は姫に押し倒された。

「姫ちゃん！？どうし…」

最後まで喋るまえに姫の唇が私の唇をふさいだ。もう二人には言葉は必要なかった…

それから私達はその場所で激しく愛しあいひとつになった……

9年たった今もなお、絶対に忘れられない出来事だ。

「大丈夫？帰れる？」

「大丈夫だよ。もしなんか言われても適当にごまかすから心配しないで」

「じゃあ…またね。またすぐ連絡するから。今日は今まで生きてきて最高の日になったよ。好きだよ、姫ちゃん」

そう言って私は彼女を優しく抱きしめキスをした。

「今日はありがとうね。私も好きだよ。バイバイ」

こうして私達は身体の関係をもった後、お互いにそれぞれの帰路に向かった。

加速

それから私と姫は世間一般でいう不倫を続けていく。

初めて愛しあったあの日から早一ヶ月ぐらいたとうとしていた。毎日の様にメールをして、淋しくなったら電話する。こんな生活でも、その時の私は楽しかった。

逢えるのは姫が有給休暇を取って家族には仕事だと嘘をついて出て来れる日。月に一回逢えるかどうかだ。

読んで下さっている方も、あるかもしれないが、恋をすると人間という生き物はもっとこうしたい！もっともっとこうしたい！と思ってしまう。私もそう思ってきてしまっていた。

私と姫も次第にそうなり、半年ぐらいたった時からだろうか、旦那が寝た後に夜中こっそり逢うようになっていった。特に用があるわけでもないのだが、とにかくお互いが逢いたくて仕方がない状態がきたのだ。最初は夜中に逢って二人で缶ビールや缶酎ハイを飲んで一時間程度話しをするだけだったが、そのうち私が車で迎えに行き、車の中で愛し合う事も度々あるようになった。今思うと私達は獣だった気がする。第三者側から客観的にみると、なんとも馬鹿らしいし、そこまでするものなのかと思えるだろうがその時の私達の状況（不倫関係）だと、こうなってしまうケースが多いのも世の中だと私は思う。

私は完全に姫の虜になってしまった。そうなってしまうと割り切っていた事も割り切れなくなってくる。当初は旦那もいるのだから、勿論夜の夫婦生活だってあるわけだし、それを理解してるうえで付き合っていたが虜になってしまおうとそうならなくなる。私はあく

日、行為が済んだ後でこう切り出した。

「あのさ、姫ちゃん。お願いあるんだけど？」

「何？嫌な事なら聞きたくないよ！」

私はしばし悩んでいたが：「もう…。わかったよ。何？言いなよ。覚悟決めたからさ」

姫は怒りながら、そして泣きながら言ってきた。多分彼女は別れて欲しいとでも私に言われると思っていたのだろう。

「あのさ、俺さ…その…」 「だから何なの？」
完全に切れていた。

「旦那とエッチしないでくれ！俺とだけにして。やっぱ自分が好きな女が他の人とするのは嫌だ。それぐらい俺は好きなんだよ。」

「は？そんな事？それを言いたかったの？」

「そうだけど………」

加速、そして…

姫のあっけらかんとした返事に私の頭の中は？マークでいっぱいになった。

「そんな事？って、俺にしてみれば、かなり重要な事なんだけど…」

「そんな気持ちとづくに気づいてたよ。だから、もう三ヶ月前くらいから旦那とはエッチしてないよ。言われても拒んできたし、だから安心して！私はあなたの事が好きなの。だから旦那とはもう出来ないよ。」

私はあまりにも唐突なその言葉で感極まり泣いてしまっていた。彼女は私の事を本当に愛してくれていたのだ。私が何を言うまでもなく、私の気持ちを察して先に行動に移してってくれていたのだ。こんなに嬉しい事はない。私は涙を流しながら抱きついていった。

「姫ちゃん…、本当に愛してるよ。」

「私もだよ……………」

少しの沈黙をえて、私達はお互いをさらに噛み締める様に何度も何度も営みを交わした。このままの時間がいつまでも続いていくものだ、と、若かった私はそう思っていた。

でも、現実には私が思っている程甘くはなく、ましてや不倫関係という普通とは違う恋愛なのだから、上手くいくはずがないのだ。その事をこれから先、何度体験するのかなんてその時の私には全くわかっていなかった。全ては、虜になってしまった私が悪かったのを、まもなく知る事になるなんて……………

何かが違う…

あの夜の二人で愛しあった日から、丁度一年が過ぎようとしていた。この一年間私達はデートと言えばラブホ巡りの繰り返し。他にこれといって何処に出掛ける訳でもなかった。簡単に言ってしまうえば逢う度にエッチをしていた一年間だった。

「姫ちゃんさあ、うちらも付き合ってそろそろ一年だし記念にどこか遊びに行かない？」

「なんで？ 行きたいの？ 私とエッチするの嫌になったの？」

「嫌、そうじゃなくてさ、俺は毎日でも姫としたいけど、せっかくの記念日だから二人で何処か出掛けて思い出作るのも良くない？」

「んー。確かに何処も行っていないけどさ、それには理由があるって気づいてないの？」

「ごめんね。理由って何かな？ 俺わからないよ」

姫は凄く残念そうな眼差しをしていた。私にはなんでかわからない。

「ごめんなさい、帰ります。送ってって下さい。」

姫は本当に嫌な事になると敬語になる癖がある。仕方なく私達はホテルを後にして帰る。その帰りの道中で私が何を言っても謝っても姫は一言も喋ってくれなかった。そして…

「姫ちゃんごめんね。俺、考えてはいるんだけどわからないんだ。」

「しばらく逢うの辞めよ。それか、今日で終わりでもいいよ。じゃあね」

そう言い残し彼女は去って言った。私はなんともやりきれない気持ちでどうしていいかわからない。

何がいけない……………？

何が悪かった……………？

俺、いけない事何か言った……………？

私の頭の中はパニックである。その後、何度かメールをしてみたが返事はない。そして、記念日は二人でいる事もなく過ぎていった。連絡がとれなくなつて、二ヶ月ぐらいたったであろうか。夜中に姫からメールが届いた。「今すぐ迎えに来れる？話はある」もちろん私の返事は「すぐ行くね」これで終わりかな…。そう思いながらも久しぶりに姫に逢えるのだ。逢いたくて逢いたくて仕方なかったこの二ヶ月。微かな望みを信じ私は車を走らせた。

その後

今の時間は丁度0時を回ったところだ。私は車中で彼女と今までの事を思い起こしていた。憧れと願望で始まったこの恋。上手くいくはずもないこの恋が約一年間続いた事だけでもよしとしないといけない。元々遅かれ早かれ終わる恋なのだから。そんな事を考えてるうちに彼女が現れた。

「久しぶりだね。元気？連絡とれないから凄く心配してたんだよ。」

「まあ、なんとかね…」

「で、話して何かな？」

「わかった？」

「え？何が？」

「この前の事。わかった？って聞いているの。」

「推測だけはしたけど…」

「言ってみて。」

私は離れてた二ヶ月の間に確かに色々と考えていた。

「ひとつ思ったのは、こちらはこんな関係だし、ばれたら終わりだから人目のつかない所でないと危険ということ。だから普通にデートとかしちやって手とか繋いではいるところを見られる可能性もある。そうだったら俺はまだいいけど、姫ちゃんも子供にも迷惑かかる可能性があるからかなと思ってました。」

「よし。少しはわかってくれたみたいね。まあ、あいだ空ければわかってもらえると思ってたけど。」

姫はなんだか嬉しそうな顔をしていた。

「わかってくれたからご褒美あげるね。」

そう言うとき姫は私に優しくキスしてくれた。

「今日はもう時間ないからこれで我慢してね。」

私はされるがままにズボンからアレをだされた。姫の舌が凄く絡み付き、私は耐えられずすぐそれは終わってしまった。

「久しぶりで私燃えちゃった！気持ち良かった？私もしたくなっちゃったよ。だから：またこれからもよろしくね！」

私は一方的な彼女に、ただただ圧倒され自分の意見を言えたのかすら覚えていない。

「またね」

「う、うん。またね」

なんともお姫様らしいやり方である。高飛車でワガママで。でもそんな彼女の事がたまらなく好きだ。私達はまた、お互いに歩きだした。

普通の恋

私達は付き合い出してから二回目の春を迎えようとしていた。あれから順調に行くと思われていた日々だがやはりそう簡単ではなかった。

旦那さんが全然寝なくなり夜中に逢う事も次第に減っていった。それに加えて、彼女は小学校の役員になってしまい、私に使っていた有給休暇を小学校に回すようになった。だがそれは仕方がない事で私にどうこう出来る問題ではない事は、わかってあげなくてはならない。でも逢えないからこそ逢いたくなるのが人間である。私もそうだった。

彼女の考えがが変わってきたのも確かこの頃だったと思う：あれほど頑なに人目を気にしてた彼女だが、何故か突然大胆な行動をとるようになる。例えばだが、少し遠くのスーパーに夕食の買い出しに私を同行させ私がカートを押して彼女が食品をとる。おもいつきり人目につきそうな事だが、そうまでしてまでも私に逢いたかったのだろうか？

私はかなり疑問に思っていた。そんな毎日が続いていたある日、彼女が言った。

「あのさ、今度、夜桜見に行こうよ！今なら遊園地が夜解放されてて乗り物にも乗れるし、桜もライトアップしてるんだって。」

「俺はいいけど大丈夫なの？乗り物乗ったりしたいなら夕方くらいから行くなって事でしょ？家、出れる？」

「まあ任せなさい！大丈夫だからさ。今度のそっちの休みいつ？」

「確か水曜だね。今日から四日後だ。」

「わかった。じゃあ火曜の6時過ぎに決定ね！」

「了解……………」

意味がわからない…了解とは言ったものの何故こんなにも積極的になったのだろうか？私達は夜中に逢える時は相変わらずエッチをしたが、その時には何も話していない事をしようとしている。不安感があったが私は元々こういう普通のデートもしたかったから今回は何も言わず話しに乗る事にした。そして当日。

「どうかな？おかしくない？大丈夫？ねえってば。」

「全然大丈夫だよ！今日も可愛いよ、姫ちゃん！」

「嬉しい事言うじゃん。可愛いなんてさ。」

「いつも言ってるでしょ！逢うたびいつも言ってるんだけど。ま、今日はいつもよりもっと可愛いけどね」

他人が聞いてたら、なんともバカッフルな会話であろうか。でも私

は他人なんて気にしないし彼女に対しての感情はいつも素直に言ってきた。可愛いものは可愛いのである。何人かでもいいので共感できる人が居てくれれば嬉しい限りだ。

「よし、行くか！」

「うん！行こう！」

可愛い眼差しを向けられ、腕を組み、私は久しぶりにドキドキ感が戻ってきた。こういうのを望んでいたのだ。

まだ辺りは少し明るかったので私達は乗り物に乗る事にした。

最初は何に乗るのだろうか？可愛いらしくコーヒークップとかかなと思っていた。だが答えは。

「よし、最初はあれね。」

いきなりですか：私は内心そう呟いていたと思う。

「いきなり回転式コースター乗るの！？姫ちゃん、もしかして絶叫マシン好きなタイプなの？」

「うん。ダメ？ダメでも無理矢理乗るけどね！ほら、早く早く」

いつものお姫様ぶりがこういう所でも全開だった。でも、そんな彼女が私は好きで仕方ない。

「なんだあ平気なんだね。苦手だと思ってこれにしたのにな。」

「残念でした。俺はだいたい乗れるよ。」

少しばかり強がりを書いてみたが私は絶叫系はあまり好きではなかった。

泣き虫

私はそんな普通なデートもやっぱりいいなあと思っていた。その後色々な乗り物に乗り私達は普通のカップルの様にその時間を楽しんだ。辺りはいい感じに暗くなってきていた。

「暗くなってきたし、そろそろ夜桜を楽しめますか」

「うん！見に行こう！」

彼女は私の手を取り、桜の見えるポイントまで引っ張って行った。なんか今、凄い幸せだなあと私は感じていた。

「うわぁ！綺麗だね！」

「だね！でも姫ちゃんの方が綺麗だよ。」

私はお約束の台詞を言ってみた。見事にスルーだ。

私達は暗闇にライトアップされた桜を十分堪能してから最後に観覧車に乗ることにした。ここで問題が一つある。私は観覧車が1番苦手な乗り物だった。あのゆっくりとした動きでどんどん高度が上がっていくのが本当に怖かった。そんな事を知らない彼女は一人ノリである。

「最後に観覧車なんてロマンチックだね。夜景も見えるし、上から見る桜も綺麗なんだろうなあ。」

「そうだね…」

言葉数少なく私は言った。
渋々、私は乗り込んだ。

「あのさ、話していい？」

「う、うん。何かな？」

「どしたの？緊張してるの？もしかして怖いとか？」
凶星である…

「実は観覧車だけは苦手だね…なんか怖くて。」

「そうなんだ。ごめんね、私知らなくて。でも隣に私がいるから平気でしょ？」

彼女は心配そうな表情で、そう言ってくれた。こういうツンデレみたいな私に私はめっぽう弱い…。

「手握っていい？」

と、私は言った。

「いいよ。でもこれならもつと怖くないでしょ？」

彼女は隣に来て私を抱きしめてくれた。そしてその状態のまま語りだした。

「私達さ、この先もやっていけるよね？一緒にいて楽しいし、ドキドキするし、それに、あっちの相性もいいでしょ。」

「もちろん！この先も、来年もずっと俺は姫だけを好きでいるよ！だからうちらはやってけるよ。」

お互いに顔は外を向いたままの会話である。

「私ね、逢えた事に感謝してるの。でき婚で、なくなて結婚してしまつて、今まで毎日が辛かった。旦那は最悪だしもう嫌になつてた。そんな時にあなたが現れた。とにかく私に優しくて一緒にいると心の底から癒してもらえる。だからずっと一緒にいたい。ワガママで嫌な女かもしれないけどどうかこれから嫌いにならないで下さい。」

「うん。大丈夫、大丈夫だからさ、もう何も言わないでいいよ。ありがとう姫。俺はどこにも行かないからね！本当に愛してるよ。」

彼女は泣いていた。顔がグシャグシャになるほど泣いていた。私はその姿を見て思わずもらい泣きしてしまった。

「姫ちゃん…泣かないで」

甘い時間

「よくわかったから。もう泣かなくていいよ。俺がずっとこの先も傍にいるからさ！うちらは上手くやっていけるよ。」

「うゝん…ありがとう」

彼女は私の事を、きつくギュッと抱きしめていた。抱きしめながら少し震えているようにも感じた。

「ほおらっ！顔あげな。せっかくの可愛い顔がそれじゃ見えないぞっ。それと…泣いてる顔も可愛いけど、姫ちゃんはやっぱり笑ってる顔が一番可愛いよ！だから笑って！ほれほれ笑え〜笑っちゃえ〜」
私は彼女の笑顔が見たくて行動としてはどうかと思うが、くすぐってみた。

「アハ、アハハ。もおおう何やってんの。これ以上やると怒るよ！」

「やっぱり笑ってる方が可愛いね！」

「バーカ」

私達はお互いに笑いあい、それと同時ぐらいに観覧車は下に着いた。

「結局、夜景も桜も見なかったね。」

「でも俺には姫ちゃんの、とびっきりの笑顔が見れたよ」

「まったく：馬鹿なんだから。ちよっとさ、あそこのベンチで休憩しよ！」

私達はベンチに腰掛けた。明かりもそれほど明るい場所ではなく、少し薄暗い感じで良いムードだった。

二人は人の通行が切れたのを見計らってキスをした。とても優しい感じのキスだった。こういう場所だからだろうか、凄く胸が熱くてキュンとする。なんといっても私達にとっては初の遊園地デート。しかも夜桜のオマケつきである。胸が高鳴らない訳がなかった。

「ずっと一緒だよ、姫」

「うん。」

「それじゃ、そろそろ帰ろうか。遊園地も閉園時間みたいだしね」

「泣いたり笑ったりしたからお腹減ったー。」

「はいはい。かしこまりましたよ、お姫様。お好みの物を召して帰りましょう」

「それと、おんぶ！」

「今！？ここで？」

「うん！ちよつと疲れちゃった。ダメかな？」

「いいよ。さあどうぞ。」

なんとなくだったが私は幸せを感じていた。だが、疑問は解決していない。そうである。何故急に普通のカップルみたいにデートする事になったのかだ。先程、彼女の私に対する思いは聞けたが、デートの事は結局聞けていない。私は彼女をおんぶして自分の車に向かう途中に、おもいきって聞いてみた。

彼女の答え

「重くない？大丈夫？」

「全然！軽い軽い。今日は凄く楽しかったね。また来たいなあ。…
…あのさ、俺、聞きたい事あるんだけど？」

「何、何？」

「ずばり、なんで急にリスク背負ってこういう普通のデートとかするようになったの？なんだか俺、凄いビックリしちゃってさ。」

「ああ、その事ね…。」

彼女は少し間をとって話した。

「あのね、私も考えたんだ。もしね、これが逆の立場だったらどうかな？ってさ。そう考えたら私だって何処か行きたいと思うだろうし、そうじゃなきゃ私は嫌だし。私はワガママだからあんな風に思わせてしまったけど多分普通の人だったらそうはしらないと思ったの。旦那に嘘ついてさ、旅行でも遊びでも何処でもいけるじゃん。他の不倫してる人なら、そういう事してると思う…でもね、あなたは私が一回嫌だって言ったら、その後そういう事全く言わなくなったし、それでも私の前から居なくならないで、前と変わらずずっと傍に居てくれた。その事考えたら申し訳なくって、私のせいでツライ

思いさせてるのに何も言わずに……。このままじゃ、あなたが居なくなってしまうそうだった。だから、私が変わらなきゃって思ったの。それで短い時間かもしれないけど買物とかに付き合ってもらったりしたの。そのうち人目も思ってた程気にならないし、普通のデートもいいかなって思えてきた。だから誘ってみたんだ。恩返しじゃないけど、多分あなたは普通のデートもしたいのに、私のために我慢してる事に気付いたからさ。今までごめんね。こんなワガママで自分勝手な私だけどいいの？私じゃなければ、もっともつと楽しいデートも出来るんだよ？」

珍しく彼女は真剣に話していた。自信がないのだろうか、どこことなく細かい声だった。

「ふーん。成る程ね。でも、別にこれからもしたい様にやればいいんじゃない。俺はどんな形であれ、姫と一緒に居られるならそれだけで満足だよ。だから、無理してデートとかするならしない方がいいんじゃない？俺と一緒にいる時ぐらいストレスとか貯めさせたくないしね。俺の役目は一緒にいる時だけでも日常から解放させてあげて、嫌な事忘れさせる役目だもん。」

私達は車に着いた。

「大事な事言ってなかったね。俺は姫ちゃんのワガママな所とか、生意気な所とかさ、全部知ってて好きなんだよ。顔も性格もぜーんぶ好きなの。だからさ、俺の事は考えなくていいから素直に全身でぶつかってきなよ。俺が全部受け止めてあげるよ！」

「こんな人……今まで初めてだよ……多分これから先も現れない。
……なんでそんなに優しいの?……」

さっきも泣いたのに、また大泣きしてしまっている。

「わかんないの?じゃあわかるまで宿題ね。ちなみに答えは超シン
プルで簡単だよ。」

さすがに今回は私は泣かなかった。

「意地悪……」

「え?何?俺、優しいんじゃないっけ?」

「答えはわかってるもん……だから意地悪だよ。」

答えは凄く簡単だ。私がただ単純に誰よりも姫の事が好きなだけ。
ただそれを私から言うのではなく彼女の口から言わせたかったから
少し意地悪してみたくなったのである。

「お! 答えわかってる感じだね。さあどうぞ!」

「グスン……だからあ、あれでしょ、私の事が好きだからなんで
しょ!」

「せいか……! 良く出来ました……! そうだよ。大好きだから。今そ
れ以上の答えいる? 俺が好きなんだからそれでいいって事だよ」

彼女は泣きながら恥ずかしそうな顔をしている。私はちょっと、してやったりで楽しんでいた。

「恥ずかしい？ごめんね。でも言って欲しかったからさ。こんな俺嫌いかな？」

「好きだよ！私も大好き！あーっ恥ずかしい…でも、もうしばらくは言わないからね！馬鹿ぁ」

「そういう所も可愛いくて好きだよ。」

私はそっと頬にキスした。

「よし！飯行こう！飯！」

私は車を走らせた。今日の事は多分忘れないな…そう思っていたから現在も鮮明に心に刻まれていた。

誕生日

あの遊園地デートの後から私達は普通にデートをするという選択肢が加わった。

ちなみに、普通かどうかはわからないが何をするにも今までは私がお金を出していた。割り勘という言葉はうちらにはなかった。思い起こせばいつからこうなったのだろうか…。後々このお金の事で大喧嘩する事になるなんてこの頃の私は全然知るよしもなかった。

今は丁度4月。この4月、何を隠そう私の誕生月である。

「今月誕生日だね。何か欲しい物ある？」

「いいよ俺は。隣に姫ちゃんが居れば他は何もいらないよ。姫がリボン着けてプレゼントになって」

ここで今一度言うが、第三者が聞いたらそんな事言ってるの？こいつ馬鹿？と思うかもしれないが、何の照れもなく普通に言ってしまうのが私であるので、お付き合いください。

「嫌だよ。リボンなんて恥ずかしいじゃん。そんなのドラマとかの内容じゃん。私には絶対無理！」

まあ予想通りである。

「じゃあさ、当日ラブホでお酒飲んでさ、いい感じに姬ちゃんが酔っ払ったらコスプレして！それなら良くない？うちらラブホは結構行ってるけどコスプレはまだした事ないじゃん。俺へのプレゼントだと思ってさ、お願い！」

「わかったよ。わかりました。酔っ払ったらね。」

そして私はワクワクしながら当日を迎えた。こんな楽しい誕生日を迎えたのは初めてである。

私達は予定通りラブホに行きパーティーの準備をした。ちなみにこの日は彼女が有給休暇を取ってくれた。来る途中でデパートに寄ってオードブルなど様々な食べ物とワインやビールなどを買って持ち込んだ。まあそれも自腹だが気にしない。

「誕生日おめでどう！かんぱい。大好きだよっ」

まさにチュッという感じで彼女はキスしてくれた。

色々な話をしながらお酒を飲んで、彼女はトローンとなってきた。いいかんじだ。私は飲んでるふりをして彼女がその気になるのをじつくり待った。そして…

「結構飲んじやったかも。気持ちいいや。そろそろさあ、しよっかつ？」

彼女はそう言うのと私のズボンを無造作に触りはじめた。ここだ!と私は思った。

「するまえにさ、姫ちゃんのコスプレ見たいなあ。俺の事、もっと燃えさせてよ。」

「もぉ。今したかったのに。しょうがないなあ。何着て欲しいのお?」

彼女の言葉の語尾が伸びる時はかなりいいかんじの時だ。お酒の力を借りて、甘えん坊みたいになってそれがなんとも良い。

「うーん。ナースもいいしメイドもいいなあ。チャイナもいいし…。」

「はやくう。我慢出来なくなっちゃうよ」

「決めた!メイドが良い!姫ちゃんメイドが見て見たい!」

私はフロントに電話して衣装を注文した。来るまでの間に彼女は私のアレをいじりはじめた。

「ピンポーン!!」衣装が届いた。

「すぐ着替えてくるからソファで待っててねっ！」

どんな感じになるのだろうか。楽しみで楽しみで仕方ない。そして、ついにその時がやってきた。

「うわぁ！！！超可愛い！めっちゃ似合ってるじゃん！サイコーだよ姫ちゃん」

「そう？可愛い？なら良かった。」

彼女もまんざらではないようだ。

「御主人様、今日はいっぱい御奉仕させて頂きますからねっ。」

とてもいたについて、まるでホントにメイドのようだ。私は凄く興奮していた。彼女は私にまたがって腕を私の首の後ろに回してキスしてきた。最初はホントに軽く…そしてどんどん強く、熱くなってきた。

「御主人様、大好きです。沢山気持ち良くなって下さいね。」

凄い！まるでそういうお店で働いていたみたいなテクニクである。人間、いつもと違う衣装を身につけるだけでこうも変わるものだ

ろうか。私はもう気持ちが抑えられず、いつも以上に興奮していた。

「姫ちゃん…俺もう我慢できない。ベッドいこ。」

「私もはやくしたい。はやく御主人様…頂戴…」

私達は今まで何度となくエッチをしてきたが、ここまでお互い燃え上がったのは初めてかもしれない。私達はメイドの衣装のせいもあって何度も愛し合った。結局はお酒を飲んでエッチしただけだが私にとっては最高の誕生日になった。

「誕生日、本当におめでとう。愛してるよっ。今日はスッゴクゾクゾクさせられちゃったよ。これからはさ、たまにはコスプレしてしようね」

「俺もその意見賛成。今日はなんだかいつも以上に求めちゃったし。というか姫ちゃん反則。衣装着たままよがってる顔なんてみたら可愛いすぎで俺、理性ふっとんじやうよ」

「もう一回しちゃう？」

「うん！姫、大好き！」

その晩、家に帰り余韻に浸っていて私が寝ようとしていた時、一通

のメールが届いた。「もう無理………助けて………」姫ちゃん!?!。
どうしたんだろう。私は心配になり携帯片手にすぐに家を飛び出した。

夜中の出来事

時効は23時ぐらいだっただろうか、私はとにかく心配だった。車に向かう途中にメールをうった。「どうしたの？大丈夫？」車に乗り込み彼女の家まで急いで向かう。返事は返ってこない。そして彼女の家が見えてきた。そこで私の目に飛び込んできたのは、3階の玄関の外でなにやら衝突してる男女だった。彼女は6階建てのマンションに住んでいる。そして家は3階にある。私は急いで車を近くのレストランに閉店した飲食店にとめた。間違いだったらいいのだけど……そう思いながらあの男女が彼女と旦那さんではない事を祈った。足早に向かうと、なんと男性の方が女性の首に手をかけて今にもそのまま3階から突き落とそうとしているではないか。その時、私ははつきりと見覚えのある顔が見えた。……彼女である。

私は……あまりに突然の出来事にどうすればいいのか、わからなくなっていた。とにかくあの状況をなんとかしなければ彼女が殺されてしまうかもしれない。

私は覚悟を決めて走りだした。その時である。さっきまで首を絞めていた旦那さんが今度は彼女を抱きしめている。そして……キスしていた。私は今まで生きてきて体験した事のない、なんともいえない気持ちになっていた事を覚えている。経験ある方はいえるかもしれないが、自分の目の前で好きな女性が他の男に抱きしめられ、しかもキスまでされている……。その光景を、ただただ見る事しか出来ない自分自身。とてつもなく襲ってくる嫉妬心。私はそれ以上その場にいれなくなり、車に飛び乗った。車に乗り込み頭を整理してみようと努力するが整理もつかず何をしてよいのかも考えつかない。私は家に着いた。とりあえずメールをしてみようと思ったが文章が

思いつかない。考えていると彼女から逆にメールが届いた。

刹（せつな）

「さっきは変なメールしてごめんね。心配させちゃったかな？ 大丈夫だから安心してね。おやすみ」

私は正直に見たまま言おうか迷っていた。とりあえず返信してみた。

「そうなんだ。良かったね。心配で心配で家飛び出しちゃったよ。おやすみなさい」

これで良かったのだろうか？ 私は頭がパンク寸前だった。あの光景を見るぐらいなら行かない方がよかった……。ブルブルブルブル……。携帯がなった。

「もしかして見てたの？」

私は迷ったが正直に答えた。

「うん。首絞められてるあたりからね……。急いで止めに行こうと思ったら……。これ以上は言いたくない。でも、生きててくれて良かった。」

私は見た事ありのままを伝えた。数分後、

「そっか…ホントに助けに来てくれてたんだね。ごめんね。嫌な物見たよね…でも、私の意思じゃないの！無理矢理あなっただよ…信じてください。本当にごめんなさい。」

私は彼女の言葉を信じてみようと思った。

「もう謝らなくていいよ。俺は信じるからさ。だから、もう遅いし今日は疲れたろうから寝なさい！」

「ありがと。でも嫌な思いさせて本当にごめんね。明日絶対逢おうね！せっかくの誕生日だったのにツライ思いさせてごめんなさい。おやすみなさい。」

私はそれ以上返信はしなかった。私の彼女に対する気持ちは全く変わらないが、どこことなく虚しさが漂っていた。いくらこっちが好きだとしても、夜になれば彼女は家族の下に戻ってしまう。これはどうしようもない事実だ。私は彼女の事が欲しくてたまらなくなった。出来る事なら結婚して、子供とも仲良くして毎日楽しい家族生活を送りたいと思っていた。でもこの先もその夢は叶う事はない。当時の私はいつか、いつかと思いい、それを励みに彼女と付き合っていた。その励みも潰されると知らないままに……

苦悩の幕開け

次の日、私は仕事の後、彼女と逢う事にした。

「昨日は祝ってくれてありがとうね！超嬉しかったよ。あんな誕生日、初めてでワクワクしちゃったよ、また来年も楽しみにしてるからね！」

「ううん。私も凄い楽しかったよ！初めての事で興奮しちゃった。」

少し沈黙が続いた。

私は彼女を信じていたので攻めるつもりは毛頭なかった。この場合、私から切り出すのがベターなのだろうか？多分彼女も今まであんな体験がなかったから何て言えいいのか考えているのだろうか？私は自ら話しかけた。

「どうしたの？昨日の夜の事ならもう全然気にしてないから大丈夫だよ！」

「本当に？」

「うん。信じてるから大丈夫。だって、無理矢理だったんでしょ？違うの？」

「無理矢理だったけど…。キスされてたのは見てたんでしょう？だから私、あなたに、なんて謝っていいかわからなくて……」

みるみるうちに彼女の目から涙が溢れてきた。

「そうやってすぐ泣かないの！信用してるんだからさ！もう泣くな！怒るよ。」

と、言いつつも私は彼女の事を抱き寄せ頭をポンポンとした。

「前も言ったけど俺は姬ちゃんの事が好きなんだよ！それで良くない？他に理由いらないでしょ？俺がそれでいいって言ってるんだから、もういいじゃん！だからさ、笑ってよ！」

私は強がって、精一杯の言葉を彼女にぶつけた。本当は二度とあの時の事を思い出したいだけなのだ。あの話をされると自分でも整理がつかなくなりそうで怖いのだ。

「いいの？本当にこんな私で？」

まだ彼女は泣きべそをかいている。

「その台詞、この前も聞いたよ。いいに決まってるでしょ。だからこうして今日も逢ってるんだよ。嫌だったら逢わないよ俺。」

「いつも思うけど、あなたは私に優しすぎるよ。ズルイよ。」

「何が？俺にしてみれば、至ってこれが普通だよ。別に優しいのは元々なんだしさ。あ！でも他の人と比べたら俺の方が優しい人かもねっ！そこは自信持って言えるかも。」

「フ、フフフッ！何それ？そんな事言った人、生まれて初めてだよ。ハハハ。」

「ようやく笑ってくれたね。やっぱりその笑顔が好きだよ！」

「ばーか。でもさっき言った事、私信じるよ。ホントにこんな人、探してもいないもん。それと、こんな私の事信じてくれてありがとう」

なんとかあったかな…。私の心も落ち着きを取り戻した。でも、あんな事は二度とゴメンだ。それに、こういうやりとりはあまり自信がないのが正直なところだ。私は人を好きになると真っ直ぐになっってしまう癖がある。それが、いい方向に向いてればいいが、嫉妬心が人より何倍も多いため自分を見失いやすい。そんな私が人妻を愛してしまった…この恋愛には必然的に嫉妬心がついて回るだろう。

ここまで自己分析が出来ているのに今回はやめられない。それは、好きになってしまった人が誰か（旦那）のものだからだろうか……

私は……、ダメな人間だ

こんな事を思い、苦しみながら私の二年間が過ぎていこうとしていた。

友人

あれからは少しずつだが、お互いの関係も良好になりもう少しで三年目の記念日を迎えようとしていた私達に、ある出来事が起こる。これは7月のあくる日の出来事だ。いつもの様に仕事を終わらせ、彼女と買い物に出掛け、キスしてお互い帰路に着く。そして一日が終わってくかの様に思えたその日の晩。彼女から、いつもの様にメールが届いた。

「まだ起きてる？」

「起きてるよりメール待ってたよ。」

「お願い、すぐ迎えに来て。もうそっち向かって歩いてるから。」

いつものワガママ病だろうか…私の返信の前に行動をしてしまった。まあいつもの事かと思い、私は車を出す。

「了解、すぐ行くね！」

私が車を出して数分後、彼女が…何故か走って向かって来る。どういう事だ！？私は悪い予感がしていた…

「どうしたの？走ってくるなんてさ。何かやらかしたの？とりあえず乗って。」

「とにかくすぐ出して！早く！早く！」

私は訳もわからず車を出した。

「そこ右行って！あそこで止まって！」

慌ただしく彼女は言った。着いたのは近くの駐車場。それと同時に助手席の彼女は身を隠した。何事だ？
彼女は小声で、

「今、旦那に追われてたの。だから助けて欲しくて。多分そこいらへんに、まだ居ると思うの。バット持ってるから、すぐわかると思う。お願い、助けて！」

！！！！なんていう事だ……。よくよく彼女をよく見ると髪は乱れて、顔が少し赤く腫れている。旦那にやられたにちがいない。私は怒り狂いそうだった。その時だ、車の斜め方向にバットをもった男が歩いている。あいつが彼女の事を。男は周りをキョロキョロと伺っていた。

「今その道通ってるからまだ隠れててね。俺がいるから大丈夫だから！」

男はしばらく探していたが諦めたのか帰って行ったみたいである。

「行ったよ…姫ちゃん家の方に向かって帰って行ったよ。大丈夫？
怪我してるじゃん！何があったの！？」

「海…海、連れてって。」

私はそれ以上その話題には触れなかった…彼女から言ってくれるのを待つ事にした。

「よし！海だね！連れてくよ。すぐ出発しよう！」

私達は海に向かって走り出した。…明日休みで良かった…心の中でそう思った。しかし、私の車には当時まだナビというものがなく、私は海に行った事がなかった…。どうしよう…。そんな時、ある一人の人物が私の頭をよぎった！そうだ！あの人ならきっと力になってくれる。

「姫、俺さ、海行った事ないから友人に力借りていいかな？電話で道聞きながらでもいい？どうしても海に連れてってあげたいの。」

「うん。大丈夫。私も海見たい…」

「よし！決まり。電話繋がってくださいよお。」

「もしもし、夜分遅くすいません。力貸して頂けませんか？海に行きたいんですけど道がわからなくて…」

その人は快く私の力になってくれた。私の年上の友人で、ずば抜けて道の知識が物凄い。ここではSさんと呼ばせてもらいます。

その後、Sさんの驚くべき記憶力で最初から最後まで道の的確に教えて頂いた私達は海に着く事が出来た。

「Sさん、今無事に海に到着できました。本当に感謝しています！こんな夜遅くに無理言って、すいませんでした。」

「全然大丈夫だよ。とにかく無事ついて良かったよ。彼女さんの事、うまくやれよ！なんかあったら何時でもいいから電話してきな。それじゃ。」

なんとも有り難い。Sさんは数少ない私達の関係を知っている人で、アドバイスをしてもらったりと、何かとお世話になっている大変貴重な年上の友人である。そのSさんの彼女のYさんも同等で、私が悩んでる時などに親身になって考えてくれる、とても貴重な存在である。この二人とは今でも信頼できる相談相手で、現在も私の支えになってくれる……。人の優しさというのは、他に何も変える事が出来ない凄い宝物である。私はこの二人にそれを教わったと思っている。

「さあ、着いたね！っ、寒いね。夜の海は。姫ちゃん寒さ大丈夫？」

「寒い…凄く寒いけど、あなたが隣にいれば大丈夫だよ。」

正直嬉しかった……………。

なんだか今日の彼女は、いつもと違う雰囲気である。どこことなく遠くを見ているようだ。私はある事を思いました。

海にて…

そうだ！確か車のトランクに夜中に行為をいつでも出来るようにと毛布を二枚積んでいた事を思い出した。

「姫ちゃん、ちょっと待っててね。いいもの取って来るから。」

私は急いで砂浜の上を走り、車まで毛布を取りに行った。想像以上に夜の海辺は寒く、このままではとてもじゃないが座ってゆっくり話など出来ない。私は平気だが、もし彼女が風邪でもひいたら大変な事だ。

急いで戻ると彼女は、やはり寒いみたいでブルブル震えながら立っていた。

「おまたせ。毛布あるの忘れてたよ。でも良かったよつんどいて。」

一枚を砂浜の上に敷いて、もう一枚は彼女を包みこむように掛けてあげる事にした。

「あったかい！ありがとう。でも、なんで毛布なんて持ってたの？前からあったの？」

「実はさ、シート倒しただけじゃ、アレするとき痛いかなと前々から思ってた、毛布をシーツ代わりにすれば姫ちゃんも喜ぶかなと思っ、今度する時用にと積んでたの。でも意外な形で役立って良かった。」

「もう、本当にエッチなんだから。でもそういうところ、好きだよ。常に私に気使ってくれてるんだね。ホント優しい……私、嬉しいよ……。」

また彼女の目がウルウルしてきた。しかし今回の涙はいつもと違う涙っぽく感じる。ホントに嬉しくて泣いてるみたいだ。その事が私の心に伝わってきた。

「あなたは寒くないの？一緒にくるまろう。寒くなくても一緒にくるまっ。」

なんだか今の彼女は、いつもより小さく、そして弱々しささえ感じる。今日は本当につらかったんだろう……

私達は寄り添い、毛布に包まって静かに流れる波音に耳を傾けていた。ザザー……ザザー……と、心地好い波音が私達を包み込んだ……。

夜の砂浜に座って、暗闇の中を静かに流れる波、そして海辺を優しい光で照らす月、その回りを時に強く、時に弱く、様々な輝きを見せてくれる星達。その場所は、まるで私達二人だけの空間かと想え

てしまう程、素晴らしい世界だった。何もかも、時間すら忘れてしまふ。

そしてそれは彼女にも何かしら影響が出たのか、ここまで頑なに話そうとしなかった今日の出来事をついに私に話してきた……………。

私の決意

静かに彼女は口を開いた。

「私ね：私の問題だから、あなたに知られたくないからずっと黙ってきたけど：事ある毎に旦那から暴力を受けてるの。あなたに傷の事とか言われた時、転んだとか、ぶつけたとか言ってきたけど、ほとんど全部旦那の私への暴力だったんだ。私達夫婦は昔から上手く行ってなくて、向こうが気に入らない事があると、すぐ蹴られたり、水かけられたり、髪引っ張られたりと、それが当たり前の様になった。でも今まではそれも全部自分のせいだと思って耐えてこれたけど、今日は子供達に水かけて、灰皿投げ付けてきたの。だから許せなくて、私も子供達守るために反抗しちゃったの。そしたらバット持って来て、殺してやるって言われて……。私、もう嫌だよ：あんな人と一緒に生活できない。このままじゃ、私も子供達も何されるかわからない。だから家飛び出して来ちゃったの。そしたら追って来て、その後はわかってる通りで、今ここにあなたという。」

彼女は泣きながら私に申し訳なさそうに話してきた。

「そっかあ：今までつらかっただろうに……。ごめんね、気づいてあげられなくて。ごめん……。」

「なんで謝るの？謝るのは私の方でしょ！」

「だってさ、言いたくても言えなかったんでしょ？言ったら俺の性

格だから、旦那の事殴りに行くとか言いだしそうだからでしょ？俺に余計な心配かけたくないからなんでしょ？」

「うん…。その通りだよ。だって実際、旦那がバット持って表れた時、見たこともない顔してたし、かなり怒ってた感じしてたから。こんな話したら、またあなたをそういう気持ちにさせちゃうでしょ？」

こんな状況だが私は嬉しくもなっていた。

「うちらって知らず知らずお互いの事よく理解してるんだね。だって、思ってる事一緒だもん。」

私は続けた。

「姫さ、俺とこのままどっか行っちゃおうよ！お互い全て捨てて、二人きりで暮らそう！姫の事は俺が何があっても守るからさ！」

あながち嘘はついてない。私は本当にそう思ってた事であつたし、彼女となら、この先苦しくてもやっていける勇気も自信もあつた。自分がこの人を護らないで誰が他に護るというのだ。私意外の人とは上手くいくはずもない。彼女の隣には私しかない。自信過剰かもしれないがこの頃の私は本当にそう思っていた。

彼女はずっと泣いている。

「ありがとう…本当にありがとう。こんな私の事を好きになってくれて、しかも…全て捨てて一緒になろうなんて言ってくれて、今の私にはもったいない言葉です…。私は……あなたと一緒に生きたい。」

「俺もお前と一緒に生きていきたいよ。これまでもずっとそう思ってたよ。苦労はかけるかもしれないけど、きっと幸せな生活が待ってる。姫……、俺と一緒に行こう！」

「うん……。」

私の胸で彼女はワーワー泣いている。もうどれぐらい経ったのだろう…。私は彼女をきつく抱きしめた。こんなに、か細かったのかと思うほど彼女は小さくみえた。そんな私達のやりとりをみていたばんやりとした月が、私達を優しく照らし出してくれていた。

「愛してるよ姫ちゃん。」 「私もだよ…。」

二人は優しく長いキスをしてから立ち上がる。

「行こうか…。」

彼女はまだ少しベソをかいている。私はいつかの様に彼女をおんぶして車に向かった。

「あのさ…。」

「何？」

「苦勞は嫌だからねっ」。

「はいはい。かしこまりましたよ、お姫様…。でも今日は言わせてもらっちゃお、バーカ！」

「フフフツ。ハハハツ。」

「調子でできたじゃん！それでこそ俺のお姫様だよ。俺が大好きな姫だ。」

車に到着した。私達は車に入りもう一度をキスをして出発した。この時私は希望と決心をして、なんとしてでも幸せにしなきゃと思いアクセルを踏み込む。

…………でも…………その決意も…………この後すぐに無意味だと思わされる事になるなんて…………私は知るよしもなかった…………。

その後…

時刻は深夜3時過ぎぐらいであろうか。私達はお互い泣いたりして疲れていたの宿に向かった。

「とりあえずこの辺のホテルで休もうか。もう日の出が近いし、お風呂入って一緒に寝よ。そして起きたらこれからの事考えよう。」

「そうだね。私も泣きすぎて目は腫れちゃってるし、もうスッピンだし。お風呂一緒に入って、洗いっこして一緒に寝たいなあ。」

私達はホテルに入った。入室してまず私はお風呂にお湯をはりにいく。彼女は、よっぽど疲れていたのかベッドに横になってぐったりしていた。とりあえず私はお酒を冷蔵庫からだし、飲む準備をしていた。

「お風呂、もうそろそろいいみたいだから軽くビール飲んだら一緒に入ろ！ほら、姫ちゃん起きて！」

私は彼女を起こしてビールを口移しで飲ませてあげた。ある程度アルコールも入って、いい感じになってきたので二人で風呂に入って洗いっこをして風呂出る。二人とも余程疲れていたのか、髪も乾かさず、裸のままガウンも羽織らないでベッドに横たわった。私達は布団に入り、私は彼女に腕枕をして軽くキスをした。

「おやすみ、愛してるよ姫ちゃん！」

「ねえ………。して。今は凄く……して欲しいの。だから……寝るまえにいっぱい愛して……。」

私は何も言わず彼女の言う通りに彼女を抱いた。いつも以上に長いキスをして、今回は特に優しくしてあげた。耳元で少し言葉をかけたりすると、彼女の身体もいつもより感じてみたいでビクンビクンと波打つ。

「今日は凄く優しいんだね……なんか、あなたの気持ちが全身に凄い伝わってくるみたい……暖かくて気持ちいいよ………もつとして……何もかも忘れるぐらいもつとして……。」

「うん……本当に愛してるよ。俺も凄く気持ちいいよ。これからはずっと一緒だよ……。」

彼女はまるで、初めてするかのように身体を悶えさせてクネクネしている。そして、なんとも妖艶な激しい声をあげながら絶頂を迎えた。

「どんな事があっても俺が傍にいるからね。」

「うん。信じてるよ……。」

私達は抱き合いながら眠りについた。

ここまででは本当に良かったんだ……。幸せだった。これから一緒に
なるはずだったのに……。私の理想は一本の電話で脆くも崩れ去る
事になる。

私達が抱き合ったまま眠りについてから、しばらく時間が経過する。

突如、携帯の着信音が部屋になり響く。私は眠い目を擦りながら起
きた。どうやら私の携帯ではないみたいだ。彼女はまだ寝ている。
私は寝ぼけた状態で彼女を起こす。

「おはよう。起きた？」

「眠いよお。何かあったの？まだ寝ていたいよ……。」

「なんか姫の電話鳴ってるんだよ。」

「取ってえ。……！！！！！！」

彼女の表情が一変したのがわかった。

「誰？旦那？子供？」

「お母さんだ……。どうしよう……。……。」

彼女のお母さんからの電話で事態は急変する。そして私は昨日の夜の出来事が、ただの独りよがりだった事に気づくのである……。

残酷な現実

「なんでお母さんから電話がかかってくるんだろう…どうしよう、出たほうがいいかな？」

彼女はソワソワしている。

「多分だけどさ、旦那が子供が心配になって、姫ちゃんのお母さんに連絡いれたんじゃない？理由は一晩たっても戻ってこないからじゃないかな？それにお母さんそこにもいない訳だし、お母さんも心配で電話してきてるんだと思う。」

「じゃあ電話出たほうがいいの？私…なんて答えていいかわからないよ…。」

「とりあえず今までの旦那の悪行を言って、それから俺の事話せばいいんじゃない？俺の事は言いたくなかったら後回しにしてもいいから、とにかく旦那が子供にした事で頭にきて家飛び出したって言えればいいと思うよ。」

「……………わかりました。」

ここで敬語！？私は凄く嫌な予感がしてきた。彼女が敬語を使う時は悪い事が起こるイメージしか浮かばない……。

「やっぱりさ、無視してもいいんじゃないかな？まだ姫ちゃん心の整理ついてないみたいだしさ。」

私はとっさにそう言っていた。

「ごめんさい。…そうかもしれないけど、私……、お母さんには心配かけたくないから電話します。」

私は何も言わず、彼女のやりたいようにさせた。この選択を、私は今でも後悔している。是が非でも電話させるべきではなかったと思う。この選択をしたばかりに駆け落ちは見事に無かった話になるのだ。あの時強引にでも電話をやめさせ二人で何処かに行ってしまうえばよかった。もしかしたら、どのみち無駄なあがきかもしれないが、何もしなかった事に、後悔の念が後を絶たないのは事実だ。

「……………もしもし、お母さん。私です。心配かけてごめんさい。私は元気だよ。でもね、もう家には帰りたくないの。このまますきにさせてください。もう耐えられません。」

彼女も最初はよかったと思う……………。でも少し話しているうちに……………。

「わかりました…とりあえず今回は家に帰ります。話を聞くだけ聞いてみます。子供達も心配だしね。またこっちから電話します。」

またね。」

！？ ！？ ！？ はい？家に戻る！？何言ってるの？どう
いう事？昨日の事はなんだったんだ？俺はただのピエロなの？もの
凄く決心して…これから彼女を何が何でも守って行くって決意した
のに……今行われてる電話のやりとりは何だ？

私の頭の中があらゆる事で侵されていく…これはまだ夢の中なのか
？これから彼女と一生をともに生きると自分に誓ったんだ！きつと
これは夢だ！私の心が夢見てるに違いない。そう思っていた……
……………

「ごめんね…私、家に戻ってもう一回話しあってみる事にした。且
那もやり過ぎたみたいで反省してるみたい…お母さんには、そう言
ってきたみたいだから、子供達の事も心配だったし、一度家に帰っ
てみるね。」

「……わかった……。」

私にはこう言うしか残されていなかった……………。

やはりこの一連の事はどうやら夢ではなく現実らしい。私は何が何
だかわからなくなってきている。理想と現実……この間を人間は無
情にも行き来する生き物だ。私も、その一人となってしまうていた。
私は……………彼

女の一時の感情に躍らされていた哀れな人間の一人なのだろうか……？。少なくとも、こちらは本気で愛していた。彼女さえいれば、他にはなにもいらないとまでも思っていたのに……現実はいくらにも残酷だと思えて仕方ない。結局のところ、私の独りよがりでしかない事が今回の事で不運にも証明されてしまった。これは、紛れもない事実であり現実だ。この時の私は、それを受け入れるしか残された道はなかった……。なぜならば、この時の私には彼女と別れるという選択肢が残念ながら存在していなかった。私は馬鹿で愚かだ……。でも……。どんなに心を傷つけられても当時の私は彼女の事を愛してやまない人間だった……。……。

私は……彼女の事を家まで送り届けた。車中、何もする事が出来ない自分自身に嫌悪感すら感じていた。私は彼女の事になると……。……。本当にダメな男だと痛感するが、それでも彼女を嫌いになんてなれない。私はこれからどうやって彼女に接すれば良いのだろうか……。

「またね。なんかあったらすぐ呼ぶんだよ！いつも傍には俺がいるからね！それじゃあまた……。……。」

「うん、本当にごめんさい。でも……。……、あなたの気持ち凄く嬉しかったよ！また連絡するね。」

そんな台詞は聞きたくなかったんだ。出来れば今は、別れの台詞を言って欲しかった。そう言ってくれないと、私はまた彼女を助けてしまう……。……裏切られたのに……。……またきつと助けてしまう。

どうせならこの呪縛から救って欲しかったんだ…。私からは…別れようという選択肢がないのだから……。私は…。どこまで彼女の虜なのだろうか？

私は……。彼女にとって、どういう存在なのだろう……。……私は今それが知りたい……。……

そして数日後、彼女から連絡が届く事になる。

あの日から私は、頭がおかしくなりそうだった。こんなにも苦悩を味わった事は今までで一度もない。

それでも……。私は連絡を待っていたんだ。彼女からの連絡を……。

無限回廊

電話が鳴った…。彼女からの電話だ……。何を話せばいいんだろう……。

「……………もしもし。」

「もしもし、元気かな？この前はごめんね、久しぶりに逢わない？」

私と違って彼女の声は元気でイキイキとしていた。

「……………別にいいけど逢って何するの？する事あるならいいけど、ないなら別に今度でもいいよ。」

私は何故か「今度」という言葉を使っていた。吹っ切れたと思うっていても、私の脳は、そうは思っていないみたいだ。

「とりあえず逢おうよ。私、あなたに逢いたいの。理由はそれじゃ駄目？」

私は彼女とこの先、どうなりたいんだろうか？

「わかった。いいよ、これから迎えに行けばいいんですかね？」

「うん。じゃあ、いつものところで待ってるね。」

私はとりあえず行ってみる事にした。もしかしたら、行けば答えがあるかもしれないからだ。何の希望も期待もせず私は向かった。

「久しぶりだね。元気してた？ 逢えなくて、私寂しかったよ。」

「うん…まあそこそこ元気でやってます。」

今度は私が敬語になってしまう。

「この間は本当にごめんね……。私はあの後なんとかなったから心配しないでいいよ。とりあえず私の方は、また元通りになったからさ。色々ありがとうね」

この人は何を言ってるんだろう？ 自分の事はなんとかなったから心配しないでって言われても私には訳がわからない。私が聞きたいのはそんな事ではない…。

私の事はどうでもいいのであろうか？

「なんかさ、いつもと雰囲気違くない？きのせい？」

私はその言葉でプチンと頭の中の何かが切れた。

「何なの？何様のつもり？あの時俺がどれだけ決心してお前の事一生守っていくつもりでいたかわかってんの？お前のために何もかも捨てて、必ず幸せにしてみようって、ゼロからスタートしようって思ってた俺の気持ちはどうでもいいわけなの？その事すらもう覚えてないわけ？ふざけんなよ！俺はお前の人形じゃないよ！」

私は完全に頭に血がのぼっている。錯乱している。でもそれが当然だと思った。

「怒るよね、そりゃ怒られても当然だね…。あなたは相当の覚悟して、こんな私なんかを受け入れてくれようとしていた。それなのに私は家庭に戻った…。ごめんね…。ごめんさい…。あなたの想いを裏切ってしまったって本当にごめんさい…」

そう言うと、彼女はいつもみたいにまた泣き出した…。もう何度目だろう…。この茶番劇は。もう涙なんかに騙されない！私はある覚悟を決めた。

「別れよう。こちら、このままじゃどうしようもないよ。終わりにしよ。今までありがとう…。本当に姬ちゃんといれる時間は楽しかったよ！ありがとう…。」

私は自ら別れの言葉を彼女に言い放った。

これで終わりだ……。これでいいんだ……。もう辛い思いはしたくない。

だが彼女の返答は……。私の想像とちがうものが返ってくる事になる。

「嫌だ。別れたくないよ。私にはあなたが必要な。今までの事は全部謝るからこの間の事は、どうか許してください。お願いします。あなたを本当に失いたくないの！まだ好きなの！離れたくないよ！お願い……」

彼女は瞳いっぱい涙をためて必死に想いを私に語りかけてきた。

私は……。……。……。彼女を許した……。自分でもよくわからないが、彼女を許してしまった……。……。何故なんだろう……。その時の私は彼女を許してしまうのだ。客観的にみると自分が本当に馬鹿に思えてくる。

「わかった。わかったから……また付き合う事にする。だから泣くなよ。」

「本当にあなたの事、裏切ってごめんさい。またいままで通り、私とお付き合いしてください。」

「…うん。いいよ!。これからまたお互い頑張っていこう!」

「そう言ってくれると思ってた。ありがとう! 私はあなた以外は駄目なの。あなたなら私を幸せにしてくれる。また、エッチしてくれるでしょ?」

「もちろん! 今すぐにでもしたいぐらいだよ。本音を言うと、俺もまだ大好きで仕方ないんだ。」

こうして、別れられるはずだった彼女との恋愛が、また息を吹き返す事になったのである。なんであんな事までされたのに別れられないのであろうか? それは未だに謎だ。ただ言えるのは、手に入らないからこそ欲しくてたまらなくなり、どんな事をされても最終的には許してしまうのだ。

私は、そんな女々しくて弱い自分が大嫌いだ。誰でもいい……………
…誰か私を救ってください……………。

色々あったが、彼女との二年目、三年目は終わりをづけようとしていた。

そして…

一時の休息

私の女性の知人で、名言と言えるかは不明だが、こう言い放った人がある。

【男と車は三年で飽きる】

この言葉が今後私に刺さる事になる……………。

あの駆け落ち事件から、私達は最初の頃よりも、なぜだか少し距離を開けて付き合う事になった。この頃から夜中に逢う事も一切なくなった。理由は単純で、夜中に出ていくリスクが高すぎると判断したからだ。

最初はお互い燃え上がっていたから平気だったが、私も…あのような事があったので別に無理して逢う必要はないと思ったのだ。というか、あんな想いをもうしたくないと言った方が正確かもしれない。そんな状態で私達は付き合っていた。

色々な事があったが、なんだかんだで彼女と付き合い出して三年が過ぎた。前であつたら、それこそ逢うたびにエッチを求めていたが、今は週に一回すればよいほうだ。しない時は二週間で一回であつた。私はこうなっても彼女の事が好きで、私は、日頃しなくなったぶん、逢えば何度も求めた。だが彼女は少しドライになってきていたのだ。

今日は四回目の記念日だ。私達はいつも通りラブホでお祝いする。

「もう四年目なんだね。早いなあ。こんなに続くと思ってなかったよ。これもひとえにあなたのおかげでここまで続けられるんだよね！ありがとう！チュッ」

彼女は私が喋る前に軽めに私の口を塞いだ。

「そんな事ないよ。姫ちゃんだって色々してくれてたし、俺だけじゃないよ、ここまでやってこれたのは。お互いツライ想いしてきたけど、そのつど手をとって乗りきってきたじゃん。だから二人で頑張ったからここまでこれたんじゃないかな？」

「そうかなあ…。全部私のワガママで問題起きてるし、どう考えても私が悪いよ。普通の人ならとくに別れてると思うよ。でも、相手があなただから上手くやってこれてるんだよ。」

読んで下さっている皆様はどう思ってくれていますでしょうか…。彼女の言うように私が相手だから、やってこれたのでしょうか？私は、自信過剰かもしれませんが自分だから彼女とやってこれたと思っています。共感していただけの方が、少しでもいらっしゃれば幸いです。

「とりあえず、せっかくの料理も冷めちゃうから早く乾杯しちゃおうよ！」

「それもそうだね。では、四年目突入にかんぱうい」

いつ以来だろう…私は彼女との甘い時間を過ごした。やはり私はこういう甘い恋愛が好きみたいだ。それから私達はほろ酔いになり、記念日という事も重なり、気分が高まってきた。

「今日はいっぱいイジメちゃうぞおう。そして…私の事も…ねっ。」

少し恥じらいながら言われると、なぜだか無性に興奮してくる。私は耐えられなくなり襲おうとしたが、彼女はそれをひらりと交わす。

「もおおう、せっかちなんだから、まだダメだよつ。ほら、飲ませてあげるからもっと酔っ払って。そしてもっとエッチになって。」

そう言うとは逆に押し倒され、口移しでお酒を何度も飲まされた。

薬指

彼女のその行為はなんとも続き、私はかなり飲まされてしまった。

「大分いい感じかなっ？」

そう言うとは今度はお酒の代わりに舌を何度もねじ込まれる。お酒の効果も相重なって私はそれだけでトロンとなってしまう。気持ちがとてもよくなって、今にも溶けてしまいそうになる。その後も彼女の攻めは、やむことがなくどんどんエスカレートしていく。三年付き合っていて、それなりにエッチはしてきていたが、まだ私の知らない、とてもエッチな彼女がいる。まだまだお互い楽しめそうだと思っていた。

「どうだった？気持ち良かったかな？私もかなり興奮しちゃって、今日はいつもより凄く良かったよ！」

「俺もヤバイくらい興奮しちゃって理性吹っ飛んでたよ。なんか今日は野生化してみたみたいもん。姫ちゃんは、まだまだ色々凄いひきだし持ってるんだね！もう最高だよ。」

「エヘヘっ。でも、今日は特別サービスだよ！毎回はしてあげられないからねっ。いままで私のワガママでいっぱい迷惑かけてきたし、記念日だから最高のサービスで気持ち良くなって欲しかったんだあ。」

凄いい嬉しかった。ただ、私は自分の事を凄いい単純だと改めて思った。自分で言うのもおかしいが、今まで散々な事にあってきた。それをたった一回いい思いをさせて貰ったら今までの事を簡単に許せてしまふ……。

よく女性陣は男ってホント単純だね。と言う言葉を聞くと、思うが、まさに私もその典型的な男の一人である。

実は私は今日の記念日のために前から少しずつ貯金していた。彼女に今までプレゼントも、もちろんしてきたが、四年目に突入する事もあるって二人にとって何か特別な物が欲しかった。

「あのさあ、ん」と……。

「何？もう一回？少し休もうよ。激しかったから痛くなっちゃった。チュッ」

彼女はエッチの事だと思っているみたいだ。可愛らしく私のおでこに軽くキスをしてきた。

「いや…、もちろんしたいのはしたいけど、そうじゃなくてね……。」

「じゃあなあにっ？」

なんとも可愛らしく私を見つめてくる。恥ずかしいがノックアウト

寸前だ…。

「左手出して。」

「!?!? 何するの? なんかに怖いんだけど…。痛いのは嫌だよ。」

私は彼女がトイレに行っている間に枕の下にプレゼントを忍ばせていた。

「これ。四年目入ったから俺からのプレゼント。物が物だから、ちよつと気持ち的に重く感じてしまうかもしれないけど…。」

「えっ!?!? 指輪なんてどうしたの? いつのまに買いに行ってたの? 休みの日は私と逢ってたのに…。いいの?」

「うん、いいよ。姫ちゃんに似合うと思って買ってきたんだ。逢えない日に仕事終わってから何回か通ってこれに決めたの。どうか….:….:….:? やっぱ指輪じゃ重すぎるかな? 貰ってもつけられないし迷惑だよね…」

私も考えて悩んだ末、結局指輪を選んだのだが、彼女には家庭があるし、指輪なんて貰っても普段つけられないのではないかとわかってはいたが、私はどうしても指輪を付けて欲しかったのだ。幸いな事に、彼女は旦那からの指輪を普段からしていない。

「迷惑なわけないでしょ！凄く嬉しい……。その指輪、はめてくれる？」

「サイズ合うかなあ…？かなり心配なんだけど…。」

私は彼女の左薬指に買ってきた指輪を恐る恐るはめてみた。結果は……。

「わああ。ぴったしだ！、私の指のサイズわかったの？この指輪、凄くデザイン可愛いね！私、こういうの凄く好きなの！本当に嬉しい…。グスツ…グスツ」

「泣かないでよ。それに、まだ終わりじゃないよ。俺にもはめて。」

そう。私はペアリングを購入したのだ。彼女の左薬指に指輪がないのは前から知っていた事だから、もしかしたら私が買った指輪ならしてくれるかと思って指輪をプレゼントしようと思ったのだ。それに、この指輪で二人の関係をお互いに意識しあえるようになればいいなと考えていた。

「この指輪、ペアなの？超素敵！最高だよ！私、今日からこの指輪ずっとするね！はいっ、あなたにもはめてあげる。……本当に嬉しくて涙がとまらないよ…。」

彼女は本当に嬉しそうな表情を浮かべながら泣いている。そして、何度も何度も私がプレゼントした指輪を涙を流しながら眺めている。本当に気に入ってくれたみたいだ。

「良かった…気に入ってくれたみたいで。内心、超ビクビクしていたよ。でも、姫の嬉しそうな顔みてホッとしたよ。ありがとう、姫ちゃん。これからさ、逢えない時、ツライ時、寂しい時、その指輪見て俺の事思い出してね！これでうちらはいつも繋がってるからね。大好きだよ、姫ちゃん。もう泣かないで。」

「ヴワーン……グス……、ありがとう…、ありがとう……。こんな…私なのに、あの時…あなたを裏切ったのに…私、あなたに応えられないのに…。」

私は…、彼女を引き寄せて、力の限り抱きしめた…。

「いいから、その事はもういいから。たとえば、今一緒にいられなくとも、時期がきたら一緒にいられるかもしれないでしょ！だから…俺はそれで十分だよ。すくなくとも今は隣にいてくれてるし、こうやって愛しあえる。それだけで俺は幸せなんだ。だからさ、あんまり自分を責めないでよ！俺は十分幸せだから。」

私達は再度お互いの想いを確認できた。今日からまた頑張って生きて行こう。私には、結婚は出来ないかもしれないが今隣には最愛の人がいる。それでいいじゃないか！【結婚】という言葉は心の奥底

に鍵をかけてしまっておこう。……………
今は…そういう恋愛でもいいじゃないか……………私は……………何度も自分自身にそう言い聞かせた。

些細な対立で…

今回の記念日で私達はお互いの意思を確認しあえた。彼女はあの日から本当に毎日指輪をしてくれている。特に旦那からは何も言われてないみたいだ。

私は素直に嬉しかった。

そしてそれからは順調そのもので、またお互いトキメキみたいな気持ちも戻ってきていた。だが…やはりというか、そんな幸せは決して長くは続かない……。

彼女は色々な理由で今まで勤めていた会社を辞めて、他の会社に派遣社員として行く事になった。季節は冬を迎えようとしていた。

そんな十一月のある日…。

「新しい会社は慣れた？周りの人達はどうか？みんな優しくしてくれる？」

「うん。今回はいい感じだね。經理の仕事も大分解るようになってきたし、楽しいかも！」

ここで私達にとって一つの問題点がある。彼女は今まで平日休みがある職場を選んできたのだが、今回は土日休みの仕事なのだ。私は

シフト制のため平日の休みが多い。そして土日は彼女の旦那も休みなので彼女も家からなかなか出られないのである。必然的に逢う時間が作れなくなってきてしまったのだ。私が土日に休みを取っても彼女が出れるかどうかは謎だし、土日は周りの人達も休みが多いので二人で行動するのは平日よりもリスクが伴う。かと言って、彼女はまだ勤めて間もないので有給休暇も発生しておらず平日に休みを取るの難しい…。まさに八方塞がりになってしまったのだ。そんな日々が続いて、お互いイライラが出てきてしまっていた。

「X'masは休み取れるんでしょ？取ってって言われたから俺は取ったよ。」

「ゴメン…。無理そう。」

「え！？取れて言ったの姫ちゃんだよ？それなのに無理って…。」

「なんか年末で経理の仕事がいっぱいあるみたいでさ、頼むから出てくれてって言われちゃったの……………」

「いや、俺もその日はイベントデイだったけど、取れて言うから色々理由つけて無理して休みいれたんだよ！」

「私も最初はそうだったんだけど経理部長がどうしてもって言うから……………」

「わかった。…もういい」

「怒らないでよ。悪いと思ってるから、ごめんで謝ったんだし。…ごめんね。」

私が休みを取ってくれと言ったんなら怒りもないが、今回に限っては、彼女の方から言ってきたのだから怒り心頭である。私は上司に何度も何度も頭を下げて、ようやく許しを得たというのに…。

そんなやりとりの中、彼女が豹変した……………。

「なんかさ…、もういいや、めんどくさくなってきた。どうせ私が全て悪いですから…：しばらくほっといてくれないかな、顔も見たくないや。」

「何逆切れしてんの？たかが休みが取れなかっただけでしょ？そんなんで、こちらは終わるわけ？」

「多分そうなんじゃない…。そんなもんなんだよ、うちらなんてさ。だからさ、そんなに私の事嫌ならもういいって！」

「別に嫌になってないし、ただ理不尽だったから怒ってしまっただけじゃん。」

「だ・か・ら！そういう言い方とかが凄いムカつくんだよ！今まで言わなかったけど、ちょいちょい私がムカつく言い方してくるんだ

よね。それに、もう飽きてきてたし！だから今回の事で決心ついたわ。」

「なにそれ？言いたい事あったなら前から言えばよかったじゃん！言われなければ分からない事だってあるんだからね！」

「とにかく今はもう無理！私がまたやり直せると思う時がくるまで、そっちはメールも電話もしてこないで！さよなら。」

あまりにも一方的だった。そしてショックだった。私は相手が嫌がる事はしてきていないつもりだった。だがそれは、つもりでしかなかったのだ。言われなきや分からない事は誰にでも絶対あると思う。そして初めてそこで自分の過ちに気づくのだと思う。それも人間の特徴だ。

今日のこの瞬間…私は彼女を失った…。

なかなか逢えなかったし、X'masには日頃の感謝を込めてサプライズをやって彼女を大いに喜ばせようと思っていたのに………なにもかもなくなってしまった…。

これから何しよう………

もうどうでもいいや…………

仕事も…………もう行きたくないな…………

どうせすぐ仲直りするかな…………

それは…………無理か…………

あゝあ…………俺が何したっていうんだよ…………

色々考えてたら、私は涙が止まらなかった。泣き止んでも、少したつと溢れんばかりの涙が流れ落ちる。

「姫…………、好きだよ…………、本当に愛してるんだ…………、…………
・、本当に好きだったよ…………………………………さ
ようなら……………」

私は……………こうして泣きながら、声にならない声を発して眠りにつ
いた。

どんなに泣いても、思っても、もう隣には彼女はいない。

そういえば、誰かが言ってたっけ……………【男と車は三
年で飽きる】

寄り道

その名言？格言？まあどっちでもいいが、私は見事なまでにそうなった。

私はあの後仕事も辞めてしまった。環境を変えたかった事もあるし、なんかどうでもよくなってたし、仕事も別に楽しかった訳でもなかったから特に後悔はなかった。

そんな中、仕事もしてないお正月を迎えた。まあ、つい最近あんな事があったから、なんとも寂しい正月である。そんな時、一本の電話が私の元に届く。

電話の相手は前の職場の上司で、現在は違う場所を仕切ってるらしく、人手が足りないので何もしてない私の事を聞いたらしく、私をスカウトしてくれた。

まあ、何もしないよりかはましかと思い、私は心機一転その場所での仕事を再開する事になった。新しい仕事に打ち込めば彼女の事も自然と忘れていくだろうという浅はかな考えもあった。

最初は仕事内容もきつくて毎日毎日大変だったが、その苦勞が報われたのか、上司に代わって私がその職場を任されるポジションにまで成り上がった。これは非常に嬉しい事だった。

彼女と別れて、少し運気が戻ってきたかな？とまで思っていた。別れて良かったかもしれない。そんな事すら考えられるようになっていた。私が仕切るポジションになってから、大分スタッフも入れ替えをして、私好みの職場が出来上がってきていた。みんなが仲良く和気あいあいとしていて、不満が出れば私がその不満を解決していた。そんな感じだったので、嬉しい事にスタッフはみんな私の事を慕ってくれていた。

そんな楽しい日常生活を送っている時に私はスタッフの女性の一人に食事に誘われた。その人は私と同じ年で話しもととても合う。特別な感情は持っていなかったし、私は快く誘いに乗った。女性と二人きりの食事なんて、とにかく久しぶりで私は思いの外ドキドキしていた。

数日後、お互い次の日は休み。仕事終わりも一緒だった。その娘は車通勤ではなく電車通勤だったので、私がそのまま車に乗せて食事に向かう事にした。帰りは送ってあげれるし、夜遅くなくてもその娘も安全である。

普通に助手席に乗ってもらう。荷物は私が後部座席に置いてあげた。

「じゃあ行こうか！なんかデートっぽくって緊張しちゃうんだけど…。」

「まあ、いいんじゃない。デートっぽくじゃなくて、これデートだしね（笑）」

なんでだろう…私によってくる女の人は何故か生意気な娘が多い気がする。

その娘は職場でもほぼ対等に接してくる数少ない人員でもあった。

「何処行きたい？」

「んー。明日休みだし、飲み屋が良くない？飲みながら色々話そうよ！私お酒大好きなんだー。だから飲み屋に行こ。決定！」

「あー。わかってると思うけど俺、車んだけど……。それで飲み屋？」

「そう。大丈夫っしょ！もしお互いベロベロになったら明日休みだし、どこかで休んでほしいじゃん！」

！？何いってんのこの人？休むって事はラブホって事だね？俺だって男だし、そうになったらやっぱ襲っちゃうよ……。いいのか？

「そ、そうだね。それなら飲み屋でもいいか！車はパーキング停めればいいし。ベロベロになっても運転しないから平気だしね……」

「ああああ！！！！なんか今変な事考えてだでしょう？まったくホントエッチだよ。まあそのおかげで仕事も楽しくやらせてもらって

るけどね。もうホントエロいなあ。」

「だってさあ、俺も男だし、かりにも女性とホテルなんて行ったらさ……………」

「はやとちりしすぎ！誰もホテル行くなんて一言も言っていないじゃん。馬鹿なんだからあ。」

「へ？違うの？俺はてっきりホテル行って……………」

「ホント男ってその事しか頭にないわけ？呆れるわ。まあいいや。そう思わせちゃった私も悪かったしね。とりあえず飲み屋にゴー！ゴー！」

正直なんだかよくわかりが、とりあえず私とその娘は飲み屋に向かった。

ちなみに、その娘その娘と言ってきたが、その娘の名前は飛鳥である。私と飛鳥ちゃんは飲み屋に到着した。

寄り道 その2

「着いたけど、マジで飲み屋なの？さっきも言ったけど俺車だからね。」

一応もう一度聞いてみた。

「往生際悪いね。ほら、行くぞ！」

「へいへい。わかりましたよ、姐御。」

「何、姐御って？」

「入ろ入ろ、話しはその後にも出来るし…」

私と姐御は飲み屋に入った。どうやら個室の造りの飲み屋らしく、個室以外ないらしい。なんとなく嫌な感じがしたが仕方なく入る。

「お！なかなかいい雰囲気のところじゃん。誰にも邪魔されず、とことん飲めるね。さあ、飲むぞお！」

姐御はテンションが上がっている。とりあえず私も合わせる。

「うっし！今日は飲むぞ！日頃の疲れを忘れるくらい飲む！ついてこいやあ。」

「そっちがね。最初に言っとくけど私は強いからね。付き合ってもらうよ。」

まだ飲んでないのに、もう負けてる感じがする…。

「乾杯！お疲れ。」

「乾杯。おつ。」

姐御といろんな話しをした。これからのお互いの将来像。今の仕事。過去の恋愛話し。

「あのさあ、さっきから聞いてれば、姐御、姐御ってなんなのそれ？」

「だってさ、なんか飛鳥ちゃんて、こうやって話してるとおもいつきり姐御肌じゃん。仕事してるときはそんな感じじゃなかったけど、プライベートだとこんな感じなの？」

「そうだねえ…今の私が本当の私かな。姐御肌っぽいかな？」

「うん。でも俺はこっちの飛鳥ちゃんの方が好きかなあ。だからこれからは姐御って呼んでいいっしょ？」

「……まあいいか。いいよ姐御で。特別に許す！」

「ほら、そういうとこ姐御肌っぽいし。」

お互いハハハと笑い合い、楽しいお酒の席になっていた。そして数時間後……。

「もう無理っす。そろそろ勘弁してよ姐御。これ以上飲めないって！すでにベロベロだよ……。まいった。」

「まだまだこれから！私飲めるもん。今日はとことん付き合うんでしょ？ほら、飲んで飲んで！」

私のリミッターはとくに限界を超え、レッドゾーンをも越えそうだ。徐々に気持ちが悪くなってきた。もう本当に限界だ……。

「……たく。あんな啖呵きるから悪いんだよ。私に酒で勝てる訳ないの！辛そうだし、さすがに今日はこれで勘弁してあげる。」

助かった……。私はそう思っていた。

「ほら、帰るよ！立てる？………もおう………しょうがないなあ。」

私はかなり飲んだからフラフラしていて千鳥足だった。そんな私を見兼ねて姐御は私の腕をガッチリと自分の腕に絡ませて一緒に歩いてくれた。

「ごめん姐御、だらしなくて………」

「私が飲ませ過ぎたよ。もっと飲めるのかと思ってたからさ。だから今はこのままでも許してあげる。私のせいだしね…。ゴメン…」

最後のゴメンの部分はボソツと言っていた。割りと恥ずかしがり屋なのかもしれない。

姐御は私の腕をしっかりと組んで車まで連れてきてくれた。

「サンキューね。でもマジごめんね。俺が姐御に介抱させちゃったね。」

「いいよいいよ！気にすんなって！それよりさ………これからどうする？」

運転はもちろん出来る状態ではない。すでに終電もない。かといっ

て、姐御を送っていけないし……。このまま車の中で過ごすのも嫌だし…………。

「休みに…………行く？多分寝たいよね？」

姐御からだった。

「う、うん。寝たい事は寝たいけど…………。姐御はそれでいいの？」

「そっちがいいなら私はいいよ。構わない。」

この流れはやっぱり、あそこら辺のホテルというキラキラした看板がある宿泊施設に行くという事だろう。私は酔いのせいもあり、かなりドキドキしてきた。

そして私と姐御は歩き出した…………。

種明かし…

煌々と街のネオンが輝きを発している中、私と姐御は歩いていた。

「マジで行くの？俺、結構酔い醒めてきたかも…」

私はドキドキ感が酔いに勝って、少しではあるが本当に醒めてきていた。

「ここまで来たら行こうよ！醒めたなら醒めたでまた飲めばいいじゃん。」

なんていう人だ。ここまで行動派な人間だとは、普段からしたら想像もつかない感じである。

「どうなっても恨みっこなしね。それでいい？」

姐御の返答はなく、ただ目的地に向かって歩いている。

「着いたよ！ここならいいしょ！」

どうやら姐御はここいら周辺の地理に詳しいらしい。手を引っ張って連れて来られた場所は、ぱっと見ると白いお城風の建物だった。

「姐御はここいら辺よく来るの？」

「わりかしね。この間も飲んだ後ここに来たんだ。」

何だって！？外見とは裏腹に姐御は酒入ると見境なく男を食べちゃう人なの！？そんな風にはまったく見えないのに……。私は正直ビククリして気が動転しそうだった。

「よし、入ろうか！何やってんの？行くよ！」

無理矢理手を引っ張られ強制的に入店した。

【いらっしやいませ。二名様ですか？只今の時間ですと……。】

あれっ！？この台詞は何度も耳にした事がある。普通ラブホだったらタッチパネルやらで部屋を決める。何名様ですか？なんて一度も聞かれた事ないような……。

そうなのだ。外見こそラブホっぽい造りだが連れて来られた場所は

カラオケボックス…。確かに休めるけど……。なんて紛らわしい外見してるんだよ…。でも私はちよつと安堵感が漂っていた。

とりあえず入室。部屋に入るなり、

「ブツ、ハハハッ……。なに勘違いしてんの？ラブホだと思った？ちなみにね、ここはホントに元はラブホだったんだけど、客入らないみたいでカラオケにしちゃったんだって。だから知らない人みたらラブホって思うよねえ。まったく、はやとちりするなって言っただじゃん！ここなら寝ようとおもえば寝れるし、始発運転するまでたっぷり休めるでしょ？それにまたお酒も飲めるし！」

完全に騙された。お恥ずかしい限りだが、正確には騙されるというより自分一人で妄想してしまっていた。

「姐御さあ、超楽しそう…。してやったりって顔してるね。なんか恥じらいながら喋ってたのも演技って事でしょ？」

「その通り！なんかさ、飲み屋出から急に思い付いちゃってさ、悪いと思ってたけど、楽しくなってきたさあ。でもここまで来るのに勧誘の人とかいっぱいいるし、女子一人じゃ歩きにくいんだよね。だから酔ってるふりして手を引っ張って歩いたの。期待に添えないでごめんね。でも、ここに着いた時の顔サイコーだったよ！超緊張してる顔してた。マジウケた。」

「すげー意地悪。ホントに緊張してたよ俺。まったく芝居までして、女は女優だよな。すっかり騙されたよ。ただ正直、姐御がそんな尻軽女じゃなくてホッとしてる部分もあるよ。これで良かったと思ってる自分がいるもん。」

「ホント馬鹿だよな。こんな事されても私の心配してくれるんだから。仕事場でもそうだけど、優し過ぎなんだよあんたは。周りの事とか気遣ってくれるのはいいけど、自分の事も気遣ってあげた方が私はいいと思うよ。そうしないと、いつか自分で潰れちゃうぞ。」

なんだかとても嬉しかったのを覚えている。姐御はなんだかんだで私の事を心配してくれていたのだ。

「よっしゃ、飲み直そうか？私も醒めちゃったよ。」

「姐御はどれだけ俺の事イジメたいんだよお。まあいいや。少しならお付き合いしますぞ姐御！」

その後、始発が動くまで私と姐御は軽くお酒を飲み、歌を歌い、大いにストレスを発散した。始発が動き出す頃には私の酔いも醒めて体調も回復していた。

「姐御、ホントに電車でいいの？送ってくよ。」

「大丈夫、大丈夫！もう明るいし一人で帰れるよ。今日は色々ご

めんね。でも楽しかったからいいでしょ？それからさ、あんまりストレス溜めすぎちゃダメだぞ。過去の彼女の事は早く忘れちゃいな。それじゃまた明日職場でね！バイバイ。」

サラッと最後にはっぱをかけてくれるところなんかがやはり姐御肌である。

！？さてよ…、俺そんなに姫の事愚痴ってたのか？自分では考えてないつもりだったけど、飲んでるときに姐御に散々愚痴ってたぽいな。俺はまだ姫の事忘れられてないのか…まあいいか。帰って寝よう。

今思うと私のストレスが溜まっているのに気が付いて、姐御は誘ってくれたのかもしれない。

私は、そんな姐御に少し気を寄せ初めていた……

足音

次の日からはお互いまた、普通に職場の同僚として働き始めた。もちろん職場では姐御なんて口が裂けても呼べなかった。

私はまたいつも通り忙しい毎日を送るようになった。ただし、今までと少し違うところは姐御とメル友になり、たまにご飯や飲みに行く事が増えた。それはそれで私にとって凄くプラスな事だったと思っている。

そんな毎日を送ってるうちにあの忌ま忌ましい日が近づいてきて、私は姫の事をいやがおうでも思い出した。そう、世間一般でいうとこのクリスマスである。そんな矢先にまた事件が起こる。私はいつもの様に淡々と仕事をしていた。

それは突然だった。【バキッ…】私の身体から鈍い音があった。私は突如その場に倒れ込んだ。背中と腰が酷く痛み、自力で立つ事もできない。私は救急車で搬送された。原因は過労…。働きすぎで腰の骨と背中の骨が歪んでしまっってボロボロになっていた。簡単に言えば背中と腰のヘルニアが同時に起こってしまったのである。私は入院する事になり、約一ヶ月半仕事にでれなくなる。そしてそれに伴い職場は売上が低迷し、私が不在の間に撤退を余儀なくされた…。

なんともスタッフには申し訳ない事をしてしまったと思っている。そんなこんなで姐御も違う場所に飛ばされてしまう。なんとも残念

であった。

私にとって、クリスマスという響きは最悪なものである。姫と別れる事になり、築き上げた職場も失い、仲良くなった姐御とも離れ離れになってしまった。結果、また今年も寂しい正月を迎える事になってしまった。なんともツイてないと思う事しか出来なかった。

私の体調も徐々に回復してきていた2月ぐらいの事。ちなみに仕事は療養中としていて休業している。

何か変えなきゃ！と思い、私は一人暮らしを始める事にした。私と一緒に愛車もボロボロだったので新車も買った。車はビートルを購入した。私は、自分でいうのもどうかしてるが、世間一般でいうとカッコイイ系の人間ではなく、どちらかというとカワイイ系の部類に入る人間だったので車もそれにあわせ、ビートルを買った。後ほど、この車の事で大問題が私に起きるのだが…………。

またも心機一転、住家を変え、愛車も変え、運気が変わればいいなと思っていた。仕事をしていない間は身体と相談しながら趣味でやっていたスロットで生計を立てていた。その当時は私ぐらいの腕でもしっかりと立ち回ればそれなりに成果はついてきていた。むしろ、仕事をしている時よりも月給は上回っていたのである。

そんなちよつと墮落した生活をしている中、約一年と少しぶりぐらいに聞き覚えのある着信音があった。私はその時まで完全ではない

が忘れかけていた存在、ここまでいってしまえば読者様はお分かりだろうが、彼女である。まぎれもなく姫ちゃんからの着信だった。

その電話で、私の身体中の何かが凄く熱くなり全身を駆け巡る。

やはりというか、私はまだ彼女の事が好きで忘れられていなかったのが証明される事になる……………。

そして、私は…。

「…もしもし?…姫ちゃんですか?」

姐御に対して徐々に心が惹かれていたのは確かだったが、私は心のどこかで、ずっとこの人からの連絡を待ち望んでいたにちがいない…。

彼女からの苦痛をまた味わうために…………。

電話にて

私は何を喋ればよいのか不安げだった。

それを悟ったのか、彼女の方から話しかけてくる。

「久しぶりだね、約一年ぶりぐらいかな？元氣してるかな？」

「そうだね、久しぶりだね。実はあんまり元氣はしてないかも……。」

「体調大丈夫？少しは良くなったの？凄く心配してたんだ……。」

ん？何で知っているの？メールだっしてないのに…俺ストーリーキングされてたのか？訳がわからない。

「なんで体調の事知っているの？俺、連絡してないよね？」

「あのね、買い物行ってる時に病院の栄養士さんにバッタリ会ってさ、したらあなたが入院してたって聞いてビックリしちゃったの。私との後、仕事も辞めてしまった事もその時初めて知ったし。私の

せいだよね？ごめんなさい。」

情報網というのは凄く怖い。推測だが私が倒れた事はもちろん上司の耳にも入っている。その上司が前に働いていた病院の栄養士に言ったのであろう。それしか考えつかない。横の繋がりがあるのを私は忘れていた。上司に口止めする理由もないが、そんな感じで彼女の下に情報が入っていたとは思いつかなかった。

「別に姫ちゃんが謝る事ないよ。俺が気分替えようと思ってした事だし。」

「まだ姫って呼んでくれるんだね。嬉しい……。一年離れてたけど、私はまだあなたが忘れられないの。必要なの。好きみたい。」

私は困惑した。彼女はまだ私の事を好きでいてくれる。必要としてくれる。私の心は凄く揺らいだ。

そして私は…、

「俺もね…、何度も忘れたくて忘れようと努力してみたけど、どうしても無理だった。あとちょっとのところまで行ってたけど、やっぱり忘れられないんだよ！俺には姫が必要で、今でも好きなんだ！」

私は素直に心の内を彼女に伝えた。

「私達さ、離れてみても結局同じ気持ちだし、やり直せないかな？
私はあなが好きだよ！」

「俺も姬ちゃんが好きだ！だからやり直せるよ！」

「うん。やり直せるよね！私、早く逢いたいよ。」

私達は、電話でお互いの思いをぶつけ、近々逢う約束をした。私が
姐御に惹かれてた事、一人暮らしを始めた事、車を代えた事。彼女は
それらを何も知らない。逢った時に話そうと思う。私はそう決め
ていた。

そして、彼女と逢う、約束の日がやってきた……。

天国と地獄

時間の経過としては、一年半。彼女がいないその間にも様々な事があったなあ。私は振り返りながら愛車のビートルで目的地まで向かう。彼女が指定した場所は決して人目につかないであろう、かなり遠くのピザ屋だった。

私の方が先に到着したみたいだ。ソワソワしながら彼女を待った。待つこと数分後、彼女がやってきた。

「久しぶり！思ってたより元気そうじゃん！」

久しぶりに目の前にする彼女は相変わらず私の目に可愛くうつった。

「久しぶりだね！姫ちゃんも元気そうだね。」

「まあ、ぼちぼちな…。…あれ？車代えたの？」

「うん。俺と一緒に前の車もガタきちゃってさ、おもいきって、これ買っちゃったんだよね。」

「ふーん……。まあいいや、お店入ろうか。」

「うん。入ろう。」

どことなく車を見て、彼女の雰囲気が変わった様な気がした。気にしてもしょうがないので、とりあえず店に入る。

「なんか凄い痩せてない？最後逢った時とは別人みたいだよ。」

彼女がそう言うのも無理はない。私は彼女のストレスもあり、仕事のストレス、病気も伴って体重がかなり減っていたのだ。

「変かな？やっぱり前ぐらいの方が良かったかね？さすがに痩せすぎちゃったかな……。」

「ううん。凄くかっこよくなったね！今のあなたの方が私は好きかも。服もオシャレになったし、ホントかっこよくなったね！いいじゃん、いいじゃん！」

私が大体言われるのはカワイイで、かっこいいなんて言われた事が殆どなかったから凄くうれしかった。

「そ、そうかな？なんだか姫ちゃんに言われると凄く嬉しくて涙でそうだよ。でも、姫ちゃんも相変わらず凄く可愛いよ！」

楽しい…。正直この時間が楽しくて、愛おしくて仕方がない。やっぱり彼女といれる時間が私は最高で、彼女の事が大好きだと、改めて認識した。

私は言った。

「姬ちゃんさ、やっぱりこうやって二人でいると落ち着くし、癒されるし、とにかく楽しいんだよ。離れてもずっと好きだったよ！だから、もう一回やり直してもらえませんか？」

私はまた、元に戻れると自信を持っていた。だが彼女からは思いもよらぬ返答が返ってきた。

「…………ごめんね。私はやっぱり無理だ。…………ごめんなさい。」

…………はぁ！？

私には理解が出来なかった。この前の電話ではお互いやり直せるって気持ちでいたし、今日久しぶりに逢ってみて、彼女は私の事をカッコイイし好みだとも言ってくれた。

それなのになんでその答えなのだろう…………。

「なんでなの？理由がわからないよ。俺の事好きじゃないの？」

「好きだよ。今も好きだけど……。質問していいかな？あなたは私の事、好きって言ってくれてるけどそれは本当なの？」

質問の意味が私にはよくわからない……。そんな事言われるまでもなく大好きに決まってる。なのに本当に好きなの？ってどういう事だろう……。。

その場で彼女は泣き出した。久しぶりに見る彼女のその泣き顔は、私にさらに追い打ちをかけた……。

計画的な彼女

私は色々な事を考えたがどれも違うみたいだ。

彼女は泣きながら下を向き、ひたすら私がだす答えに首を横に降る。

「ごめん、俺の何がいけないの？仕事辞めてしまったことなの？それなら働こうと思えばすぐ復帰させてもらえるよ。今は療養してるだけ。」

この答えも違うみたいだ。

「それとも今日の会話の中で、また気に入らない事でも言ってしまったかな？」

これも違う……。その時私の中で何かが閃いた。でもこれが正解なら……。私はとりあえず関係ないと思いながらも言ってみた。

「まさかとは思うけど、ビートルの事？」

どうやら、そのまさかの事みたいである。彼女は首を縦に振った。

「ちょ、ちよっとまってよ。車が理由ってどういう事？」

彼女が久しぶりに口をひらいた。

「どうもこうもないよ…。なんでよりによって、あんなに変わった車買ったの？信じられないよ……………」

「え？なんで？見た目もカワイイし、俺に合ってるかと思って買ったんだけど…一度助手席に乗ってみてよ。凄く乗り心地いいし、友達にも凄く評判いいんだよ…。とにかく乗ってみてからでもいいんじゃない？」

「無理！あんな車乗ってたら人目にすぐ着くし、目立ちすぎるよ。それにあの車じゃエッチもできないよ。私の事ずっと好きだったって言うくらいならさ、私が以前どんな車が好きだったか知っているよね？」

私は返す言葉がない。

「確かに言ってたね…。好きな車の事。ごめん、でも俺だってさ、随分連絡なかったし、その間に色々あったりもしたから……。もう終わりだと思ってた時期もあったし。」

「ふん。色々って何？」

「仕事はどうでもよくなって辞めたし、環境変えたくて別の職場で働いて、病氣して入院して、車も代えた。それに今は一人暮らしもしてる。姫と別れてる間、忘れようと思って、他の人とも飲みに行ったりしてた。」

「そうなんだ。でもさ、それって全部私のせいなの？もしそうなら私はあなたのお荷物だからもう一緒にいられないよ……………」

随分と痛いところをついてきた。もしそうだとしても私には、はいそうですとはとてもじゃないが言えない。私の心理を知っているからこそ、やり方が上手いというか汚いと思ってしまった。彼女は私が絶対に、はいと言えない事を知っているからあんな言い方をしてきているのだ。今回は私の負けだった…。

「そんな事ないって！全部が姫ちゃんのせいじゃないよ。いいわけみたいな事言ってごめんなさい。」

私は続けた。

「あのさ、もしね、もしも俺が車代えるって言ったらまた付き合ってくれるのかな？それとも何してももうやり直せない？矛盾してるって言われても仕方ないけど、俺はまだ本当に姫ちゃんが好きなんだよ！じゃなきゃ一人暮らしてしていいないし、今日だって嫌いだったら指輪なんてしてこないよ。」

「ん……………。私ね、今日は本当に仲直りするつもりで来たのね。それでさ、ここで夕飯食べてから、久しぶりにラブホ行ってエッチして、お互い朝まで気持ちを確かめ合いたかったんだ。これは私の

本音です。

だから私も指輪してきたし、今日は実家に泊まるって言って出てきたの。

かっこよくなったのは本当の事だし、前よりオシャレになってるし、私がいつでも逃げられるように一人暮らしもしてくれてる。

でもね…、でも、あの車のせいで何もかもおしまいだよ！なんであんな車なんか……………、なんで……………」

彼女は目を腫らしながら真剣な眼差しで私をみている。

泣いたり、怒ったり、今日の彼女は感情が表に凄く出ていた。

私に救いの道は残されているのだろうか……………そして、ビートルを廃車にし、新しく、彼女の好きな車に代えればやり直してもらえるのだろうか？彼女の応えは…

依存度

少しの沈黙をへて、私が喋った。

「ごめんね姫ちゃん……。姫ちゃんは俺の事まだ思ってたくれたのに、俺は勝手によかれと思ってあの車を選んでしまった。本当にごめん……。俺さ、車必ず代えるよ！だから……。そしたらまたやり直せないかな？」

私は馬鹿だ……。まだ半年もたってない愛車を彼女とやり直したいためだけに代えると言ってしまった。今思うと本当になんて事をしてしまったのだろうと思う。その時に彼女との関係を終わりにすればよかったのだと思う。

でも……。その時の私は車さえ代えれば彼女とやり直せるんだ！という安易な考え方しかできなかった。それ程までに彼女の事が欲しかったんだと思う。

「でもさ、まだ買ったばかりなんでしょ？大丈夫なの？凄い乗り心地良くて気に入ってるじゃん。それなのにホントに出来るの？」

「出来るよ。俺は姫のためなら何でも出来る。たかが車を代えればいい話でしょ？」

「たかがって……。そんなに簡単な事じゃないんじゃない？周りの

目だってあるんだよ？なんてみんなに説明するつもり？私とやり直せるからって言うの？そんなのは絶対ごめんだからね！いいんじゃない？このままさよならでさ……。私、これ以上あなたに辛い思いさせたくないよ。だから、いっそ……」

私は彼女の言葉を遮った。

「いいんだよ！みんなには適当になんとも言える！みんなより姫の方が俺には大事なんだよ！この気持ち少しはわかってよ！もう決心したんだ。車は姫の好きなのにする。」

こうやってこの文面を書いていると、当時どれだけ自分が愚かだったか、そして彼女の事になると周りが見えなくなり暴走していたかが痛い程今の自分に返ってくる。書いていて、とても辛い時がある。文面上では私は友さえも裏切ろうとしている。辛い時に私を支えてくれるのは親でもなく彼女でもなく、友という絶対無二な存在なのに………。私は最低な人間だ、最悪な悪魔だ……。そう思えてきてしまう。でもこれからも、辛くても書き続けていきたいと思っている。

話しを元に戻すが、私の言った事に対して彼女の反応は………。

「わかったよ……。もうわかったから。気持ちは凄い伝わってきたよ。

だから今度は私が待ってるよ。あなたがちゃんと車代えてくれる日までずっと待ってるから。だからさ、今日はこれで終わりにしよう。あなたが私をどれだけ想ってるかなんて知ってるつもりだし、ごめんね……。ホント嫌な女だよね私……。自分でも最低だと思う。」

「ううん。俺は全然そんな風には思っていないよ。姫は俺にとっては誰が何と言おうと最高の人だよ。俺のほうこそ車の事、本当にごめんね……。せっかく今日は色々この後の事も考えてくれてたのにさ……。必ず車代えて迎えに行くからね！」

「わかった。連絡待ってるからね！それまでは、またさようならだね。じゃあ今日はこれで。またね。」

彼女は本当に実家に帰って行った。

私はこの後、本当に車を買って替えた。私の貯金は底をつき、少しだがローンも背負った。それも全て彼女とやり直したいからだ。

私は彼女に依存しすぎている。わかっているのだが、そのおかしな行動はまだまだとまらない。ホントの私はどうしたいんだろう……。旦那、子供持ちで結婚も出来ない人に人生を捧げてしまっている。

完全に姫依存症だ……。この頃が1番依存度のピークだったと思う。

今の私から過去の私に言ってあげたい……。お前は長い間、タチの悪い風邪を引いているだけだよ、早くワクチン打って現実を見直してみな…。世間は広いし恋愛したいなら、彼女じゃなくたっていくらでも出来るんだぞって……。

そして一ヶ月後、私は彼女の好きな新車に乗り換え、彼女と対面の日を迎えた…

消毒液

時期としては春を迎えていた。周りには桜が綺麗に咲いている。

私は彼女の事を迎えに行った。

「本当に買い替えたの？信じられない！？夢みたいだよ。色も私の好きな黒だし、やっぱりbBの新型はカッコイイしセクシーだね！その車、あなたに凄く似合ってるよ！いいね、いいね！それからさ、助手席は私の場所だから絶対に他の女性は乗せないでよね！約束だよ。」

「気に入ってくれて本当に良かったよ。これで正式に俺とやり直してくれる？」

「もちろんだよ！ここまでさせてしまって申し訳ない気持ちもあったけど、やっぱりこの車の方がいいね！私はこの先ずっと一緒だよ！私の為にこんな事してくれる人絶対いないもん。けど、約束だけは絶対守ってよね。」

彼女がここまでしつくくこだわる約束については過去に理由がある。それはまだ、私と彼女が付き合ってから間もないぐらいの出来事の話にさかのぼる。

その時の様子は外が大雨で大変な事になっていた日のことだ…。

傘をさしても意味などなく、まともに外に出られる状態ではなかった程の豪雨だった。当時の私もその豪雨に面食らっていた。そんな時に、帰りたくとも帰れない職場の栄養士さんが私と一緒にのあがり時間だった。

その栄養士さんは私より年上の人で、私も職場ではかわいがってもらっていた。ここは日頃の恩返しと思って豪雨の中私は車でその人を送った。

その時の事が問題になってしまった。私は普通にその人を送って行っただけだったので彼女にその事を言わないでいた。あくる日、彼女がいつも通り助手席に乗ったのだが…。

「ん？なんかいつもと座り心地が違う気がする？あれ！？なにコレ！？私の髪の毛じゃないよ…。もしかして誰か乗せたの？」

女性という生き物は凄いと思った。助手席に他人が乗っただけでわかってしまう。それに、たった一本の髪の毛が落ちていただけで、それも他人のだと即座に気付く。観察眼が物凄いのだ。たまたま彼女がそうだっただけかもしれないが…。

「よくわかったね！？この前の大雨の日あったじゃん、あの時に日

頃お世話になつてゐる栄養士さんを帰れなそうだから駅まで送つてあげたんだよね。」

私は悪いことをしたつもりはなかったし、何事もなかったかの様に話した。

だが……………。

「ハア？送つてった？それって隣に私以外の女乗せたつて事だよね？」

彼女は鬼のような形相で私をみている。

「うん、そうだけど…。送つてくの嫌だったんだね。ごめんね、知らなかったからさ、もう姫ちゃん以外は女の人助手席に乗せないから、ホントごめん。」

彼女は助手席から降りてしまった。そして私に…。

パチンッ！…！と、いい音が鳴った。おもいつきり私は顔面に平手打ちされた。

「痛い？でも私の方がもっと痛いんだからね。ふざけんなよ！他の

女が乗った助手席なんか乗れないよ。今すぐ消毒して。それじゃなきゃもう乗れないよ。」

私はポカーンとしてしまっていたと思う。ビンタもそうだけど、消毒って……。

とりあえずこの状況を収めたかったので、急いで薬局に行き消毒液を購入して彼女のもとに戻った。

すぐさま彼女の目の前でシートの隅々まで消毒をした。途中、彼女が色々と指摘してくるポイントを入念に消毒する。

「まあ、これぐらいで許してあげるよ。もうこんな思いするのもさせるのも嫌だから絶対にしないでね。」

彼女はどこか満足げな表情だった。こうして無事に事なきをえた…。

こんな事が私達の過去にあり、彼女はその時の事を今でも執拗に言ってくるのだ。私ももうビンタされたくないので一応細心の注意をはらっている……。

話しを戻すが、彼女は相当bBを気に入っているみたいだ。とりあえず私の心はホッとしていた。

「よしっ！今日は復活記念でドライブデートしちゃおうよ！私達の愛車で色んなところへゴーツ！」

この日から私達の第二幕が始まったのである……。その時の私は希望に満ちていた。また楽しい日々がこれから始まる。って、思っていたのになあ……………

これから私は楽しい事ももちろんあったが、……………それを越えるツライ事が待っていたんだ。

楽しい時間

復縁してからお互い環境が変わった事があるので、ここに少々プラスしたいと思う。

まずは彼女。別れてる間に彼女は職場をかえていた。今度の職場は平日休みと日曜休みがある。

そして私も違う職場に勤める事になった。今度の職場では1番下っ端として働く事になったがそれは仕方ない事だ。だけど嬉しい事もひとつあった。なんとなんと、姐御がそこには働いていたのである。これにはビックリした。

そんな感じでこれからは、彼女の平日休みの日に逢う事になった。これは素直に嬉しかった。

今日は復縁してから初めての彼女の休みだ。休みなのだが彼女は家族に仕事だと言って出てきていた。だから仕事を終了する時間までしか一緒にはいられない。私はそれでも十分だった。

私達は、桜を見に行く事にし、場所は豊島園に決定した。豊島園なら乗り物にも乗れるし丁度いいかと思ったのだ。ここで思い出すのが彼女に連れられて行った遊園地、今回は残念ながらそこは夜間に開放はなかったのでやめにした。

私達は道中に今までの過去の昔話などをして賑わいながら目的地を目指した。

生憎今日は天気予報では残念ながら雨……。でも嬉しい事にまだ雨は降りそうにもない。心配だったがなんとかもってくれそうである。そして無事に豊島園に到着した。

「よし！行こうか！桜が少し心配だけど綺麗に咲いてればいいね。」

「だね。行こう行こう！久しぶりに腕組んじやおう！なんかワクワクしてきちゃった。」

彼女と腕組みなんて、本当にいつ以来だろう……。久しぶりに私の心は躍っていた。

「あらら……。桜が……。」

残念な事に……。期待していた桜がほとんど散ってしまっていたのである。これにはショックだった。それに加えて乗り物も……。

「なんか想像していたより乗り物がショボイね……。それに修学旅行生かな？凄い人がいっぱい、これじゃ乗りたい乗り物にも乗れないね。桜も……。だし、とにかく残念だね。今日は違うところに行けばよかったね。ごめんね、私が豊島園に行こうなんて言ったから……。」

「そんな事言わないでいいよ。こうやって二人で腕組んで歩けるだけで俺は大満足だよ!」

「そうだねっ! こうして二人で腕組みして、ぶらぶらお散歩するのもいいよね! 私も今幸せだよっ!」

そんな時である。空から雨が降ってきた。

「まいったね…これじゃ散歩も出来ないじゃん。どうしようか姫ちゃん。」

「とりあえず出ようか。これ以上ここにいてもしょうがないしね。」

私達は車まで戻って、これからどうするか話しあった。色々話しあって、ひとつの答えを出した。

「よっし。それじゃあ次の目的地に向けて出発だ。」

私達は、まだ時間もあつたのでおもいきってお台場まで行く事にした。そのジョイポリスで遊ぶ事にしたのである。お昼ご飯も食べていなかったし、お台場でなんか美味しい物でも食べようと思っていた。

途中で渋滞に何度も捕まり中々辿り着けなかった。彼女は渋滞が大嫌いで、ご飯も食べていなかったの、イライラのピークがきていた。時間もとてめにかかってしまい、お台場についた頃には、3時を過ぎてしまっていた。

「とりあえず着いたね…。まだ時間大丈夫？」

「っもう。渋滞最悪！せつかくの貴重な時間が…。とにかくお腹減ったよ。ご飯食べたい。」

「いやさ、それは俺もなんだけど、飯食ったら帰りの方向でいいのかな？高速使って時間に間に合うかどうかって感じだよ。」

「もう時間なんていいや。電話して実家に寄るとか適当に言ってごまかせばいいよ。せつかくさ、久しぶりに楽しいデートしようと思ってたし、ここまで来たんだから今日は楽しんじゃおうよ！いいでしょ？」

「本当に大丈夫なの？俺はまた今度でもいいよ。姫ちゃんの事心配だもん。無理させたくない。」

「大丈夫だって！心配しないでいいよ。だから今日は私に付き合っ
て。ねっ、お願いっ。」

「姬ちゃんがそこまで言うなら…。今日は遊んじゃうか！そうと決まればご飯ご飯！ほら、早く行こう。」

私も彼女も普段の生活は忘れておもしろいっけりジョイポリスのアトラクションを楽しんだ。

そこにいる間、私達はよそから見ればラブラブなカップルだ。何もかも忘れて、ただ純粹に今の時間を心から満喫していた。

じゃれあったり、プリクラ撮ったり、アトラクションで絶叫したり、私にとってとても幸せな時間で、二人とも笑顔が絶えなかったまらく最高の時だったなあ。

散々遊んでジョイポリスの外に出ると、そこには今まで見た事もない夜景が広がっていた…………。

時間よ止まれ

「うわーっ！超綺麗！見て見て。あっちレインボーブリッジだよ。本当に七色に光ってるね。すごい！」

ジョイポリスの外にでると辺りはすっかり暗くなっていて、私達の目に飛び込んできたのは今まで見たこともない綺麗なお台場の夜景だった。

「ホントだ。凄い綺麗だね！なんて綺麗な夜景なんだろう。感激しちゃうね。」

「ねえ、私さ、一緒に観覧車乗りたい！でもあなたが嫌ならいいよ。無理強いはしないよ。どう？」

私は即答する。

「いいよ！一緒に観覧車乗りに行こ！姫と一緒になら何だって出来る。」

「本当に大丈夫？あの観覧車、かなり高いみたいよ？平気？無理しなくていいんだよ。」

私は何も言わずに彼女の手を引いて車まで連れて行った。そして急

いで観覧車に向かった。

「嬉しい！また一緒に観覧車乗れるんだね。やったー！」

彼女は子供みたいに、はしゃいでいた。よっぽど嬉しかったみたいだ。実は私もあの観覧車には前から興味があって、恐いけど乗ってみたかった。好きな女性と一緒に夜景を眺めながらロマンチックな空間を味わうのが夢だったのだ。

「うわっ、近くで見るとかなりデカイな……。恐っ。」

「ここまで来たらもう乗るっきゃないよ！大丈夫だよ。私が隣にいてあげるからさっ！乗るよ。」

「うん。乗るか！」

私達は観覧車に乗り込んだ。四分の一ぐらいまで来たあたりから私達は感動に包まれる。

とにかく観覧車から見える夜景は想像してたものよりも遥かに絶景で見えているだけでかなり癒される。

高層ビルのライトの点滅、空港の明かり、東京タワー、レインボーブリッジなど各々が暗闇の中違う輝きを放っていて感動で涙が溢れそうになるくらいだ。

「私、あなたと今見てるこの夜景…一生忘れないよ。今まで生きてきて本当によかった…。グス…グス…」

「俺も忘れないよ…。こんな綺麗な夜景、見たことないもん。姫と一緒に今この場にいられて本当によかったと思ってる。この先も、ずっと一緒にいようね、好きだよ姫……。」

私は泣いている彼女を優しく抱いて、涙を拭ってキスをした。

ふさぎあい

観覧車は1番高い位置に到達する。それと同時に私もキスを止めた、彼女も泣き止んだ。大袈裟かもしれないが、そこから見える景色はこの世の物とは思えぬ程美しい。

彼女と私は何も言わずに、その夜景を眺めていた。

言わずというか、お互いに言葉が何もでず、ただただ美しすぎる夜景に魅了されていたのかもしれない。

私にとって生涯忘れる事のない景色になった。

観覧車は下りにかかる。

「姫……、今日は一緒にここに来て本当に嬉しいよ。ここについていうか、ここじゃなくても一緒にいれば嬉しいんだけどさ。特に嬉しいかな。」

俺さ……、やっぱりこの先も姫とずっと一緒に……っん」

その先は言わせてもらえなかった。彼女は私の口をふさぐ。そして……、また泣いてしまっている。

「それ以上は言っちゃダメ……。お願いだから言わないで……。お願い……。」

観覧車は下についた。

私はそれ以上言わなかった。多分だが、言いたい事を言ってしまったら彼女にツライおもいをさせてしまったかもしれない。

：でもホントはその逆で、私がもしその事を言ったら傷付くのは私自身なのだ。彼女は私の気持ちに応える事が出来ない。

結果、私が傷付く。彼女はその事をわかってるからこそ、例えお互いのムードが盛り上がってても私にその言葉を言わせたくないのであろう。

今思い起こすと、それが彼女にとって私への優しさなのか、そもそもその気がなかったのか疑問である。

「そろそろ帰ろうか……。さすがに帰らないと旦那さんに不信がられちゃうと思うよ。ねっ、今日は帰ろう」

「一年ぶりぐらいにデートしたのに、ごめんね……。迷惑ばかりで。せっかく今日楽しかったのに、最後に嫌な想いさせちゃって。」

「ううん。全然だよ。それにさ、やっぱ姫とのデートは何処でも楽しいや。改めて思ったよ。俺、今日の事は一生忘れないかもしれない。それぐらい二人で見た夜景は心に焼き付いたよ。またこれたら来たいねっ！

さあ、ホントにそろそろヤバイから急いで帰ろう！また旦那さんと喧嘩なんてさせたくないしさ。」

「馬鹿だよ……。なんでなの……？なんで相変わらずのこんな私にそんなに優しいの？あたなは他の人とだったら……。」

今度は私が彼女の言葉をさえぎった。私だって彼女の口から聞きたくない言葉だってある。

「いいから行くよ！」

「うん、……ごめんね。」

私は高速を可能な限りスピードを出して、急いで帰った。地元が近くになり、彼女も安心したのか隣で寝息をたてている。そんな彼女の寝顔を見ていて私は……。

「旦那と別れて俺と結婚したほうが絶対いいよ……。」

私はボソッと小声で言った。どうやら聞かれてはいなかったようだ。

今日の長旅もようやく終わりを迎えようとしている。

「着いたよ。チュッ。」

「ふぁ…ふんあ…寝ちゃったんだね私。ごめん。送ってくれてありがとうね！今日は色々あったけど本当に楽しかったよ！また行こうねっ！おやすみ。チュッ」

なんとか12時までには彼女を家に帰せた。今日は本当に色々あって大変だった。

疲れたなぁ……。でも、好きな人と一緒に何処かに遊びに行けるって、やっぱりいいもんだなと思った。

結婚したいって気持ちは、前にしまっておくって決めてたのに、またその気持ちが私の中に甦ってきてしまっていた。

そんな色々な事を考えてるうちに、久しぶりに心地好い眠気が私を包んでいった……。おやすみ、俺…

姐御と私

もしかしたら気になっている方がいらっしやるかもしれないので、今回は新しい私の職場での姐御とのやりとりを書きたいと思います。

時間軸としては、新車を買う〜お台場デート、の前後あたりになります。

「おはようございます！今日からこちらでお世話になります。よろしく願います。」

私は新たな職場でこれからを共にする仕事仲間一人ずつ挨拶をしてまわっていた。

そんな中、一番最後に奥の事務所から現れたのは、あの姐御である！私はとてもビックリしていた。しかも姐御はそのボスとして君臨していたのである。

「いやあ、お久しぶり！体調は良くなった？心配してたけど、あの時はお見舞い行けなくてごめんね。」

「全然だよ。ちなみに友達にも連絡してなかったから入院中は誰と

も会ってないんだよね。だからその気持ちだけでも凄い嬉しいよ。
また姐御と仕事だなんて本当にビックリしてるよ。」

「ああ、その事んだけど私がマネージャーに言ってそうしてもらったの！」

なんだって！？初耳だった。でも、私を必要としてくれる人間がここにいたのだ。なんとも嬉しい事である。

「サンキューね！姐御は頼りになるわー！これから楽しくなりそうだね！」

私はまた姐御と働ける事に感謝していた。

毎日仕事が楽しくなるなあって思ってたけどそんな毎日はやっぱり長く続かないのである。

「姐御、一緒に帰ろうよ！車もビートルになったんだよ！」

「マジで？私ビートルすごい好きなんだよね！」

私はその言葉が嬉しかった。

「おっ！いい色だね。かわいいじゃん。あなたに合ってる合ってる。では隣失礼します。おー！見た目より中は広いね。座り心地もいいね。素敵じゃん！」

「姐御は相変わらずいい事言ってくれるよね。これからは送れる日は毎回送っちゃうよ！」

そんなこんなで送って行ける日は本当に姐御を家まで送って行っていた。

だが、そんな楽しかった日は、忘れもしないあの事件で変わる事になる。

そうである、皆様がよくご存知の馬鹿みたいな車チェンジ事件である。それを境に私と姐御の距離が空いてしまう。

「姐御、実はさあ…俺、また車代えたんだよね。」

「はい？なんつった？ビートル変えちゃったの！？なんで？意味わからないんだけど…何かあったの？」

この質問が一番きつかった。姐と復縁するために車を変えたとはも

ちろん彼女との口約もあったし言えるはずもない。私は迷ったあげくに……………

「この車さあ、やたら燃費悪くって俺の給料で乗れる車ではまだなかったみたい……………。週一でハイオクはキツクってさあ…………。だからおもいきって燃費がかなりいいbBに買い替えちゃった。」

姐御はとても不満そうな顔をしていた。

そして…その後、何かを悟ったかの様に姐御の私に対する態度が急変する。

今までは帰りは殆ど私の車に乗って帰ってたのに、bBになった途端、一緒に帰るという事はなくなった。

多分姐御は気付いていたのかもしれない…………。私が例の彼女と戻った事を…………、女の感って物凄いつて思う事がある。

姐御は彼女の事をスッゴク嫌っていたから仕方ないといえば仕方ない。

そんなこんなで姐御との中が悪くなってしまった。そして残念な事に姐御は退職してしまう…………。

おごりかもしれないが、何度も何度も俺のせいだと自分を責めた事

を覚えている。

姐御が最後の日。

私はプレゼントを送った。花束とDSをあげた。姐御が前から欲しがっていた代物である。

そして、別れの時間。

「姐御、色々サンキューね。本当に姐御にはプライベートや仕事、色々世話になったね。ありがとう」

「なんだかんだで楽しかったよ。また何処かで会うかもね……。その時はよろしくね！じゃ、バイバイ。元気だね。」

私は姐御を見送った。最後ぐらい車で送ろうか？と言ったのだが相変わらずそれは拒否された。

その後すぐ姐御から私にメールが届く。

【今度こそ彼女と上手くやるんだぞ！まあ、なんかあったら飲みぐらい付き合っただけよ。じゃあね。】

姐御はやっぱり気付いていたんだ。最後まで上から目線なのが姐御っぽくて良いなと思った。

気付いていたから車にも乗らなかったのだろうか？それは今でも謎

だ。

姐御とはその後、数年会わなかったがメールはしてた。今ではよき友、飲み友として、たまに昔話に華をさかせている。

姐御はいい男性をみつけ、結婚もした。羨ましい。

私も普通の恋愛をしていれば姐御みたいに今頃は結婚していたのかなあ……。

むしろあの時、姐御とお付き合いでもしていれば……

彼女の誕生日その1

姐御との別れもあり、私は仕事に対して覇気がなくなっていた。周りのパートさんからは姐御と私は付き合っていた物だと思われていたらしく、姐御が辞めた後散々何かあったの？って質問が後を絶たなかった…。

周りからはそんな風にみられていたなんて全然わからなかった。姐御と私はそういう風にみられていたんだとその時初めて知った。懐かしい昔話である……。

お台場デートから少し時間は進み、今の時期は7月。7月というと彼女の誕生日である。

今まで一度も彼女の誕生日の事についてふれていなかったのも、その話を少々書きたいと思う。

まず、誕生日といっても、その人それぞれに祝いかたが違うと思う。私と彼女も特殊な関係だからこれが以外と難しい。私の誕生日だったらどうしてもなるのだが、彼女のほうはそう簡単ではない。なんせ家族があるから当日はもちろん逢えないし、運が悪く彼女の誕生日当日には子供が夏休みに入っていて前後に逢う事も難しかった。

なので私達は一週間早めだったり、一週間後らにお祝いをしていた。

早かったり遅かったりでなんともパツとしないが当時は仕方がなかった。

そんな中、付き合ってから初めての彼女の誕生日祝い。

私は誕生日プレゼントでいつも迷ってしまう。なのでその時に彼女の欲しい物があればそれをプレゼントしていた。

初めて彼女に買ってあげたプレゼントは現実的すぎて印象が強く今現在でも忘れもしない。

「姫ちゃん、初めての誕生日だね。何か欲しい物ある？俺に買える物なら何でもいいよ！」

「んゝ……。ホンツツトに何でもいいの？」

「もちろんでしょ！そのための誕生日プレゼントだしね。何がいいの？」

私は予想をいくつかたててみた。
アクセサリー類、大好きな洋服、靴、ブランド物…、まあ、おおよそこんなところだろうと思っていた。

が、彼女の欲しい物はそのどれでもなかった…。

「じゃあさ、とりあえず家電量販店に連れてって！」

何ですと！？家電量販店？この当時は今みたいにデジカメやiPodなどはまだそこまで復旧されてなかった時代だ。もし現在に家電量販店といわれたら、それらを連想するのだが……。

「オ、オッケー…。家電量販店だね。なんだか意外でビックリだよ。」

「だって何でもいいんでしょ？だから今丁度欲しかったのがあるんだよねえ」

私は、おっかなビックリしながら家電量販店に車を走らせた。

いったい彼女は何が欲しいのだろう……。多分MDウォークマン？かなと思っていた。

頭の中で家電量販店に売っている商品を考えてるうちに目的地に着した。

「さあ着きましたよ。いったいお姫様は何が欲しいのか検討がつきませぬ。」

「ふふふ。まだ内緒っ！」

彼女が先頭をきって目的の商品売り場に向かう。途中…。

あら？オーディオコーナーはスルーなの！？じゃあいったい何が目的？

そして彼女が、あるコーナーで足を止めた。どうやらみつかったみたいだ。

「ん！？これ？」

「そうだよ！私が欲しがってた物はこれなの。いいかな？」

「う、うん。いいよ。でもこういうの旦那さんの相談なしに勝手に買ってしまっているの？」

「いいのいいの。なんか言われたら壊れてからって言えばいいよ。」

あの人の事はどうでもいいの。

それよりどれがいいかなあ……。できれば見た目もコンパクトでオシャレなのがいいよねっ！後はパワーが強いのがいいなあ。」

彼女が欲しかった商品は、もうお分かりだろうが掃除機だったのである。

普通ならば誕生日にはこういう物は買わないと思っていたが、彼女は日常であれば主婦なので、そういう選択もありなんだろう…。さすがである。

でも私的にはちょっと複雑だった。今回は初めての誕生日プレゼントだからおおめにみるが、次回からはこういうのは絶対嫌だと思った。だって私はそれを買ってあげれるが、彼女がその商品を使うところを实际見ることは不可能だし、家族のために掃除をするわけでは私にはなんら関係がないのである。どうせなら一緒にいられる時に身につけてたりと、目に見える物がいい。

「あ！これいいなあ。コンパクトだしオシャレなデザインだ！これがいいと思うんだけどどうかね？」

「それが一番良さそうだね。いいと思うよ。」

「じゃあこれで決定！ホントにいいの？」

「いいよ!買ってあげる。他にはいいの?」

言わなきゃよかった…。

でも当時の私は言ってるんだよねあ……………。

彼女の誕生日その2

言わなきゃよかった……誰もが一回はこう思った事があるだろう。

「え！いいの？ならあと一つ欲しいのがあるの！」

ああ……やっちゃった……。私はそう思った。口は災いの元と言うがその通りだ。ここまできたら乗りかかった船である。

「何が欲しいの？」

「クルクルドライヤー！」

少しホッとした。ドライヤーなら、なんとかなりそうだ。

「オーケー。いいよ。好きなを選びなよ。」

「ヤッター！これがいい！前から欲しかったの。ありがとうねっ。」

という事で、私は彼女に掃除機とドライヤーをプレゼントした。おもいっきり実用性が高い品である。しめて六万円ぐらいだった。なかなかの買い物だ。おかげで私の財布の中身は閑古鳥が鳴いている。それでも彼女が喜んでくれるなら本望だった。

それらを買った後、当時の私達のお決まりというか、ラブホへ向かった。

いつも飲まないワインで乾杯し、ケーキを食べる。

そして料理を食べて、まったりしてきたら泡ブロに入りお互いお楽しみのラブラブエッチの時間帯だ。

私の誕生日と違い彼女の誕生日の時は私があらゆるリクエストに応える。

この日の彼女は普段と違い、色々と普段しない様なプレイをリクエストしてくる。それはそれで私もかなり興奮して大胆になれて嬉しかったりもする。

普段の彼女は至ってノーマルなエッチが好きなのだが人間という生き物の感情の変化は凄い…、お酒の力も借りてはいるが、誕生日の彼女は結構大胆であり、Mっ気全開なのである。

私はそんな彼女が好きだった。

もはや過去形であるのは仕方がない事である……色々あって、そんな楽しかった彼女の誕生日も今となっては私にとって恐怖の一日となっている。ちなみに当の今月がそうだ……。今から憂鬱だ。

まあ少しネタバレだが、今の状態ならもしかしたらないかもしれないのだけど：

話しは脱線してしまったが、彼女の誕生日に私が必ずやっている事がある。

それこそ今となっては彼女は何のトキメキもないが、最初の誕生日の時は、涙を流して喜んでくれた。

懐かしい思い出なあ…。あの頃に戻りたい……。

私は彼女の誕生日の日にサプライズとして、必ずお花屋さんで歳の数だけの深紅の真っ赤なバラを別れ際に送っていた。

「そろそろ帰ろうか、今日は姫にとっていい誕生日になったかな？」

「うん！欲しかった物も買って貰えて、普段出来ないエッチも出来て、もう最高の誕生日だよっ！本当にありがとう！」

「実はね、まだ終わりじゃないんだ。もう一つだけ俺からプレゼントがあるの」

「え！？なにになに？チューとかならいっぱいしたからもう十分だよ？」

私は車のトランクから彼女の歳の本数のバラを取り出す。

「はい、コレ。お誕生日、本当におめでとう！愛してるよっ姫ちゃん！」

その深紅のバラを見るやいなや、彼女は感激で瞳がウルウルしてきていた。

「私…、今まで生きてきてこんなプレゼント初めて。ありがとう…、嬉しい…」

「泣くほどなのお？自分ではちよっとくさかったかなって思ってるんだけどね」

後日、確かに周りの友人やら知人にバラの話をしたら、どうやらバラは送りたいとも恥ずかしくてなかなか送れないものらしい。私も初めての体験だったが自分が本当に愛してる人だったから、恥ずかしいとかという気持ちはなかった。

「泣くなよお。そんなに嬉しいの？」

「うん、嬉しいよ。とにかく嬉しいの。バラなんて貰ったの初めてだし、しかもこれ私の歳の数でしょ？」

「うん。その通りだよ！よく気付いたね。」

「なんだかドラマみたいで夢みてるみたい……」

そう言った後、泣きながら彼女は私に抱き着いてきて、しばらく離れようとしなかった。
よっぽど嬉しかったみたいである。どうかな？って心配してたけど送ってよかったと思っている。

それも今となっては……ああ、あの頃に戻りたい。

彼女の誕生日その3

そして、今回の誕生日を迎えた。

今回の誕生日プレゼントは何がリクエストされるのであろうか………。

前置きとして、今回は初めて彼女の誕生日当日に逢う次第になった。それというのも彼女の子供が偶然にも修学旅行に行き、もうひとりの子供はその間に田舎に規制。旦那も見事に社員旅行というありえない偶然が重なったのである。おそらくこんな偶然は最初で最後だろう………。

なのでその日は彼女と一泊出来る。時間帯も気にせずゆっくり過ごせる日になった。私にとっても、久しぶりのお泊りでなんとも嬉しかった。

そんな彼女の誕生日プレゼントのリクエストは………。

これは数日前の話のやりとりである。

「今回はどんなプレゼントがいいの？それに、泊まれるから少し遠出もしちゃう？」

「実はもう決めてるの！」

「そ、そうなんだ…。」

少し嫌な予感がある。

「あのね、今回の欲しいプレゼントとは……、あなたとリッチな一夜を過ごしたいから、スイートルームに泊まりたいの。それが私のお願い。」

「スイートルーム！？」

「そうなの。スイートルーム！でもね、ホテルはホテルでもラブホのスイートに泊まりたいの。」

「ラブホのスイート？そんなのあるの？」

皆様はご存知だろうか？とあるラブホには普通のホテルの様なスイートルームがあるところが存在するのである。

「あるんだよ。だからさ、そこに泊まってみたいから予約してもらえないかな？誕生日プレゼントはそれがいいの。」

「了解！せっかく一泊出来るんだし、たまにはそういう贅沢もいいかもね。じゃあ早速予約しなきゃ！空いてるかな？」

私は早速そのラブホに連絡をとった。

結果、奇跡みたいだが彼女の誕生日の日だけ空いてるという事だった…。なんとというミラクル。私は早速その部屋を予約したのだが：

私が想像していたより一泊の料金が高い！私はどうせラブホだし、スイートといったって一泊二万円もあればと考えていたが、それを上回る一泊三万七千円だった……。正直な感想は、高っ！ラブホ一泊でそんなにするの？って思ったが、彼女のためならば仕方ないと思い私はとりあえずその部屋を予約をした……

甘い部屋

結局今回も高い支払いをする事になってしまった…。

そして当日。

私達は昼過ぎぐらいに待ち合わせをして合流した。とりあえずいつものように、お酒、ケーキ、料理、泊まるという事もあってその他諸々をデパートで購入する。そしていつもと違うのは食材を購入したという事。

どうやらこれから向かおうとしているラブホのスイートルームにはキッチンも完備されているみたいで、彼女の誕生日ということで調理師の私が腕を振るう次第になってしまった…。ま、作るのは好きだから、いいんですけどねっ。

そんなこんなで、目的のラブホに到着する。予約制のスイートルームは前金らしく最初に支払いを済ます。

私は部屋の内装や面積などは一切知らなかった。だけでも所詮ラブホだし、今までだってラブホ巡りはかなりしてきていたから、料金だけ高いだけで、全然たいしたことないんだろうと思っていた。

そして入室……………。

「なっ…何この部屋!？」

私の目に飛び込んで来たその部屋の映像は本当に凄いものであった。

まずドアを開けて見えるのは、きらびやかな装飾が施され、五人ぐらいが寝れそうなのとおおきな天蓋ベッド。周りには天使が飛んでいる…。

そしてその少し先に、辺りの夜景を満喫出来るこちらもかなり大きな露天風呂付きバルコニー。

その隣にはゆったりとしたスペースの岩盤浴とサウナ、ルームランナー、マッサージチェアー2台。

果たして何畳あるのだろうかとおもう程広い…。

だがそれだけでは終わらないのだ…。なんと2階があるのだ。

2階にはオーブンがついているキッチン。

大きな天窓があり、寝ながら星が見えるハート型のラブベッド。

浴槽やシャワー、椅子などが全部透明な下の階がまる見えなお風呂場。

他にも両階にそれぞれリビングがあるなど、細かい事を言えばきりが無いぐらい凄い部屋だった。

むしろ実際この部屋を見たら三万七千円は安いほうなのかもしれない…。

「凄い部屋だねー!今日はここにあなたと泊まれるんだよっ!今回

も最高の誕生日だよ。凄い凄い。最初なにしようか？」

彼女がはしゃぐのも無理はない。私も同等でかなりテンションがあがって一緒にはしゃいでいた。

「とりあえず俺は料理の仕込みとかしてくるから、くつろいでよ。」

「は■いっ。じゃあ露天風呂にお湯はってくるね！バルコニーで座ってるからなんかあったら呼んでね。」

私は一生懸命料理に取り掛かった。

私はその日作るのは彼女の大好物なウニのクリームパスタとフワフワ卵のオムライス。

「これでよしと！まあまあ良く出来たかな……。出来ましたよ、お姫様。」

「わお！美味しそう！初めてプライベートで作ってる姿とか見てたけど、男の人が作ってくれるのってカッコイイね！少し見直したかも。」

「なんだよ少しって、だったら食べたらもつと見直すかもよ？」

「自信ありそうじゃん。楽しみですな。もう私お腹ペコペコだよ。」

「じゃあぼちぼち始めますか！」

私はそう言って、部屋の明かりを消して、キャンドルに火を燈す。
お約束だがケーキの蝋燭も歳の本数を用意した。
そしてハッピーバースデーを歌う。

「姫ちゃん、誕生日おめでとう！今日は愛情込めて作らせていただきました。どうぞ召し上がれ。」

彼女がケーキの蝋燭の火を吹き消す。それと同時に私は冷えたシャンパンを開けた。

「かんぱーい！」

お互いシャンパンを一口飲んで、いつもより少し長く甘いキスをす

る。私は自分の舌を彼女の舌に絡ませた。

「んんあっ……まだダメっ！早いよお。それは後にとっておこ！」

「じゃあ、食べて飲むぞー！作ったの食べてみて、食べてみて。」

ドキドキの瞬間だ。

「……………。美味しいー！！やるじゃん！両方とも本当に美味しいよこれ。」

その一言が聞きたくて料理した。なによりも嬉しい瞬間だ。

「でしょ？結構やるっしょ俺！見直した？」

「うん。見直したし、惚れ直したかも。今日は素敵だね！」

「今日は、は余計ね。今日も、でしょ？」

「今日はかなあ…。フッフッ。嘘だよ、今日もだよっ！大好きだ

よ。」

「大好きなんて滅多に言わないから、言ってくれるなんて嬉しくなっちゃうな！作って良かったよ。」

私達はワインを飲んで、オードブル、ケーキ、私の料理などを堪能した。お互いお酒で顔が少しポツと染まってきた。

「辺りも暗くなってきたし、とりあえず露天風呂行こうか。バルコニーに座って夜景みながら飲もうよ。」

「それいいかも！どうする？裸になっちゃう？」

「姫がいいなら俺はもちろんいいよ！とりあえず裸で行って、風呂あがってバルコニーで座るときに一応タオルかガウン着ようか。」

「うんっ。いこっ！」

私達は暗くなったので、露天風呂に入って夜景をみながらお酒を飲む事にした。なんとも贅沢なシチュエーションである。

その露天風呂は最上階にあり、まわりからはもちろん見られない造りになっている。もともとこのラブホ自体高い建物なので、そこから見える夜景も凄く素晴らしいのだ。

そこで私達はお互いを少し語ることになった………。

夢物語

夜空の下、二人とも裸で露天風呂に浸かりながら私達は話しを始めた。

「なんか夢みたいな場所だねここは…。上を見れば満天の星だし、横を見れば夜景が見れる。」

「私ね、昔っからの夢だったの：好きな人とホテルのスイート泊まって優雅な一時をおくること。今日はラブホだけど、あなたのおかげで一つ夢叶ったよ。」

「優雅な一時は、まだ始まったばかりだよ、これからでしょ！」

そう言って私は彼女を後ろから抱きしめる。そして彼女も私にもたれ掛かる。

「私、幸せだよ。あなたに出逢ってなかったら、多分こんな贅沢なんて何年たってもできやしないもん。」

「そう？ならいいけど。俺も姫に出逢ってなかったら今頃どうしてたかな……」

「あなたはきっと幸せな生活を送ってると思うよ。結婚もして、子供がいたかもよ…。」

その言葉を聞いて、私は袖にあるビールを一気のみした。

「そうかね？なんでそう思ったの？」

「だってさ、もし私と出逢ってなくなったら、あなたならすぐ恋人ぐらいできるもん。あなたの性格をわかってくれる人なんていたら、すぐだよすぐ。」

私が言うのもおかしいかも知けど、人に対してここまで優しくなれる人間なんてそうそういないと思うんだ。でもあなたは意識しなくても普通にそれが出来ちゃうんだもの。そうそう人、私が知ってるなかで、あなたただけだもん。」

「そう？前も言ったけど別に俺としてみればそれが自然体なだけな

んだけどね。俺、ぶっちゃけモテないし、モテ気なんてすぎちゃったみたいだしさ…。」

「そうなの？なら安心だね。私だけのあなただね。浮気とか絶対しなそうだし。私だけを見てくれてるもんね。」

そう言ってくれるのは嬉しいけど、私の想いに応える事が出来ないのが彼女だ。なんとも複雑だ。

お酒も大分まわってたし、私はちょっと強気にでてみた。未だに私は彼女を背中から抱きしめている。なので顔は見えない。

「あのさあ、俺は将来何年かかってもいいから姫ちゃんと結婚したいんだよ。それが俺の夢なんだ！今は姫がその想いに応えられないのわかってる。だからさ、俺はずっとその日まで待ってるからしたら俺と結婚しよ！」

私は彼女の誕生日に心の内を全て打ち明けた。今の私に出来る精一杯の事だ。

彼女は私に、もたれながらこう答えた。

「正直に思ってる事言うね…。私はあなたにそう言われて凄く嬉しいの。

こんなに真剣に私の事想ってくれる人はいないと思うし、少なくとも過去にはいなかったよ。

でも：わかってると思うけど、今はまだその想いに応えられないのが現状なの。そして、もしかしたらその時が来ないかもしれない。それでもあなたは待ってるの？

私と一緒にいる限り自分が不幸になるかもしれないんだよ？でも私は責任とれないかもしれないじゃない。それでも私と一緒にいれる？この先私があなたの事嫌いになるかもしれないよ？したらどうするの？」

珍しく彼女が長々と想ってる事を語った。

「そしたらそれでいいと思う。嫌われたら仕方ないし、また好きになってもらうように俺は努力すると思うしね。

だから微かな希望かもしれないけど、俺と一緒にいれる日を夢みて待ってるよ。だから…、この先もずっと付き合って行こうよ！

喧嘩とか、他にいろんな問題がまだまだ出て来ると思うけどしたらお互いに力合わせて乗り切って行こうよ！俺は姫の事を一緒に懸命

支えてみせるよ。」

「わかった…。何が出来るかわからないけど、私も頑張って、その時がくるように努力してみる。

私を見付けてくれて本当にありがとうね……。」

他にも色々な事を私達は夜空の下で語り合った…。

今まで長かったけど、今日でお互いの気持ちを心をわって話せて良かったと思う。

これで私達は心も身体もやっと一つになれたのだ。

お互いの目指す場所は一緒なのだ。

私達は夜景を堪能して、ベッドに向かった。

私は彼女をお姫様抱っこしてベッドまで運ぶ。

そしてその日は二人で甘く優しくお互いを求めあい、何度も何度も燃え上がった……

この先に、幸せな未来が待っているにちがいない。

どのくらいの日日がかかるかはわからないが、それまで私は彼女の事を愛し続けていこう……。

私は、私の腕枕で隣で寝てる彼女をみてそう決めた……

俺がもつともつと頑張らなきゃな。俺が絶対に彼女を幸せにするんだ。

そう考えてるうちに私も眠りについた。

夢の中でも逢いたいな……

理不尽

お互いの意思を語った誕生日が終わり、また平穏な日常が訪れる。

季節も秋に入りはじめていた頃の事……。

その日私達はショッピングモールに買い物をしに出掛けた。

「今日は秋物の洋服、かわいいのあればいいなあ。着る服がなくて困ってしまってるよ。」

「そうだね、姫に似合うかわいい服が見つかるといいんだけど…。」

この日、私はあまり乗り気ではない。なぜならちょっと最近色々な事でお金が出てしまっていてハッキリいってピンチだったのである。それでもなんとか彼女の洋服代は工面してきたつもりだった……。

「これなんて良くない？ かわいいかも！ どう思う？」

「いいんじゃないかな。姫ちゃんに似合うと思うよ。かわいい。」

「だよねっ！じゃあ最初はこれにする。うん、やっぱりこの服かわいいなあ。」

「了解。じゃあ会計してきちゃうね。」

「うん、お願いね。いつもありがとうね。」

「いいよ、いいよ。俺はこんな事ぐらいしか姫ちゃんにしてあげられないから」

前にも言ったが基本的に、お金については何を買うにしても私持ちだ。それは彼女の洋服にしてもそうである。特別な日ではなく、こういった普通のデートの時も、もちろんそうだ。

「あっ！これもいいかも！これからピッタリな感じしない？」

「だね。しかも柄もかわいいし、フリルも付いてるからいいね。似合いそう。」

「でも、ちょっとかわいい過ぎかなあ：私が着ても大丈夫？若すぎる？」

「俺は全然平気だと思うけどね：。イケてると思うんだけどなあ。」

「あなたがそう言うてくれるならいいかな。この服はデートの時しか着れない感じだけどいい？」

「うん。俺はそういう服好きだし、むしろ俺と逢う時以外は着て欲しくないかな。まあ無理にとはいわないよ。」

「よし！じゃあ逢う時だけでもいいなら、この服も買っちゃお。ちよっと自信がないんだけどね：。頑張って似合うようにダイエットしなきゃ。」

「ダイエットなんかしなくても大丈夫だよ。似合ってるし、俺は今の姫ちゃんが好きだよ。する必要ないって思うよ。」

「そう？まあしなくていいならしないけどねっ。」

「だってさあ、ダイエットしてこれ以上可愛くなったら大変でしょ？姫はかわいいから俺以外の他の男の人寄ってきちゃうもん。そして俺だよ。」

「ハハっ。ないって。絶対大丈夫！私可愛くないから大丈夫だし、他の男の人なんて寄って来ないって。だから安心しなよ。例え寄ってきて私にはあなたがいるでしょ！」

「そうかもしれないけど、もしかしたらってのがあるじゃん。俺よりカッコイイ人なんてざらにいるしさ…、そしたらそっち行っちゃうかもしれないでしょ？」

「平気だよ！私になんて誰も言い寄って来ないから本当に安心していいよ。それにあなたがいてくれる限り私は他の人なんて行かないから信用して。」

そう言ってくれるのは非常に嬉しいんだけど、なんかひっかかるんだよねあ……そんな感じで内心思っていた。

「そうだよね！ 姫ちゃんには俺がいるから大丈夫だよね。信用するよ！

とりあえずこの洋服買ってきちゃうね。」

時間帯は昼時になっていたので私達は休憩がてら昼食をとることにした。

基本彼女のその日の気分で食べる物は決まる。

この日はパスタとピザの気分だったらしい。私達は店に入った。

「あゝ、お腹減った。何食べようかなあ……。私これにする。あなたは？」

「他に食べたいのない？ 俺は姫ちゃんの食べたいので大丈夫だよ！ 大体なんでも食べれるし。」

「ん〜。じゃあこのピザなんてどう？」

「いいね、それにしよう。美味そう。」

注文の品が届いた。注文したのはトマトソースベースのパスタとシンプルなバジルとモツアレラのピザ。

「いただきます。」

彼女がパスタを一口…。

「どう？美味しい？」

「ダメだこれ。私の嫌いな味してる。私ピザ食べていい？パスタ無理。」

「いいよ。俺パスタ食べるから姫はピザ食べな。美味しいよ！」

「うーん…。ピザもダメかも。他の頼めばよかった」

……、あえて両方とも彼女の好みで選んだ品なのに両方ともダメってどういう事？私は両方とも普通に美味しいと思うのだが、当の本人がダメって…、意味不明だ。仕方ないので両方とも私が食する。

「ごめんね、私が選んだのに…。食べれる？」

「問題ないよ。全然食べれちゃうから。別の頼む？」

「いや、もういいや。見てたらお腹膨れてきた。わがままでごめん。」

実はこんなやりとりは初めてではない。ちよくちよく他の店でも一口だけ食べて、もういらないうって事があるのだ。非常に料理もお金も勿体ないと思う。

そうならないように私は彼女に好きな物を選ばせてるのに今回は両方って…。

彼女は私の意思に気づいているのであろうか？多分気づいてないと思われる…。

この日の私はお金の事もあったし、この件でちょっとイライラしてしまっていた。

そしてこの後…。

彼女と大喧嘩になってしまうのである……………

マナー・カウントダウン

昼食を食べ終えてから私達は、ショッピングの続きに戻った。

午前中にも結構彼女の洋服を買い、お昼ご飯も食べたので私は残金が気になりはじめていた…………。

今日なんとか工面して用意した金額は四万五千円。
しかし昼食代込みで、すでに三万を使っていた。

「これ良くない？一目で気にいっちゃったよ！これ欲しいかも。」

「いいかもね！かわいいじゃんその服。姫ちゃんにピッタリだよ。」

「あっ！こっちの服はあなたに超似合うと思うなあ。いいと思うんだけどどうかな？」

私も余裕があれば服は欲しいのだが今日にいたってはもう私の服分のお金は無いに等しい。
それを買うぐらいなら少しでも彼女の洋服を買ってあげようと思っていた。

「俺に似合うかなあ…、もしかしたら他にいいのあるかもしれないからちよつと保留にしておくね。それよりも姫ちゃんの服、買っちゃおう。せつかくお気に入りでかわいいのあったんだしさ。」

「…わかった。とりあえずあなたのは保留ね。」

「買ってくるね。」

今の洋服で五千円。ちなみに彼女が選んだ私の洋服も五千円。もし買ってしまったら、残りの額で彼女の洋服が買えないかもしれない…。とりあえず買わなくて良かった……。だがそれもつかの間。

「これは絶対にあなたにバッチリだよ！似合うの間違え無しだね。絶対似合うって。」

「俺の服は今日なんとなくいいや。あまり直感で欲しい物なかったし。」

「何それ？私が選んだ洋服はダメって事？」

私は墓穴を掘ってしまった…。言わなくていいのに変な言い訳をしている。

彼女を本気で怒らせてしまったようだ。

「そういう訳じゃないってば、ただ今日は俺の服はいいんだよ。姬ちゃんの買ってあげたいんだ。」

「意味わかんない。いつもは自分のも買うじゃん。なんで今日はいいらないの？私が選んだから？」

「違うって！そういうんじゃないんだよ…。少しはわかってよ……」

「ハイハイ。わかりましたよ。どうせ私はあなたが気に入る洋服なんて選べませんよ。どうもすいませんでした。」

「なんだよその言い方！別に姫が悪いなんて一言も言っていないじゃん！そうじゃなくて…、あああもう…」

「怒らせてすいませんね。私が全部悪いんですよ。もう帰る…。」

「…わかったから待ってよ。そうじゃないんだよ。正直に言うからさ。」

私は仕方なく正直に話す事にした。

「実はね、今月色々あってさ…、今日はあんまりもちあわせないんだよ。だから、俺のはいいから姫のだけでも買ってあげたかったんだよ。黙っててごめん。足りると勝手に思ってた、そしたら残り少なくなってきたから俺も心配で変な感じになっちゃったんだよ。」

「何、色々って？ 私そんな事聞いてないもん。」

「いや、だから色々あつてさ、車の車検とかギャンブルとかでちよつと使ってしまったんだよ。だからごめんね。わかって…。それでも姫の洋服代はなんとか工面したし。」

「…ふうん。で？」

「だからごめんって謝ってるじゃん。でも姫の洋服は買えたでしょ。それじゃダメ？」

「あのさあ、これから先私の前で二度とお金がないって言わないでくれる。お金ない人に服なんて買って欲しくないし。お金があるから洋服買いに来たんでしょ？」

「だからさ、さっきから言ってるけど姫の洋服は買ってあげたじゃん。俺のはまた今度じゃダメなの？」

それに俺だって他の人との付き合いとかだつてあるしさ、常にお金がある訳じゃないんだよ。

俺は大金持ちなんかじゃないし、単なる一般人なんだよ。勘違いしてない？」

「そうそう事を言わないでって言うてるの！

お金がない、お金がないってなんなの？ そんな事聞きたくないよ！私知ってるあなたはそんな事言う人じゃないもん！ ホントもう最低な人だね」

「あっそ。なら最低でいいよ。俺は前からそんな人間だよ。俺の気持ちなんて、なんにもわかってくれないんだね。もういいよ…、そんなにお金が好きなら金持ちの人とつき合えば？ どうせ俺は安月給の貧乏人ですからね。」

「そうだね。こんな貧乏人なんて、今まで何処が良かったんだろう。」

「何？ なんだかんだいって結局は金だけが目当てだったって事？ 俺は金づるって事か。」

まあそうだよ、今までは欲しい物どうにかして買ってきたけど買えなくなった途端にこの態度だもんね…。

俺が気付かない事をいいことに吸えるだけ吸ってしまおうって事か。」

お互いかなりヒートアップしてかなりの言い合いになってしまった。
だけでも私が言ったのは本音に近い…。もしかしたら本当にそうなの
かもって思っていた……………。

嘘か真か…

帰りの車中ではお互い何も言わず、ただただ沈黙が続いていた。そして車は私の家に着いた。

彼女の荷物が部屋に在ったため、お互いに気まずい雰囲気のままとりあえず中に入った。

私は少し冷静になっていたので彼女と話しをしてみる事にした。

「まだ時間あるだろうし、とりあえず座れば…。少し話せないかな？ さっきはお互いにヒートアップしちゃってたしさ。」

彼女も私の言葉に賛同したのか素直にソファに座った。

「今日はお金の事、黙っててごめんね。姫にはお金の心配させたくなかったからさ。でも結果はあんな風になってしまって……。ホントごめん。」

「別に…。謝らなくてもいいんじゃないの…。悪い事してないんだろうし…。」

私は今の言葉で少しムカッてなってしまった。言い方が悪すぎる。

「じゃあその話しはもういいや。聞きたい事があるんだけど。」

「何？」

態度があきらかに悪い。

私はぐっと怒りを抑えて聞いてみた。

「さっきの話は本当なの？俺の事は金目当てだって事。」

「そうだよ…。気付かなかったの？私はあなたのお金だけが好きなの。」

私はとうとう我慢の限界を越えた…。

「ふざけんなよ、このクソ女！人が和解出来るかと思って先に謝ってんのにいい気になりやがってよ！今まで俺に言ってくれた言葉とかは全部嘘か？」

私からは普段想像もしないような言葉が出た。あまりにも頭にきてしまつて彼女に罵声を浴びせてしまった。

「……そうだけど。何か悪い？あなたは私の事が好きなんですよ？」

「そうだよ…。悔しいけど今こんな状態でもまだ姫の事が好きだよ！俺は本当に姫の事好きだから出来るだけ不自由させないように頑張ってきたつもりだよ。なのになんなんだよこの仕打ちは…。」

「あなたはさ、本当に私がお金だけが目当てであなたと付き合ってると思ってるの？」

「だってそうじゃないの？ そう言ったのは姫のほうじゃん。いくらなんでも酷いよ……………。俺はそんな人じゃないと今でも思いたいけどね。」

「ごめんね…私…。本当はあなたの事お金だけなんて思ってもないし、金づるなんて思った事もないよ。けどね、私だけ好きな物買えてあなたのは買えないなんて嫌なの！ 今まではあんな事一度もなかったからちよつと頭に血がのぼっちゃって……………。本当にごめんなさい、私のわがままのせいです…。ごめんなさい。」

なんかしらないけど、今回は彼女に謝らせる事が出来たみたいだ。色々言ってみるものである。

「…もういいよ。やめようこんな事。お互い誤解してただけじゃん。」

「本当にごめんなさい。私は馬鹿だよ。あんな酷い事言って…………。あなたを傷つけたただけだ。お金の事は私だってわかってるつもりでいたのに…あなたの優しさを悪く言ってごめんね。」

「だからさ、もういいって。けどさ、この際だから本当に確認するけどさ、俺の事は金づるじゃないんだよね？信じていいんだよね？金づるなら俺は本気で別れるよ！」

「そんな事は絶対ないよ。あの時は私も頭きちゃってて訳わからなくなっちゃってしまっただけ。好きだから…私の事わかってくれてる人だから付き合ってもらってるの。あなたがいないなんて考えられない。本当にごめんなさい、許して。」

「それならいいけど。俺は本気で姫の事考えてるし、性格も好きだから不自由させないようしてるつもりなんだ。まだまだかもしれないけど、今出来る精一杯の事してるのはわかって欲しいんだ。俺の考えは第一に姫の事なんだよ。だから俺の事は二の次でいいんだよ。」

「わかった…。あなたの私に対する気持ちも理解出来ないでごめんね。本当にあなたは私の事を何より第一に考えてくれてたんだね。そんな事もわからないで私はあなたに酷い事言っちゃって…。最低なのは私だね。」

わかってくれたならいいんだけど…本当に彼女はわかってくれてるのだろうか？ただたんに本当は金づるの私をまだ失いたくないだけ

で、調子のいいことを言って繋ぎとめておきたいだけではないのだろうか？

私はそんな風にも考えはじめていたが、今回は彼女を信じてみようと思った…。

でも、信じてみたけどまた同じような問題に私は直面するんだよねあ…。

・・・再び

色々あるが、私にとって彼女は掛け替えのない存在は確かだ。

この頃はまだ何をされても、何を言われても未だに嫌いになれないでいた。

季節は秋が終わった。と、いうことは……………

皆様方よくご存知の、私が最も嫌うシーズンが近づいてきた…。そう、一年で必ず訪れるクリスマスである。この時期になると必ずといっていい程に何か嫌な事が起きてしまう。それは何故なのかは本当にわからない……。

そして今年は何が待ち受けてるのだろうか…。

時は12月。そろそろ例のシーズン到来だ。

今年こそは一緒に過ごそうとお互いに約束する。もちろん私はそうしたい。

「今年は私もちゃんと休みとれたからねっ！楽しいクリスマスにしようね。」

「うん。俺も休みはバッチシとれたよ。楽しみにしてるね。」

まあどっちにしろ私が彼女にクリスマスプレゼントを買うことは決定している。

私は年間でどのくらいの金額を彼女に投資しているのであろうか疑問だ？考えるてみるととんでもない金額なので考えるのはやめる事にしよう。私は彼女のプレゼントの為に働いているといっても過言ではないのだろう。

そんな矢先にお決まりの問題発生だ。

【姉さん、事件です。】

以前テレビドラマで放送されていたあのドラマの台詞が私の頭に浮かんでしまう。

バチンッ！！！！

なんだか凄い音がしたような気がした。
なんだ？

私はまわりを見た。

あれ？ 見ている景色がおかしいなあ…。

その瞬間に激しい激痛が私を襲った。

その日はいつもの様に普通に仕事をしていたのだが、その時は野菜の仕込みをしていてリズムカルに包丁を走らせていた。確かあの時は南瓜を切っていたと思われる。そのうちの一つの南瓜がとても固く苦戦していて、私が力を最大限に加えた瞬間だった。

何故そうなったのかはわからないのだが、私はその場に倒れていたらしい。そして気絶して救急車で運ばれたみたいである…。

私が眼を覚ますと、見知らぬ天井が見える…。ここは何処だ？ 点滴！？ 病院か。脚が…、う、痛いぞ。何が俺に起きたのだろうか？

しばらくすると先生がやって来た。そして説明をはじめた。

なるほど…。そういう事ですか……。納得した。

結論からいうと、前にやった背中と腰のヘルニアがまた痛み出して
たみたいで私が気付かないうちに神経をかなり刺激してたみたいだ。
そしてそれが今回は脚にまでできていたらしい。

バチンッて音が鳴った気がしたのは背中の筋が伸びきってしまった
時に感じた音みたいだ。この音は本人しか聞こえないらしい。

それで激痛が背中、腰、脚にきてしまって、痛みに耐えられず倒れ
たのだそうだ。でもどうやら少し安静にして、注射をうてば良くな
るみたいだ。良かった…。

だが甘かった。その注射というのがとんでもなく痛い！痛すぎた！
専用の注射器で骨と骨の隙間に薬剤を打ち込むのだが、麻酔をかけ
られない場所らしく、これが痛くてたまらない…。

とりあえずその日は病院で一泊して様子を見る次第になった。親に
連絡をとり、事の経過を伝えて明日迎えにきてもらう事になった。
マネージャーにも連絡をとり明日来てくれる事になった。

最後に彼女。とりあえずメールをした。

（倒れて、今病院にいます。電話できる？）

（何言ってるの？冗談でしょ？怒るよ。今は電話無理だね。また後
で。）

（いや、本当なんだけど…。説明したいけど電話無理みたいだから、また明日にでも連絡ください。）

なんで信じてくれないのだろうか……。もし逆の立場だったら私はすぐにでも飛んでいくのになぁ…。なんだか非常に残念な気持ちになってしまった。

結局その日は彼女からの連絡は来なかった……。……。

迫りくる悪魔の心

次の日、私は松葉杖についてだが立ち上がる事が出来るようになった。

マネージャーが来てくれて、完治するまではとりあえずはゆつくり休めといわれた。私は仕方がないがまた無職に逆戻りになってしまった…。

親の車で実家に帰る。先生の話しでは無理をしなけばすぐにでも普通に歩けるようになるという事なのでそれを期待して安静にするつもりだ。

そして問題は彼女だ…。私はメールを試してみた。

（今病院から実家に着いたよ。とりあえずは松葉杖を使えば歩けるからそんなに心配しないでいいからね）

数分後、返事がきた。

（本当だったの？大丈夫？松葉杖ってどうしたの？事故ったの？仕事終わったら電話するね。）

昨日の時点で何故信じてもらえないのかなあ……。私は憂鬱になったし、彼女に対して嫌悪感すら感じはじめていた。

プルルル…プルルル…、着信音になった。

「もしもし、私だけ何があったの？本当に大丈夫なの？」

「うん、もう大丈夫みたい。仕事中に古傷が痛みだしたらしく倒れちゃったみたいなんだ。でも注射も討ってもらったし安静にすればすぐ歩けるようになるみたいだから本当に大丈夫だよ。だから安心して。」

「大丈夫ならいいけどさ…ごめんね、昨日のメールはふざけてるのかもしれない…。本当だったんだね。ごめん。」

「もういいよ。でもさ、俺は姫ちゃんに嘘なんてつかないから、今度からは信じてよね。信頼してもらえてると思ってたから精神的にちよつときつかったよ…。できれば支えて欲しかったのが本音かな。」

「そうだよね、そんな時に支えてあげるのが私の役目だよね。本当に馬鹿でごめんね。信じます。」

本当かな？ また口だけじゃないのかな？ ってその時の私は思っていた。

けど自分が彼女の事を信じてあげないといけないとも思っていたと思う。

なんだか人を信じるって簡単な風にみえて実は難しいみたいだ。

「そのうち歩けるようになって車も乗れるだろうから、そしたら自分家に戻るからさ、その時にお見舞いにでもきてよ！ さすがに実家に来るのは嫌でしょ？」

「そうだね、行ってあげたいけど実家はキツイかな…。ごめんね。」

「平気平気。それもわかってるから大丈夫。俺も早く姫ちゃんに逢いたいから一日も早く治る努力をするね。だからそれまでは待ってね。電話とメールは普通に出来るのが救いだね。」

「わかった。また明日この時間に電話するね。安静にしてるんだよ。そして早く治ってね！またね。」

そして数日後…。

私の身体は調子を取り戻し、普通に歩け、車にも乗れるようにまで回復した。

今日からは完璧になるまで自分家で療養する事にした。

「もしもし、今日から自分家に戻って来たよう！これで姫ちゃんも来れるよ。」

「そうなんだ。早かったね。とりあえずは良かったよ。じゃあ次のお休みの日に行こうかな。平気？」

「全然大丈夫だよ。楽しみに待ってるね！嬉しいなあ、久々に姫ちゃんに逢えるんだね！」

そして当日、約束通り彼女はやって来た。

来てくれた時は久しぶりで嬉しさ百倍みたいな感じだった私だが……。

彼女が帰る頃には、どん底に落とされるなんて思ってもいなかった。

近づく影

ピンポーン。私の家のチャイムが鳴った。彼女が来たみたいである。

「久しぶり、逢いたかったよっ！怪我の調子どう？もう大丈夫なの？」

「まだまだ完全じゃないけどなんとか歩けるようにはなったよ。早く姫ちゃんに逢いたかったから頑張ったんだよ！来てくれて、超嬉しいよ。」

「調子の良いこと言っちゃって…、でも私も早く逢いたかったんだよ！寂しかったもん。あとさ、メールの事は今更だけど勝手に解釈しちゃって本当にごめんね」

「ちょっとショックだったのは事実だけど、もうそんな事忘れちゃったよ。だって、こうして逢いに来てくれたんだし。ありがとう姫ちゃん。」

「ねえ、チュウしよっか。私はチュウしたいなあ…」

「俺もだよ。」

久しぶりの彼女の唇の感触は、とても柔らかくてなんだかホッとする気持ちにさせてくれた。

「なんか照れるね…。」

「チュウしようなんて、あんまり言った事ないから、いざそう言うてからするのって恥ずかしいかも。」

私達はお互いに笑いあった。

「でさ、仕事はどうするの？完全に治るまではまた休養なの？」

「今のところはそうなってるけど……。実はさ、今の職場、辞めようと思ってるんだ。理由としては、俺がいつまでもこんな状態だ

ったら他の人に迷惑かかるし、後はおばちゃん達に合わせるのが正直しんどいんだよね。アレやれコレやれって五月蠅いしさ。だから丁度いいかってね。どうせあそこにも前みたいの上のポジシヨンにもなれないしさ。」

「そっかあ…。じゃあ、しばらくは療養してちゃんと治してそれから次の仕事探さなきゃね。私、何も出来ないかもしれないけど応援するからね！一緒に頑張ろうねっ。」

とても暖かく、なんて優しい気持ちになれるのだろう…。私は彼女のその言葉に感謝をおぼえた。

「ありがとう、俺も早く治して仕事復帰するように努力するね。でも姫がいてくれれば一騎当千だよ！」

「一騎当千？まあよくわからないけど私は傍にいるからね。」

こんな感じで私にとっては心地好い時間が流れていたが…………。

「ところでさあ、クリスマスはどうする？」

「クリスマス？多分今の状態だとエツチも出来ないかもしれないよ…。何処かに出掛けるのもキツイかもしれないなあ…。今は安静にしないとかなんといけないみたいだし。でもさ、一緒にご飯食べて、お酒飲んでまったりやろうよ！」

私は、最もな意見を言ったつもりだった。
だけど彼女はその一言で、悪魔になってしまうのだ。

悪魔

突如彼女が声を荒げた。

「え？せっかくのクリスマスなのにエッチも出来なければ、どっかに出掛けるのも無理って…、冗談でしょ？そんなの絶対嫌だ！私そんなの無理。せめてエッチだけでも出来ないの？」

「無理だと思う…。とにかく身体に負担をかけるとダメみたいなんだ。残念だけど医者に止められてるんだよ。俺だって…出来るなら姫ちゃんとエッチして甘い時間を過ごしたいよ！でも無理なんだよ…。だから今回は部屋でパーティーしてまったりしようよ。」

「嫌！絶対に嫌だ！そんなのつまんない。だってクリスマスだよ？恋人同士なんだよ？なのに何もしないなんて有り得ないって。そんなの恋人同士なんかじゃないじゃん！」

「俺だって体調が普通だったらエッチだって他のなんだって出来るよ！でも今は仕方ないでしょ？俺だって好きでこうなったんじゃないよ！」

「はいはい。そうだよ。今回も全部私が悪うございますよ…。すみませんね、こんな女で。でも嫌なものは嫌なんだよ。だってさ、家でまったりなんていつでも出来るじゃん！そんなの嫌。」

「嫌なのはわかったけどさ、でもしょうがないでしょ？今の俺じゃそれしか出来ないじゃん。姫ちゃんの気持ちに応えたいけど応えられない状況を理解してよ！それに、家でまったりするのだっていいじゃん！」

普通にクリスマスケーキ食べてさ、これからの事とか昔の事とかお酒飲みながら話すのだって楽しいと思うんだけど。

そりゃさ…その後にエッチなんて出来たら最高だけど今はしたくても出来ないんだよ……。」

「ああああ…。なんかムカついてきた。私馬鹿みたいだ。」

「そんな事言わないでよ。姫ちゃんは馬鹿じゃないでしょ。」

「そういう意味じゃないよ…。何勝手に勘違いしてんの？私が言いたいのは、なんでこの人と今一緒にいるんだろうって事を感じたの。この人と一緒にいる自分が馬鹿に思えただけ…。」

「は？それどういう事？」

「どういう事って、そのまんまだよ。あなたなんかとなんで一緒にいるんだろうって事だよ。自分が可哀相って思えてきただけ。」

「可哀相って……。俺の事好きなんじゃないの？」

「へ？好きだった：でしょ？今は好きじゃないし、今日なんでここに来たのかも意味わかんないよね。なんでだろう？」

「意味わかんないのは俺のほうだから……。急にどうしちゃったの？なんか別人みたいだよ？それに好きじゃないって…………。」

「さっきも言ったけど、もう好きじゃないみたい。だからこの際別れよっか？」

「…………。別れる！？なんでそうなるの？俺がクリスマスにエッチ出来ないだけでなんでそこまで話が進んじゃうわけ？俺だってし

たいけどこれ以上体調が悪化しちゃマズイから、したい気持ちとかぐっとこらえてるのに……。確かに姫ちゃんには申し訳ないと思ってるけど今はどうやっても仕方ないんだよ。だから少し冷静になつてよ！」

「もう言うことない？」

それじゃ帰るわ。早く身体治ればいいね。さよなら」

そう言って、彼女は私の家から出て行った。

もう何が起こったのかがわからなかった……。

手負いの私に最初は優しく微笑みかけ安堵させ、その後に、はい上がれないように奈落に落とす。

彼女は……………

悪魔だ……………

こんな事で？と思われるかもしれないが、彼女に依存していた私はこの時に初めて【死】という言葉を意識した。
いつそその方が楽になれると思っていたのかな……

自我崩壊

彼女が帰ったあと、静けさだけが私の部屋に残っていた。

これまで彼女と共に過ごしてきた時間は何だったのだろうか……。

あんな些細なやり取りで、こうもあっさりと終わりになってしまふのか……。

私は、考えれば考える程に彼女の事が余計わからなくなってきていた。

ついさっきまでは、逢いたかったと言い…、ものの数分後には別れを突き付けられた…。

頭の中はグチャグチャで、イマイチ正確な判断が出来ないでいる自分がいる。

そんな時に何故だかはわからないが、ふと思い付いた事があった。
…これだ！

仕事も辞めようと考えてたし、一番の生き甲斐だった彼女もいなくなった。おまけに体調も芳しくはない。

ならいっそ、こんな人生はとっと諦めて次の人生を楽しめばいいのではないだろうか…。

私はきわめて真面目にそう考え、それが一番だと感じていたのである。

だが人間という生き物は頭では考えられても、いざこうしようと思った時には結局その恐さに打ち勝てず、何も出来ないのが多くの人々だと自分も含め私はそう思えた。

結果、なんらかわりのない日常を送ってしまうのだ。前と違うのは彼女という存在が無くなったということぐらいか…

そのせいか、何か抜け殻のような存在になってしまった私自身…。毎日がただ起きて寝ての繰り返し…特に何をするという事もない。

この先楽しい事は待っているであろうか……。その頃の私に

は観るもの感じるもの、全てが悲観的な世界であつた…

メリークリスマス

今日はクリスマス…。

かといって、今の私にはなんの変哲もないただの一日にしかすぎない。

だけれども、テレビをつければ世の中は恋人同士であふれている映像ばかりだ。私はそれらを見ていて、

やっぱりというか…普通というか…どうしても彼女の事を思い出してしまう…。

今頃は何しているのだろう…、俺とあんな別れ方して寂しくないのかな…、もうすでに他の男性と付き合いはじめているのかなあ…、旦那さんにいじめられてないか心配だなあ…、など考える事は全部彼女の事だった。

あんなに一方的に理不尽で別れを言われたのに、私はそれでも彼女の事が心配で仕方がなかった。まだまだ好きなんだなあって思ってしまった。

出来る事なら彼女とやり直したい。これが正直な私の心うちである。

だが今の彼女に何かを言ってどうこうなるとも思えない……どうすれば……。

考えても仕方ない！なるようにしかならないのがこの世の中だ。少しはポジティブに考えなければ！

！！！！突如聞き覚えのある電話の着信音……。

「はい……もしもし……。」

「やあ。今何してるの？」

「何もしてないよ。」

「怒ってる？」

「いや……全然怒ってないけど……。どちらかといえば寂しいかな……」

「ふん。怒ってないのか…。私は怒ってるよ。」

「なんで！？俺が理由？」

「それしか理由なくない？このタイミングで他に理由あるかね？」

「い、ごめん…」

私は訳もわからず、つい謝ってしまった。

「なんであの後連絡くれないの？私はあなたからの連絡を待ってたんだけどさあ…。もう連絡しないつもりだったの？」

「しなかったけど…あんな感じで出て行っちゃったから訳わからずで…、きつと今しても余計逆なでするだけかなと思ってた。」

「そっかぁ…。私さ、この前は少し言い過ぎたと思ってます。ごめんね。でも嫌なものは嫌だったんだ…」

私には彼女が何を言いたいのかがよくわからない…。なんで電話してきたのだろう？仲直りしたいから？でもそんな風には到底思えない感じがする。

「いや、別に謝らなくていいけど…。ところでさ、なんで突然電話してきたの？もちろん電話かけてきてくれた事は嬉しいんだけど、姫ちゃんは今も怒ってるんでしょう？」

「まあ怒ってないって言ったら嘘になるけど…。今日はクリスマスだから私と離れてて何してるのかと思ってただけ。もしかしたら誰かとワイワイやってるのかも気になってたから…」

「こんな状態なんだから、外に行く事も難しいし…もし仮に誰かに誘われたとしても断ってるよ。」

「だとは思ってたけど、本当にそうでちょっと安心したかな。もしこれで遊びに行ったら私、完全にあなたにブチ切れてると思うし。」

」

「もう俺の性格だってわかってるでしょ？俺はそういう事思っても実際はしない人だよ……………」

「わかってるつもりなんだけど…………、なんか腹たってきてしまっ
て…。」

少しの沈黙をへて…、私は彼女に別れを言われた後に考えてた事を
打ち明けた。

「うちらさ、しばらく逢わないほうがいいのかもね…仲直りしたっ
てすぐ喧嘩してこんな状態になっちゃうしさ。どれくらい必要かは
わからないけど、しばらくは距離あけたほうがいいのかもってあの
後少し考えてた事があったんだよね。」

「それは私も思ってた。お互いそう思ってるならそうしょっか？」

「もし本当にお互い好き同士なら、例え離れてても大丈夫でしょ。」

その事を試す機会としても丁度いいんじゃないかな？」

中々彼女から返答が返ってこない…………。

「姫？もし姫が耐えられなくて嫌なら普通通りに戻ってもいいけど、俺が今までみたいに普通に接しられるかはわからないけどね…、正直いうと、そうなれるか自信ないんだ俺。」

「わかったよ…。あなたの事そういう風にさせたのは私だから、私のわがままのせいだろうから…………。」

「先に言うね。ごめん…。」

今日はそうじゃないって言えないや。俺がこうなったのは多分だけど姫のせいだと思うよ…。」

「！？ああそう！やっぱり私のせいだよね。そうだと思ってたけど、いざそう言われると…………。」

彼女が爆発しそうだ。けど今回は私も下がれない。あんなにツライ
想いをしたのだから……。

「そうだよ！全部姫のせいだ！俺にツライ想いをさせてるのは姫の
せいだよ！。でもね、でもそれでも嫌いになれないし、本当に好き
なんだ。だから離れても俺は姫の事を忘れないし、好きでいられる
自信があるんだ！姫はどうなの？」

「知らないよ！そんな事…もういいです。わかりました。」

ブチ…。ツ…。ツ…。

電話は切られた。

でもこれでいいんだ。

俺は間違っただけ…。

後は運命に任せよう。

メリークリスマス…姫…。おやすみ……………

新たな一歩（前書き）

ここまで読んで頂きまして本当にありがとうございます。

私自信、過去の事とはいえ全て実話なので：書いていて、時に辛くなったりもしています。更新が遅れがちになっていきますが辛さと戦いながら執筆できたらと思っていますので今後ともよろしくお願い致します。

更新が遅れてしまっていて誠に申し訳ありませんでした。

新たな一歩

あれからどのくらい経ったのだろう…。すでに一年は経過していた
……………

私はあれから彼女に連絡する事もなく、日々自分の体調を万全にする事のみに集中していた。そのかいあってか医者からもゴーサインをいただけるまでに回復していた。

この一年間、私は仕事もせず日タリハビリの繰り返しと、調子の良い時を見計らって相変わらずスロットで稼いでいた。スロットといってもフルに朝から晩までではなく、体調の事もあり、一時間の時もあれば長くても半日だった。それでも十分とまではいかないが、短い時間のなかでもそれなりに収支が得られていた。

体調が回復してきて、仕事が見つかるまでの間、本腰入れてスロットで稼ぐつもりだったが、そうそう上手くいかなくなるのがこの世の中だ。期待値を大幅に下回る収支やらが続き私はスロットから退いた。これ以上やって大事なお金を失うわけにはいかなかった。

そんな矢先、職業安定所で、ある一つの物件が目に残った。とりあえず面接だけでも……………。

結果はその場で採用。明後日から仕事開始という流れになった。世の中：悪い事もあれば当然ながら良い事もあるもんだ。私はこの職場から新たな人生を始めてみようと思決意した。

真新しい建物、今までに見たことのない調理機械、広々とした清潔感あふれる職場環境。そのどれもが新鮮ですぐにこの環境が気に入った私はここで頑張ろうと思った。

後は人員がよければ全てよしなのだが……。そこで私は、ある一人の女性に心惹かれる事になる。

一目見た瞬間に私のなかのなにかが弾けた。彼女（姫）以外にこんな気持ちになったのは始めてだった……。

その彼女は私より二つ年下で、とにかく笑顔が反則的に可愛い。笑った時に見える八重歯も凄く可愛いくて私はすぐに彼女の事が気になるはじめた……

彼女は職場では私の教育係で普段から接する機会が多く、私はそれが嬉しかった。彼女は可愛いだけでなく仕事も凄く丁寧で教え方も上手い。職場のみんなからもとても慕われており、みんなの中心人物でもあった。

でも、そんな彼女ともお別れの時が近づいていた。それは何故か？
答えは簡単だ。私がここに来たからである。私が彼女のかわりにそこで調理をして、彼女は別の場所に移動して新たな場所でチーフとして働くらしい。物凄く残念だが決まってしまったので仕方ない。

彼女の最終日。運よく私はシフトが一緒だった。

仕事終了後に個人的にプレゼントを渡すと彼女は凄く喜んで私に微笑んでくれた。

そして別れ際、嬉しい事に彼女のほうから電話番号とメアドを教えてくださいましたのである！

「こんな大きなお花貰った事ないし、他にもプレゼントくれてありがとうね！

最後にこんなサプライズがあってビックリしたけど凄く嬉しいよ！

短い間だったけど楽しかったし、また何処かで一緒になるかもね。その時はよろしくね！殆ど仕事もすんなり覚えてくれて教えがいあったよ。あなたならこれからも安心して任せられるよ。お互い頑張ろうね！そしてこれからもよろしくね。それじゃまたね。バイバイっ」

「うん。こちらこそ色々ありがとうね。教え方上手だったからすぐ理解できたし、解りやすかったよ！向こうに行っても頑張っ

！それじゃまた。それから、後でメールするね。」

「わかった。メール楽しみに待ってるね。」

そうして彼女は去っていった。

でも電話番号もメールアドレスも教えてもらえたし、意外といい感じかもって私は思っていた。

もし彼女とお付き合い出来れば姫の事も忘れられそうだな…。

私は新たに一步を踏み出す決心を心密かに誓った……

チャンス到来!?

彼女のいなくなった職場は何処かポカンとしていて寂しく感じた。

とりあえず彼女の期待に応える為にもやるしかない！仕事は一生懸命やらなくては。

私は二、三日おきに彼女とメールをしていた。彼女とのメールのやりとりは、とても楽しくて私に癒しを与えてくれていた。だが、なかなか逢うアポがとれなくて私は悩んでいた。何処か遊びに行きたいのだが中々お互いの休みが合わずじまいで…………。

そんな矢先の事。パートさんが辞める事になり、最終日に私はその人と遅番でくむことになった。遅番の時間帯は二人だけなので今までの色んな事を話していた。そして終了の時間を迎えようとしていた時に、突然前触れもなく彼女がやって来た。

どうやらそのパートさんとはかなり仲が良かったらしく、リスペクトしているとの事だ。その人の最後という事もあり駆け付けたらしい。理由はどうあれ彼女に久しぶりに逢えて私は物凄く嬉しかった。

相変わらずの可愛さで、眩しいくらいにキラキラして見えた。
そしてそのパートさんとの別れ話も終わった頃…、信じられない言
葉を彼女が私に言う。

「暇してる？中々予定合わないしき、この時間にあなたがいたのも
あるし、せっかくだからこの後どっか行かない？」

ま、マジですかあ！！！！私は願ってもないチャンスが到来して心の
中で何度もガッツポーズをしていた。

「暇。暇。超暇だよ！行こうよ！何処行く？飯？飲み？なんでもこ
いだよ！」

「私、夜景が見たい…。」

夜景！？いきなり夜景を見たいって言われて私は少し動揺していた。

「ううん…。なんでもない。ご飯食べ行こっか？」

「よし、夜景見に行くよ！ドライブデートしよ。」

「え？でも明日も仕事でしょ？変な事言っでごめんね。悪いから夜景はいいよ」

「何言ってるの！仕事だろうがなんだろうが関係ないよ。ほらっ、行くよ！」

私は彼女の手をとって車まで行った。ちゃんと助手席のドアを開けて彼女をエスコートした。

この感情はなんだろう…。姫には助手席のドアすら開けてあげた事はない。なのに不思議と彼女の時は自然と体がそう動いた。

私は彼女の事が好きになってるのだろうか？久しぶりに味わうこのドキドキ感は何ともいえないくらい私を震わす。

「何処の夜景が見たいの？何処でも連れていくよ。」

「お台場がいいなあ。あそこの夜景が凄く好きなんだよね。いいの？」

「もちろん！お台場ね、よっし！行くよー。」

「超嬉しいよ！よろしくお願いします。楽しみ！」

こうして私は彼女を禁断の助手席に乗せて、お台場まで行く事になった。

いい感じ…

最初に、彼女の呼び名を紹介したいと思う。
私達が車でお台場に向かう途中の会話だ。

「メールだと俺勝手にアユちゃんて呼んでるけど、みんなからはなんて呼ばれてるの？」

「そうだね…、アユミだからそのままアユミかアミが多いかな。アユは中々呼ばれないかも。でも、あなたからはアユでいいよ！聞き慣れてないから新鮮だし、なんかいい。」

「よし。じゃあこれからはアユって呼ぶね。俺の事はまかせろよ。呼びたいように呼んでね。」

「うん、わかった。そうさせてもらうね。ところでさ、お台場は行った事あるの？」

「まあ一応はね…。アユちゃんは好きって言うくらいだから結構行

ってるの？」

「秘密…。ついてから気が向けば話してあげる。あなたはやっぱり彼女と？」

「だね…。」

「あれ？なんか思い出しちゃった感じ？ごめんね…、私、嫌な事言っちゃったみたいね。」

「全然！俺もお台場の夜景は好きだから行きたかったし！たまたま今までは一緒に行きたい人がいなかったただだよ。」

「…？。それって私なら一緒に行ってもいいって事になるのかな？」

アユちゃんも小悪魔的なものを持ち合わせているみたいだ。どこことなく姫と被る部分があるのには否めない。私はそういう人に惹かれるらしい。

「そうだね。アユちゃんとなら一緒に行きたいな。って、なんか俺で遊んでない？」

「だってあなたって仕事の時もそうだったけど、結構ハッキリ言う人だからちょっとからかってみた。」

「なんだよそれ。でも当たってるね。俺は感情においては結構ハッキリ言う方だと思う。だからアユちゃんとなら一緒に行きたいなあって思ったんだよ。」

「それって褒められてる？まあメールとかで私の事気に入ってくれてるのは気づいてたけど。」

「言うね。確かに気に入ってますけどね。だってアユちゃん可愛いんだもん。気になってる質問していいかな？」

「どうぞ。なんだろう？」

「今さ、付き合ってる人とかいないの？」

「いないよっ！」

彼女はかわいらしく私の方を向いてサラっと答える。

「なんで？そんなに可愛いんだからモテるでしょ？男寄って来ないの？」

「正直寄ってくるけど…みんな大抵軽めで遊び人ばっかなんだよね。だからそういう人は喋ったらすぐわかるし、つまんないから断ってるんだ。」

「んじゃ俺は？」

「大丈夫だよ！少なくとも職場で話しして、結構メールもしてるし、そんな人じゃないのわかってるからね。あなたはタイプ的には真っ

直ぐな人っぽいからこうやってデートにも誘ったんだよ。嫌いな人とはデートとかにも行きたくもないよ。」

「それ聞いた後だと、なんだか凄い嬉しいんだけど。」

「今度はこっちが質問していい？」

「うん。なにかな？」

「そっちこそ彼女いないの？」

私はキッパリと言った。

「今はいないよ。」

「そうなの？なんかいそうな感じするけど……ま、いないって言うっ

てるし怪しいけど信じてあげるよ。」

実際のところ、姫と離れて一年以上がたっているし、お互いに連絡も取り合っていない。別れているといってもいいと思った…。

「じゃあお互いフリーなわけだ。なら今日は遠慮なしで楽しもうねっ！」

「おうよ！初デートを満喫しよう。」

今のところ、なんかいいかんじだ。彼女と話してるととにかく楽しい。これが本当の恋っていうのかな…。

車は夜の高速を抜けて、目的地のお台場に到着した。

深夜のデート

「どうする？時間的に観覧車は終わってるし、とりあえずご飯でも食べる？」

仕事が終わったのが8時。それから話しこんでいたため職場を出たのが9時過ぎだった。それで出発が遅かったため観覧車などのアトラクションは残念ながら終了していた。

「ご飯はまだ大丈夫。海浜公園へ連れてって欲しいな。」

「わかった。海浜公園だね。車もとめられるし、いいかもね。」

「思ってた以上に詳しいんだね。ちょっとビックリしてるよ。もしかして何回も来てるの？」

「そうだな…。2回ぐらいは来たことあるね。その時に大体は覚えてみたい。」

「ふ〜ん。夜来たことはあるの？」

「夜は1回だけかな。観覧車乗って夜景見た。」

「へえ〜、いいなあ。私も観覧車乗りたかったな…。羨ましいよ。」

「乗った事ないの！？いかにも乗ってそうないメージあるけどなあ。でも今日だったら俺とだけど、それでも乗ってくれた？」

「なんで？乗るよ！普通にデートしてるんだからかまわないでしょ？だから観覧車が動いていて、誘ってくれたなら普通に一緒に乗ってるよ。」

「そっかあ…、それはかなり残念かも。」

「あなたも観覧車乗りたかったの？でも乗った事あるんでしょ？」

「それとこれとは別問題でしょ。俺だって誰とでも乗る訳じゃないし、アユちゃんとなら乗ってみたかったなあと思ったのさ。」

「そうなの？　なんか優しいから誘われたら誰とでも観覧車乗りそうにみえるけどね。」

「そんな事ないってば！　アユちゃんだからだよ！」

「わかった、わかった。そういう事しておくから、そんなにムキにならないのっ。そんな事でムキになるなんて、かわいいところあるんだね。」

完全に彼女の方が上手だ。彼女は人の扱い方をよく知っている。それでいて、私を手の平の上で遊んでいるみたいだ。私はかわいいと言われ、少し照れていた。

「アハっ、照れてるし。面白いね、あなたって。」

「そう？でも面白いなら結構だね。まあ、観覧車は諦めて次にして、そろそろ海浜公園に着くよ。」

楽しい話をしてるうちに車は海浜公園に着いた。

「着いたね。行こうか。」

「うん。うわあ、ホントに来たんだね！嬉しい。」

彼女は凄い喜んでる。連れて来て良かった。

「少し寒いね。大丈夫？」

「ありがとう。大丈夫だよ。本当に優しいんだね。」

私達は海辺を歩きながらお台場の輝かしい夜景を見てまわった。夜景を見ていると本当に癒される。ふと彼女がある場所で止まった。

「ここから見る夜景が1番好きなんだ……………」

少し冷たい風が彼女の髪を揺らしていた。夜景の光に照らされて、彼女はとても綺麗でいて可愛くも見えた。

彼女はその場所から離れずずっとその場から夜景を見ている。夜景を見ている姿がどことなく寂しくて、せつなさすら感じる。

私はその姿を見ていて、何故だかわからないがたまらなく彼女を抱きしめたくなった。そんな彼女を後ろから抱きしめようとした時に彼女の口がひらいた。

「あのね……………、私、まだふっ切れないんだよね……………。前の彼の事。今は好きかどうかはわからないけど、何故だかふっ切れない。どうしてだろう…。この場所はね、その彼と以前来た場所なんだよね……………」

私はとっさに腕を引っ込めた。

「そうなんだ……。アユちゃんはさ、まだきつとその彼の事好きなんじゃない？アユちゃんはまだ忘れてないんでしょ？」

「どうだろ……。自分じゃわかんないや。」

「ならさ、とりあえずこれからはその彼じゃなくて、俺と見た夜景にすれば？」

「まったく……どんだけ優しいんだよ。でもさ、ありがとう……。なんか元気でてきた！」

いい顔をしている。もしかしたら彼女の中で何か決意したのかもしれない。
そしていつもみたいに私に向かってとびっきりの笑顔を見せてくれた。

「その笑顔は反則だよ。ズルイって。可愛いすぎだから。でもさ、元気がでたら連れて来たかいたったよ。」

「本当に連れて来てくれて凄い嬉しいよ。それに、あなたは私に勇気をくれた。今日あなたとここに来られて良かった。私、これでまた頑張れる！ 今日あなたと見た夜景は絶対に忘れない！ 一生忘れないからね！ ありがとうっ！」

「俺の方こそありがと。楽しいデートが出来て良かったよ。それに、アユちゃんの力になれたみたいだからそれだけでも嬉しいや。いっぱい可愛い笑顔も見れたしね。」

「ホントに褒め上手なんだから……、悪い気はしないけどね。むしろ、可愛いってめんどむかって言ってくれて凄い嬉しい。恥ずかしいの？」

「恥ずかしいけど可愛いものは可愛いからそう言ってるだけ。変かな？」

「全然変じゃない！ 逆に凄だと思う。言われた方は凄い嬉しいし。」

彼女との会話は楽しくて、延々と話していたいぐらいだった。だが時計を見ると、すでに時刻は深夜1時過ぎ。そろそろ帰らなくてはいけない時間が近づいてきていた。

募る思い

「もうこんな時間なんだね。早いなあ、明日仕事なんだよね？大丈夫？遅くまでごめんね。帰ろう。」

「俺は全然大丈夫！こんな楽しいデートなんて久しぶりだし、出来る事なら帰りたくないよ。もっとアユちゃんと話したい。」

「私も久しぶりに楽しかったよ！凄くいい気分になってる。確かにまだ話したいけど明日仕事なんだから帰らなきゃね、仕事も大事だよ！」

「そういわれたら仕方ないね、それじゃ帰ろうか。」

「うん、そうしょ。でも眠くない？運転出来そう？」

「無理かも…、寝てしまうかもね。」

「ごめん…私のせいだ。どうしよう…。私が運転しよっか？」

「嘘、嘘。全然平気！眠くもなんともないよ。ごめん…、からかってみた。でもさ、もし眠くなったら俺の顔つねってね。そしたら覚めると思うからさ。」

彼女はちよつと怒ってるみたいだ…ふざけすぎてしまったかな……

「っ！イタタタタ！痛いってば。」

「目、覚めた？眠そうだからつねってみたよ。……意地悪なんだから。でも大丈夫そうだから許してあげるよ。」

「ふあい、すんませんでした。あと、…つねる時はもうちよつと優しくお願いします。マジ痛いよお。」

「なあに？眠いの？もう一回つねってあげよっか？」

「いえ、なんでもありません。一生懸命運転させていただきます。」

「わかればよろしい。じゃあ帰ろっか。ほいっ。」

そう言うと彼女は私に右手を差し出した。どうやら手を繋いでくれ
ということみたいだ。

こういう細かい行動は私の彼女に対する恋心を擲る。私は彼女の事
が段々と好きになってきていた。

「いいの？」

「そういう時は何も言わずに手繋ぐのっ！」

そう言いながら彼女は私の左手を取る。

「今日はありがとっ！さあ、帰ろう。」

いつもの反則的な笑顔が私のすぐ左側にある。私はそんな彼女にめろめろだった。

私は深夜の高速を飛ばし、まだ日が昇る前に地元に到着する事が出来た。

到着したという事は彼女との楽しかった時間の終焉を意味する。

「着いたね…。」

「運転お疲れ様。さすがに疲れたでしょ？仕事大丈夫かな？」

「隣にアユちゃんいたから全然平気！疲れてないよ。仕事も頑張れるよ。アユちゃんは平気？」

「私は休みだし大丈夫！無理してくれて本当にありがとうね。やっぱりあなたは本当に優しいね。楽しかったし、また近々どこかに行こうね。」

「うん！行こう！俺も今日は可愛いアユちゃんとデート出来て超楽しかったよ！また行こうね。」

「それじゃまたね。仕事、私も頑張るからあなたも頑張ってね！」

「ありがと。頑張るよ！気をつけて帰ってね。」

こうして私達の深夜デートは幕を閉じた。

ああいうのが私が前からしたかった普通の恋愛なのかな……。やっぱり、人を好きになるって楽しいや。

アユちゃんとお付き合ひしてみたいな。あの笑顔を独り占めしたい。そうなればきっと毎日楽しく過ごせる事だろう。

さてと、仕事まであと一時間か…。家に帰って着替えとシャワーぐらい浴びれるかな……。

今日はキツイかもしれないけど、それ以上に私は彼女とデート出来た事が嬉しかった。

さ、仕事に行くかな…

帰り道

彼女との深夜のデートから数ヶ月、あれから私達はいつものペースで電話やメールを続けていた。時間が合えばご飯を食べに行ったりして、お互いの仲はとても良い感じになっていた。そんな間柄だったので、私は彼女の事を日に日に好きになってきていた。

とある夜の事だ…。彼女から一通のメールが届いた。

【道に迷っちゃった…ここどこだろう…。】

私はそのメールを見て、急に心配になりはじめた。彼女になんかあったのだろうか？

【どうしたの？道に迷ったって…電話できる？】

【電話は無理。今電車乗ってるんだけど、なんだか違う電車乗ってしまったみたいで…。】

【次の駅の名前教えて。俺がそこまで迎えに行くよ】

【○○駅。わかる？とりあえず止まったら降りるね】

駅名はわかった。結構遠いな…でもなんでそんなところに？

彼女から電話がかかってきた。

「とりあえず降りた。わかる？ドジでごめんね。」

「わかるからもう大丈夫だよ。安心して。とりあえずそこから三つめの○○駅まで行こうか。そこなら駅も大きいし、コンビニとかどっかで時間つぶせるから、女性一人でも大丈夫だと思うんだよね。今そっち向かってもう走ってるから、40分くらい待っててね。」

「結構遠いところなんだね…、迷惑かけてホントにごめんね。コンビニあったから、そこで立ち読みして待ってるね。気をつけて来てね。」

「良かった。そこなら安全だと思う。出来る限り早く行くから少し辛抱しててね。それから、全然迷惑だなんて思っていないよ、じゃあまた後で。」

私はそう言って電話を切り、先を急いだ。時刻は12時を過ぎていた。

「おまたせ、そろそろ着くよ。大丈夫？」

「ありがとう！大丈夫だよ。少し疲れてるだけかな。外出て待ってるね。」

車は彼女のいるコンビニに着いた。

「ホントにごめんなさい…助かりました。夜遅くにごめんね。」

そう言って彼女は私の好きな銘柄のコーヒーを渡してきた。

「このおっちょこちょいめ、なんでこんなところにいたの？話しは車で聞かせてもらうから帰ろう！さあ乗って。」

彼女は申し訳なさそうに助手席に乗った。

「んで、どうしたの？言いたくなかったら言わなくてもいいけど。」

「実はさ、元カレと話し合いしてきた帰りなんだ。そしたら帰りに電車乗り間違えちゃったみたいで…。」

私は彼女に好意を寄せていた身だからその発言に動揺した。

「そ、そうなんだ。なんかあったの？今さら話し合いなんて…。」

「復縁したいからとりあえず会って話しがしたいって言われて、行くには行っただけだよっぱりもう彼とは無理って言ってきた。」

「ホントにそれで良かったの？未練ない？」

「うん！全然ないや。これで綺麗サッパリ出来た感じがするよ。」

彼女の強がりだろうか…そうは言うものの、うつすら目に涙を浮かべていた。

「いいじゃんいいじゃん！良かったじゃん。アユちゃんを泣かせるような奴は最初から無理だったんだよ。これからは新しい恋に走ればいいじゃん！アユちゃんぐらい可愛い娘ならすぐ新しい彼氏見つかるって！」

「そうかなあ…。いい人と巡り会えばいいけど。」

「大丈夫だって、俺が保障するよ！なんなら俺、立候補しちゃおうかなっ。」

「そうやって、また優しいんだから…。冗談でも嬉しいよ。」

私としては冗談なつもりではなかったのだが…。

「冗談じゃないかもよ？だって俺、アユちゃんの事好きだよ！」

「ありがとうね。あなたといると凄く優しい気持ちになれるよ。」

あら？なんだか本気と思われていないようだ…。ま、いっか。今はまだ彼女の気持ち自体不安定なんだから仕方ない。回復したらまた改めて気持ちを伝えよう。

「とりあえず今は嫌な事忘れて帰ったら寝ちゃいなよ！それが1番だよ。」

「そうだね。そして気持ち切替なきゃね。」

「そうそう、そのいきだよ！俺でよければいつでも相談のるし、気

分転換にどっか行ってもいいしさ。元気出して！」

「うん。またあなたに元気づけられちゃったね…。いつもありがとうね。」

私は無事に彼女を家まで送り届けた。

「本当にありがとう。このお礼は必ずするから。気をつけて帰ってね。おやすみなさい。」

別れ際に彼女はとびっきりの笑顔を見せてくれた。

「おやすみ。またねっ。」

私は自宅に向けて車を走らせた。

今度彼女と会う時に、いい感じになったら思いきって告白してみよ

う。私はそう決めて眠りについた……。

しかし、あんな事になるなんて今はまだ思ってもいなかったな……。

まさかの再来…

あれからなんらかわりのない普通の毎日が過ぎさり、いつものようにメールや電話をしていた。

だが一方的に私の彼女への想いは日に日に募っていった。

今までもそれとなく彼女に気持ち伝えてきたとは思っていたが、なかなかどうして冗談にしか受け止めてもらえない。

私はこの想いを真剣に彼女に打ち明けようと思っていた。

どうすれば彼女にこの想いを受け止めて貰えるのか悩んだあげく、私は正攻法で望もうとした。真剣に想いを言って断られるなら仕方ない事である。後はタイミングだ。どのタイミングでその想いを伝えるか……

そうこう悩んでいる毎日の中で私はこの日だと思って決心した日がある。彼女の誕生日におもいきって告白してみよう…。私は心の中でそう決めた。

そしてその日を私は迎えた。あらかじめメールをしてアポをとった。彼女の方も特別用事がある訳でもないよう。で昼間から夕方にかけては空いているらしい。夜は家族とパーティーとの事だ。

私は大きく深呼吸をして、この想いをどう伝えればいいのかと頭でシミュレーションしていた。

刻一刻と時間が迫るなか、彼女とのメールのやりとりをしていた矢先……………。

私の携帯に、とても懐かしく感じるメロディーが彼女とのメールの途中で鳴り響いた…。

そのメロディーは彼女からのメール着信音ではなく、私の心の奥底に封印していた懐かしき姫ちゃんからのメール着信音だった。

【お久しぶりです。今何してますか？お話しできませんかね？返事待ってます】

私に少なからず動揺が走る……………。

私の心と頭は、例えるならば走馬灯のように姫との今までの思い出が蘇ってフラッシュバックしてきていた。私はとりあえず、アユち

ちゃんの方にちょっと待っててというメールを送り、姫とのケリをつけようと思った。

【お久しぶりですね。元気ですか？今、電話できますか？】

姫ちゃんの返信は…。

【あなたの家の外にいます。出来れば直接話したいです。ダメかな？】

！？なんだって…。私は慌てて玄関を飛び出した。その先には久しぶりに見る姫ちゃんが立っていた。

「そんなとこいないでこっちきな。」

私は何故だかわからないが姫を家にあげた。

「久しぶりだね…。あれからもう一年半以上経ったかな…。あなたは元気してる？ 私はボチボチだよ。」

私は姫ちゃんの突然の登場で頭が少し混乱していた。

「もうあれからそんな経ったんだね…。俺もボチボチ元気だよ。んでき、話して何かな？」

「こんなに離れてたけど、私はまだあなたの事が好きなの…。あなたの事、忘れたくとも忘れられない…。散々私はワガママ言ってる、あなたの事を困らせてのも十分わかってるし申し訳ないと思ってる。あの時だって私がワガママさえ言わなければこんな状態にならなかったもの…。本当にごめんなさい。私ともう一回お付き合いしてもらえないかな？」

私は正直驚いていた。姫がまだ俺の事を好き？ 私はずっと忘れられた存在になっていたものだと思っていたのに…。

「俺さ、前みたいに姫に好きな物とか買ってあげられないかもよ？ お金とか独り身になって自由に使っちゃってるし……、ハッキリ言

「ってお金ないんだよね。お金ない俺なんて嫌でしょ？」

私はありのままを伝えた。こう言えば姫は諦めるのではないかと思
ったのだ。

だが私の考えとは裏腹に姫ちゃんの答えは私の想像と違うものが返
ってくる。

「全部私のせいだね。お金ないなら今まであなたに買って貰ったブ
ランド物とか質屋に売ってでも私がお金つくってくるから…、お財
布もバッグもアクセサリーも…：なにもかも私いないから…：あなた
と一緒にいられれば、もう他にはなにもいらない！だから、全部売
ってお金にしてくるからそのお金であなたの不足分の足しにして。」

姬ちゃんは号泣しながら私にそう想いを伝えてきた。彼女は私の事
がまだ好きで、やり直すためならば私の今までにプレゼントしてき
たヴィトンやらグッチやらの財布やバッグを本気で質屋に入れるつ
もりだ…。

私は彼女のその私への想いに心を討たれてしまった。私も、ハツキ
リ言って姫の事が嫌いでは別れてたつもりではない。好きだったけど
仕方なく別れたつもりだった。

「売りになんて行かなくていいよ……。それに売りに行ったらって使

用済だし買ってからもう数年経ってるから大幅に安く引き取られちゃうよ。そんな事になるなら俺は姬ちゃんにこれからもそのプレゼントとした物を使って欲しいよ。そうしてくれたほうが俺は嬉しいかな。」

「でも…、お金ないんでしょ？それなら少しでもいいからあなたの為にとまって……………」

「いいんだって。だってさ、お金なくたって姬ちゃんはいいでしょ？俺と一緒にいられればそれでいいんだよね？ならわざわざ売りに行く事なんかないよ！」

そう私が言っても彼女の涙は依然として止まらない。滝のように流れている。

「本当にあなたが好き…、好きなんだよ…。だから、私の事を捨てないで……。私、心入れ替えるからあなたに側にいて欲しいの…、今さら気づくなんて遅いかもしれないけども、お願いします…。また私と付き合ってください…。お願いします。」

私は悩んだ……………。

選択ミスなのか…

確かに今までは姫ちゃんの事も勿論好きだった。だが今は気になる人が現れたのも事実だ。

アユちゃんは勿論結婚もしないし、姫ちゃんには失礼かもしれないが、若くて、しかも誰もが認める可愛さを兼ね備えている。だけれども姫ちゃんとの過去の思い出は、私にとっては何事にもかえがたいものなのも事実だった。

どっちをとるか…。ひとつは何も不可がかってない至って普通の人。もうひとつは子持ちで旦那がいる非常に不可がかかっている人……………。

私は……………。

間違っているかもしれないが、泣きながら懇願してきた姫を選んだ……………。

多分この選択は間違っているに違いない。彼女を選ぶ事によってのメリットはほぼ無いに等しい。むしろ、選ぶだけ私はこの先もどん底に落ちる可能性の方が上回っているだろう…。そうと頭ではわかっているのに私は姫ちゃんを選ぶ事にした。

アユちゃんにきちんと真剣に告白して、フラれてから姫ちゃんと付き合うという選択肢を選ぶという手段もあったのだが、当時の私にはそれが出来なかったし、その時は考えもつかなかったのである。

もしそうして、アユちゃんにお付き合いのオッケーを貰っていたのなら私の人生はその後、今とは格段に違っていたのではないかと思われる。

だが私は姫ちゃんを選んでしまった。この先もきつと苦勞するにちがいない。その事もわかったうえで私は彼女を選んだ。

「わかった。やり直そう…、いざこうやって逢ってみたら…、俺も姫ちゃんの事が忘れたくても忘れられないや。俺もまだ好きって感情が残ってるよ。」

「ホントに私なんかでいいの？もしかして他に気になる人でもいるんじゃない？」

改めて女性の感って凄いと思った。

「いや、もういいんだよ。俺の隣にはこれから先姫ちゃんがいてくれるんだから。俺は姫ちゃんが好きなんだよ。これからも厳しい事とか待ち受けてるかもしれないけど二人で力合わせてどんな試練も乗り越っていいこうね！改めて、よろしくね姫ちゃん。」

「嬉しいよ…。ありがとう。これからも二人で頑張ろうね！私はあなたが大好きです。もう絶対離れないからね。」

私は彼女のその言葉を信じ、受け止め、真に受けた。

後はアユちゃんの事だ…。私はメールをした。

【ごめん、急用が出来てしまって今日一緒に祝い出来なくなっちゃった…。本当にごめんね。】

【そっかぁ…。でも私なら大丈夫だよ！また今度誘ってね。誕生日覚えててくれただけでも凄く嬉しかったよ！またね。】

私は酷い男だ…。アユちゃんはああ言ってくれてるが、本音は寂しいにちがいないだろう……。私はメールをした後、本当に申し訳ない事をしてしまったと感じていた。それに…、アユちゃんとは現時点ではもう付き合う事すらなくなった。私には姫がいる……。それが現実だ。

私は後ろめたしい気持ちと、また姫ちゃんとお付き合いできる気持ちで訳がわからなくなった。

自分のとった選択は間違いなのか？それも今となっては……。……。

姫と再び付き合う事になったのだから、今日からまた彼女の事を今まで以上に好きにならなくては…。好きになってみせる！

そしていつか必ず幸せを勝ち取るんだ！これからはそれぐらいの気持ちで姫ちゃんの事を好きにならなきゃアユちゃんに申し訳ない。私はそう決意し、姫ちゃんとの新たな境地を目指すのだった。

漫画

結局私と姫は一年半過ぎ以上の時をへて再び元サヤに納まった。

私は彼女を選んだ事によって、自分なりに色々と言々な覚悟を決めた。私の選んだ道は決して平坦なものではない。これから酷く険しい道を歩いていかなければならない。自分で決めた事なのだから私はその酷く荒れ果てた道を進んで行く事となった。この先、はたして私に光は差し込むのであろうか？

彼女と二度めの復縁をして最初のデート。私達はお互いにギクシャクしていた。行き先は勿論…、彼女の大好きなラブホだ。

「なんかさ、結構長い間空いてたから緊張するね。大丈夫？」

「そうだね。私も緊張してるよ…。なんかソワソワしちゃうね。」

久しぶりに出向いた場所は私と彼女が初めて行った思い出のラブホだ。彼女の意味でそこに行く事になった。私達にとっては本当に忘

れられない場所となっていた。

「懐かしいね…、当時はよくここに来てたもんね。あの部屋空いてるかな？」

「だね。我が家が空いてるといいなあ…。」

説明すると、このラブホの707号室が私達のゆかり場所で、毎回この部屋がお気に入りでした。

何故かという理由は意外なところからきている。当時、彼女にはハマっていた漫画があった。多分わかる人もいると思うが、その漫画というのはNANAである。その漫画の主人公のナナとその友達のハチが一緒に住む事になったのが707号室なのだ。

大体どこのラブホも7階なんて高さはない。だがそのラブホはその高さがあるのだ。わざわざ彼女はそこまで検索してこのラブホを選んだのである。ちなみに私の現在の愛車のbBのナンバーも恥ずかしながら707である…。それぐらいお互い私達はNANAにハマっていたのである。

ラブホに着くと、私達の復縁を祝福し、待ち望んでいたかのように707号室だけが運良く空いていた。奇跡的だと私は思った…。

「お！我が家だけ空いてるじゃん！ラッキーだね。」

「ヤッター！嬉しいね。早く行こっ！」

私達は足早に我が家に向かいエレベーターに乗った。

「ただいま。久しぶりに帰って来たけど、やっぱりここはサイコーだ！」

彼女はこの部屋に入る時に、必ずと言っていい程、ただいまと言う。本当にある意味で我が家だと思っているらしい。

「やっぱり我が家は広いね。この広々とした空間が最高だね。」

この我が家、何をかくそうこのラブホの最上階の部屋で、とにかくだだっ広いのである。ゆうに40畳ぐらいはあるであろう広々とした空間が我が家の売りである。そのくせこんなに広いのに料金もそれ程高くないリーズナブルなのだ。

私達は久しぶりに我が家に帰って来てくつろいだ。

「なんかここに来ると落ち着くよね。あの頃に戻ったみたいになれる。」

「確かにそうかも。俺もそんな感じだよ。」

私達は久しぶりの我が家で、マッタリとした時間を過ごした。

お酒も程よくまわってきていた。

「なんでさ、私とやり直そうって思ってくれたの？」

「理由はとくにないかな……。しいて言うならもう一度一緒にいたい
と思ったから……。じゃダメ？」

「全然ダメじゃないよ。私も離れてみて本当にあなたの大切に気づ
いたし、私もこの先やっぱり一緒にいたいと思ったの。」

「俺もだよ……。姫の事わかってあげられるのは俺しかないもん。
だから俺じゃなきゃ姫の事幸せに出来ないのと思ったから復縁しよ
うって思った。俺ってかなりいい奴じゃね？」

「そんな事言われなくてもわかってるよ！あなた以外なんて、もう
私はないよ。いい奴っていうか、私にとっては多分生涯最高
なパートナーなんだと思ってます。」

「いくらなんでもそれはいいすぎだよ。別に俺じゃなくても上手く
行くかもしれないね？同じようなタイプも探せばいるかもよ？」

「いや、あなたじゃなきゃ私はダメ。あなたを知ってしまった後で、

あなた以外で私の相手が務まるとは到底思えないよ。」

「そうかなあ……。でもその気持ちは有り難く頂戴しておくね。少なくとも俺もそう思ってる部分あるしね。なにより好きだし。」

「私も好きだよ。あなたが好き。これからはあなたに気に入ってもらえるように努力するからね！今よりもっと好きになってもらおうんだから！」

「わかった。でも今でも十分好きだよ……………」

そう私は言って、彼女の唇にキスをし舌を絡ませて久々に彼女を存分に堪能する事にした……………。

罪と罰

私と彼女が二度目の復縁をしてからは少しの間は順調そのもので、あれから二年間はお互いに幸せな時間を過ごしていた。

そして、二十歳から付き合いだして：色々あったが別れてる時期を省き彼女と付き合って八年が経過した。

お互いに歳を重ね：気づけば私の歳はすでに31歳になっていた。彼女においては36歳だ。ここまで長く彼女とのお付き合いが続いてはいるが、相変わらず私達は結婚もするわけでもなく、もちろん彼女の方も離婚すらしていない。そしてそれはこれからも変わらない。

この時の私は、どんな状況だろうと彼女の事を生涯愛していくと決めていたから例え結婚できなくともこれといって残念がりもしていなかった。じつと彼女を影から支え続けていく事が今の私の使命なんだと思ひながら日々生活していた：。

だけど私達の関係は不倫：、世間体からみたら許されない事を八年もの間続けている。いつかばれる日がくるものだと思い、びくついている日も多かった。本当のところはどうかかわからないが、幸か不

幸か彼女の旦那と二人の子供には未だにばれていないみたいだ。彼女が家庭ではそれを隠しながら上手い事しているからであろう。そこは素直に凄いと思う。よくもまあ八年間もばれずにここまでこれたものである……………。

だけれども…彼女にしてみれば旦那と子供を騙し続けて来た八年間である。私だって旦那と子供に対しては罪悪感で申し訳ないと思っただけ事も正直あった。

神様というものは本当にいるのだろうか？そんな不純な事をし続けていた私達にとうとう天罰が下った…。

それは、5月ぐらいの出来事だった……………。

その日はいつもみたいに私の家でまったりとした感じでいた。そんな時、彼女が心配そうに私に話しかけてきた。

「あのね、多分違うと思うんだけど…。」

「うん？どうしたの？」

「私ね、生理が全然こないの……。ちゃんと避妊してるし、ただ遅れてるだけだと思うんだけどさ、今回は来なくなってもうすぐで二ヶ月だし、少し心配になってきた。」

「マジで！？そんなに来てなかったの？」

「そうなんだよね…。でも中で出してないもんね？ちゃんと気をつけてたよね。だから、大丈夫だって信じたいんだけど…。」

「とりあえず今薬局行って妊娠検査薬買って来るからちょっと待ってて。それで違えば安心でしょ？」

「だね。待ってるよ。」

私は平静を装っていたが、内心は心臓が爆発しそうなくらい動揺していた。でもちゃんと避妊してたんだから大丈夫なはずだ。私は自

分にそう言い聞かせ薬局に急いだ。

数分後、私はタイプの違う妊娠検査薬を二つ買って、急いで帰ってきた。

「買ってきたよ。どっちがいい？両方試してみよっか？どちらとも平気なら問題ないもんね！」

「うん。じゃあやってくるね。」

彼女も心配なのだろう。声が若干震えていた。

「終わったよ。後は結果待ちだね……。大丈夫…だよね？」

「当たり前だろ。大丈夫に決まってるよ！心配ないって！」

私は精一杯の励ましの言葉を彼女にかけた。

「私が最初に一人で見てもいいかな？」

「したいようにしていいよ。絶対大丈夫だもん！」

私達は緊張しながら結果が出るまでの時間を待った。僅か数分間が非常に長く感じる。

そしてその運命の時間はやってきた……………。

「見てくるね……………」

「う、うん……。」

彼女は妊娠検査薬の結果を見に行った。

その結果は.....。

妊娠検査薬

その結果…。

彼女が心配そうな顔で私のところに検査薬を持ってきた。

「どうなの？あんまりいい顔してないって事は……」

「とりあえず見て…。どう思う？」

私は検査薬自体を見るのも初めてだったから見方がイマイチよくわからなかった。

「どうなつてるとダメなの？この真ん中の線みたいなのが色ついてると妊娠の可能性ありって事でいいのかな？」

「うん…。」

私は二つの検査薬をよく調べた。

「あれ……。これは反応が出てるね……。でもこっちは、なんか曖昧だなあ。出てるようにも見えるし出てないようにも見える」

「そうなんだよね。片方は完全に反応が出てるんだけどさ、こっちは微妙なんだよね……。」

「でもさ片方でも反応出てるって事は……。妊娠の可能性あるってことだよな？ 病院行った方が……。」

「やっぱそうだよな……。予約して検査してもらおうね……。でも、もし妊娠してたらどうしよう……」

私はハッキリと自分の気持ちを言った。

「俺はもしそうなら、もちろん産んで欲しいけど……。姬ちゃんからしてみればそういう訳にはいかないよね。だから、俺は子供おろすんだったらそれでいいと思うし、費用は全部俺が責任もって払うよ。」

ついて行っていていいなら俺も当日は一緒に行くよ。覚悟は出来てる。産むのだったら何もかも捨てて姫を守る。殺されるかもしれないけど、旦那ともちゃんとけりをつけなきゃとも思ってるよ。だからさ、今回の件も姫のしたいようにしていいよ。」

「まだ妊娠してるかはちゃんと検査しないとわからないけど…、あなたのその覚悟は嬉しいよ。正直なところ言うと、もし妊娠してたらどうしていいか今の私はわからない……。」

「どんな事があっても二人で頑張って解決していくって決めたんだから、うちらならきつと良い解決策がみるかるよ！どんな事になってもずっと俺が側にいる！それは絶対に変わらないからね。」

「ありがとう。私達ならきつと大丈夫だね。」

数日後…。彼女が産婦人科に行く日がやってきた。生憎その日は私は仕事で休みではなかった。心配で、とにかく仕事がつかなかった。

仕事を終えて、彼女に連絡をとった。

「どうだった？」

「なんかまだ正確にはわからないみたい…。こんな事初めてだよ。血液検査の結果待ちだったさ。でもね、先生が言ってたんだけど多分妊娠はしてないんじゃないかってさ。」

「へ！？そうなの？じゃあなんで検査薬に反応が出たのかね……。まあ妊娠してないならそれに越した事ないけどね。」

「私にも詳しくはわからないけど妊娠してなかったら嬉しいね。」

その時の私達は心配よりも妊娠してないって期待が上回っていた。正直お互いに安心していた。

けど……、事態はもっと深刻な状況にあったんだ。彼女があんな

事になるなんて考えもしてなかった。

神様が与えた天罰は……私と彼女を、特に彼女の方を地獄に落とす結果になっていたんだ。

そして私達は検査結果が出た日に、驚愕の事実を突き付けられた……

難病

その結果は彼女にとってあまりにも酷なものだった。

「なんかね…、大学病院の紹介状もらっちゃったよ。詳しい検査を受けろだってさ。」

「????。どういう事? 妊娠はしてないんでしょ? 意味がわからないんだけど。なんで大学病院に行かなきゃならないの?」

彼女は意味深な表情で私にこう告げた。

「あのね、妊娠はしてないってさ。でもね、もしかしたらだけど……。」

「もしかしたら何?」

彼女は瞳いっぱい涙を溜めて言った…。

「私……………、子宮ガンかもしれないの……………」

私はその言葉でどん底に陥った。

「へ！？嘘でしょ？なんでそんな話しになっちゃうの？」

「なんかね、子宮ガンでもまれに妊娠検査薬が反応するんだってさ。だから大学病院で検査ってわけ。まだそうと決まった訳じゃないけど…、八割片子宮ガンの可能性大なんだって。」

「そうなんだ……………。違うといいんだけどね。」

私にはその言葉ぐらいしか彼女にかけてあげられなかった。

「まあ次の検査で白黒つくから……。私も違うつて祈ってるよ。」

だけでも…、どうしてそうなってしまったのだろうか？原因はわからない…。

検査当日、もちろん私は付き添う事は出来ず、彼女の旦那が付き添いで行っていたらしい。

私はひたすら彼女がガンではないことを祈っていた。だがそんな祈りも虚しく…

彼女から電話がきた。

「子宮ガンだったよ………………。これから私どうなるのかな………………。とりあえず早期発見みたいだから転移してなければ大丈夫だってさ…………。当たり前だけど、とうとう天罰下っちゃったね…………。」

「そんな天罰だなんて…………、なんで俺じゃなくて姫ちゃんに…………。俺に天罰が下れば良かったのになんで姫に…………。」

「仕方ないね。こうなってしまったのは、きっと私が家族を裏切って生活しているからだよ………。だから神様が私に罰を与えたんだよ。そう思うしかない……」

「そんな事って……。もしそうだとしても、あまりにもこの仕打ちは酷すぎるよ」

「もうなってしまったんだからしょうがないね。せめて後は治ることを祈らないとき。」

私は率直に思ってることを彼女に言った。

「死なないよね……。もし姫が死んでしまったら、この先俺が生きてく意味なんて何もないよ。」

「それはまだわからないけど……、早期発見だし今の医療技術なら大丈夫だよ。私は死なないって！」

「そうだよね！ 姫ちゃんが死ぬはずないよね！ ごめんね、馬鹿げた事言っちゃってさ。どうも心配になっちゃってね…。」

私の中のガンのイメージはガンになってしまったら、イコール死を意味する病気だと今まで思っていたが、どうやら最近の医療技術は凄まじい速度で進歩していてガンも早期発見なら治る確率が高いらしいのだ。

「とりあえず手術してガンを取り除くんだって。手術前までに色々とすることあるみたいで一週間前から入院生活になっちゃみたい。嫌だなあ……。検査もスツゴく痛くて血が今も出てるんだよ。もう最悪だったよ。」

彼女の話しによる検査内容は想像しただけでも痛そうな内容だった。その一つとして最も痛そうだったのが麻酔無しで膣の一部を切り取るというものだった。そりゃあ血もいっぱい出るであろう。姫が可哀相でたまらなかった。

「とりあえず今日はこれで切るね。横になって寝ちゃいたいんだ。また詳しく決まったら連絡するね。」

「うん。疲れただろうから寝た方がいいね。連絡待ってるよ、またね。」

とにもかくにも大問題が起きてしまった。

これから私達はどうなってしまうのだろうか…本当に手術すれば姫ちゃんは助かるのだろうか…

私は様々な疑念を抱えて眠りについた。

手術 1

私は彼女が入院するに能って、せめて自分が出来る範囲内の事をし
てあげようと思った。

「姫ちゃんさ、何か俺に出来ることないかな？何でもいいから言っ
て。」

「うーん。特には…、あ！そうだ！入院してる時に着るパジャマが
欲しいな。」

「そんなことでいいの？それならおやすい御用だよ！じゃあ一緒に
買いに行こうか！」

私と彼女が入院前に逢える最後の日、私達はパジャマを買いに出掛
けた。こんな当たり前で何気ない買い物とか、しばらく出来なく
なると思うと非常に虚しく感じてしまう。

「今日は何でも好きな物食べていいよ！いくらかかっても構わない。
とにかく今1番食べたいのを食べようね！」

私は精一杯明るく振る舞った。もしかしたらこれが彼女との最後のデートになるかもしれないから……。そうな風に思いたくないが頭のどっかではその事がちらついて離れなかった。

「あゝっ。美味しかった！ありがとね。今日はいっぱい美味しいの食べれたよ。それにカワイイパジャマも見つかったし楽しい一日になったよ。」

「それは良かった。姫さ……。病気が治ったら……。また来ような……。……。」

「そうだね。また食べたいなあ……。……。」

「手術さ、頑張ってね。成功するように祈ってるからさ！そしてまたデートしような。」

「大丈夫！約束する。また必ずデートするもん。病気になんか負けないって！」

こうして彼女とのデートは終わった。明後日からいよいよ入院生活が始まる。

そしてついに手術日を迎えてしまった。

こんなお願いをするのは間違ってるかもしれないが……、私は心から願った。

《神様…、もし本当にあなたが姫に天罰を与えたのならば、もう十分だと思います。彼女の変わりに私が罰を受けますから、どうか彼女を救ってあげて下さい。お願いします………》

私は今まで生きてきた人生の中で、こんなにも心底お願いした事はなかった。彼女の手術が成功するか否かはそれこそ神のみぞ知るところだ。

私はひたすら祈り続けた。

そして次の日、彼女から電話がかかってきた……。

手術2

電話の内容はこうだった。

「手術はおかげさまで無事に終わったよ。」

「とりあえず良かった…。凄く心配で心配で…。もう大丈夫なの？」

「まだ今度の検査次第みたいなんだけど、一応手術は成功だって言ってた。」

「そうなんだあ、でも成功したんだからいい結果が出るといいね。よく頑張ったね姫。エライ！」

「とにかく今は体中痛くてしょうがないよ。麻酔が切れてから物凄く痛さでさ…。点滴で痛み止め入れてるんだけど中々効果がでないみたいで…。ご飯ももちろん食べれないからお腹も減ってるよ。そのせいか寝たいんだけど眠れもしないしもう最低だよ。」

「そうなんだ、痛い痛いのかあ…。だから電話越しにたまにハアハア聞こえてたのか。相当辛そうだね……………」

彼女が凄く痛くて苦しいのに、私はしたくとも何も出来ない…これ程自分自身の立場を悔しく思った事はない。

今まで生きてきた人生の中で、自分にとって1番大切な愛する人が病気で苦しみもがいているのに、隣に居てあげる事すら出来ないのが馬鹿みたいで仕方ない。私は自分を呪った……。

「でもね、私今痛くて苦しいけどあなたの声聞いていると気のせいかもしれないけど少し痛みが弱くなってきた気がするの。」

その言葉を聞いて、私は思わず泣き出してしまった。

「ごめんね…グス…俺…俺…姫が…そういう状況なのに…グス…隣に…居てあげる…ことが…できないなんて…情けないや…。」

「泣かないのっ！それはしょうがない事でしょ。あなたのせいじゃない。私だって許されるならあなたに隣に居てもらいたいよ。そうすればどんなに安らげるか……。」

確かに、隣にいる事が出来ないのは、どちらのせいでもない。私達の関係はそうせざるを得ないのだ。私が行って関係がばれてしまつたら余計大変な事態になりかねない。今は耐えるしかないのだ。だけれども…、わかつているからこそ余計私は辛かった。

「逢いたいね……。ダメだってわかつてるけど姫に逢いたいよ。」

「私だって逢いたいよ。早く逢いたい…。」

「ごめん、泣いたりしちゃったし無理な事も言ってしまったね。俺は情けない男だよ。」

「そういうことは言っちゃダメ。わかった？…もう二度とそんな風に言わないで。私の好きな人なんだからさ。」

「わかった。もう言わないよ。ごめん。」

「とりあえず私は大丈夫だからさっ。心配してくれるのは有り難いけどそんなに心配しないでいいよっ。私は本当に大丈夫！」

「了解！そうだね、あの姫ちゃんだもんね。」

「あの姫ちゃん？まあよくわからないけどその姫ちゃんですから。また電話するよ。久しぶりに声聞けて安心感貰えたよ。今日はよく眠れそうだ。ありがとうね。それじゃまた。」

「なんかあったら、なくてもいいから電話もメールもしていいからね。ゆっくり休んでね。おやすみ。」

「うん。おやすみ。」

とにかくわかった事は手術は上手くいって、後はまた検査してその結果待ち。

それにわりかし姫も元気だということ。

検査の結果は一週間後だ。その検査結果が良ければ姫は帰ってこれる。早く結果でないかなあ。私はその日が待ち遠しかった。案外ガンも治療が早ければなんとかなるもんなんだなあ。私はそんな気持ちでいた。

神様が姫を助けてくれたのかな…、もしそうだとしたら祈ったかいがあるもんだ。神様ありがとうございます。私は素直に感謝していた。

けれど…検査結果が出る日。私は神様を殺せるなら殺してやりたいと思うんだ。だって…結果…彼女は…。

手術3

手術一週間後、検査の日だ。この日の結果次第で彼女は自分の家に帰れる。

私は例の如く付き添いは出来ないので彼女からの連絡待ちだ。早く結果報告の連絡が待ち遠しかった。そして早く彼女に逢いたい。直接面とむかって、お帰りなさいって言って抱きしめようと思っていた。

その時は何事もなく彼女は帰ってくるものだと思っていた。

しかし、検査結果は私達が思っていたのとは違う答えが返ってくる…………。

あまりにも酷い内容で本当に神様を殺したかった。

「もしもし…、私だけど。結果出たよ。」

「どうだった？ やっぱ大丈夫だから退院出来るのかな？ 早く逢いたいよ〜。」

完全に私は浅はかだった。電話越しの彼女の声も明るかったから、もう大丈夫なんだと勝手に思ってた。舞い上がっていた。けど…

「あのね、退院できなくなっちゃった。」

「へ！？なんで？大丈夫なんじゃないの？だって手術は成功したんじゃない……。」「

「ダメだったみたいね……。どうやらこの前の手術で取り除いた腫瘍以外に他にも出てきてしまったみたい」

「なんだよそれ…。なんでこの前の時にその腫瘍はとれなかったんだろう。難しい事はよくわからないけど、そんなのってあんまりだよ……。」「

「それでね…。もう一回手術する事になったんだけど……。私ね……。もう女じゃなくなっちゃうの。そんなの嫌だよ……。」「

電話越しに彼女が泣いているのがわかった。女じゃなくなる？どう

いう事だろう……。

「姫ちゃん？大丈夫？どういう事なの？女じゃなくなるって？姫ちゃん生まれた時から女性でしょ？」

泣きながら彼女はこう答えてきた。

「子宮全摘出する事になったの……。だからもう子供産めなくなっちゃうの。あなたの子供…、欲しくなっても産みたくても本当にもう産めないの…。」

子宮全摘出！？なんでそんな事になって……。彼女が何をしたいっていうのだ…何もそこまで罰を与えなくてもいいのではないだろうか。これではあまりにも彼女が可哀相だ。

「他にもう選択肢はないの？どうしてもとらなきゃダメなのかな。もしかして他の方法は危険って事？」

「うん…。子宮をとらない方法もあるにはあるんだけど……………」

「姫はどうしたいの？とらないですむならとらない方がいいんじゃない？」

「そんな簡単に言わないで！！もちろん私だつてとりたくないよ！けど、とらないと仕方ないからしょうがなくとるんだよ……………」

「ごめん…………。軽率な事言つて本当にごめんね。」

「私の方こそ怒鳴つてしまつてごめんね…。あのね、先生に二択を選べつて言われたの。ひとつは子宮をとらなくていいかわりに、この先ずっと抗がん剤治療を続けていく事。でもそれにはリスクがあつて髪の毛も抜けちゃうし、顔とか足とかの浮腫もハンパないくらいなるし、なにより進行速度を遅らせるだけだから転移したら死んでしまう可能性もあるんだつて。そしてもうひとつは子宮を全摘出するかわりにガンを全て取り除く事。こっちは子宮を失うけどその後の結果次第では抗がん剤も使用しなくて済むし、なにより命を失う危険が極端に少ないんだつて。もちろん手術が成功すればの話しだけだね。」

「そうなんだ…。究極の選択だったんだね…。それなのにさっきは

本当にごめんね。本当に軽率だった。」

「知らなかったんだから仕方ないよ。私も最初にその事伝えてないし。でね、私は死にたくもないし周りの人達にもツライ思いさせながら生活するのも嫌だから仕方なく全摘出を選んだの……。それがベターになってさ。子供はもう一生産めなくなるけど命が助かるならね……。私の両親もその方がいいんじゃないかって言ってきたし。」

彼女はとても辛かったと思う。だがどちらかを選べと言われたら、きつと私が同じ立場でもその選択を選んだにちがいない。

人生ってなんなんだろう……。

私は何故だかそんな風に思ってしまった……

手術4

こうして検査結果が私にも伝えられ、私も彼女が選択した決断を支えていこうと思った。

一度めの手術から一週間後、彼女から電話がきた。

「元気してる？ 今度の手術の日が決まったから連絡したの。」

「元気してるよ。姫に負けないくらい元気だよ。俺が思ってたより元気そうだね！ 声が明るくてハリがあるもんね。とりあえず良かった。少し安心したよ。」

「あなたのおかげだよ。毎日毎日励ましのメールをくれて本当にありがとう。どんなに勇気づけられたか。あなたが居てくれるから私は手術を受ける決心がついたもん。私、頑張るからね！」

私は彼女が言うように、あれから毎日メールを送り続けて彼女を励ました。今の私に出来ることといったらそれぐらいしかない。でも

やらないよりはやったほうがいいはずだ。ほんの少しでもいいから彼女の力になりたかった。

「次の手術まで時間が以外とあるんだね。暇になっちゃうでしょ？」

「まあね。でもポータブルDVD持ってきてもらったからこれで暇潰しかな。後は他の患者さんとも仲良くなれたからみんなでお喋りしてるよ。」

「へえ、友達出来たんだね。それは良かった。それなら少しは淋しき紛らせられそうだね。」

ところがそうでもないらしい……。もちろん一人でいるよりはいいのだろうが、病棟がガンの病棟だからまわりはその入院患者ばかりなのだ。

「うん……。でもね楽しい事だけじゃないんだ……。私は二人の友人が出来ただけどさ、その二人が結構病状が酷いんだよね。一人は私より年上で髪の毛が全部薬の副作用でなくて帽子を被ってる人。もう一人は私と同一年で頭包帯ぐるぐる巻きで同じく薬の副作用で髪

の毛が殆ど無くなってしまっていてニット帽を被ってる人。それにその人は腕や脚がスッゴいむくんでしまつてパンパンになって二倍くらいになってしまつてるんだよね。」

「そうなんだあ…。それはキツイね。」

彼女は相当ショックを覚えたにちがいないだろう。同じ病棟を散歩しているだけで彼女の目に飛び込んでくるのは今までとは掛け離れた別の世界だ。

「でも明るくなったよね？ 普通はショックで逆になりそうな気がするんだけど」

でもそれにはちゃんとした理由があった。

「そうだね。第一に私にはあなたが毎日メールで励ましてくれてたからつてのもあるけど、その友人の二人のおかげもあるんだよね。私より年上の人はね、病状が判明した時にはすでに遅くて末期がんで診断されたんだつて。それで手術もダメもとで何回かはしたらしいんだけどやっぱりダメみたいで結局は抗がん剤の治療なつたんだつてさ。医者がいうには限りなく治る可能性は無いに等しいんだつ

て……。そしてね、それを知ったその人の旦那さんが急に離婚してくれって言うてきたらしくて……。私、その話し聞いて、なんて言うていいかわからなかった……。でも本人は笑い話として話してくるんだよね。そんな状態で旦那さんまで失って……。それなのにその人は希望を捨てずに前向きに毎日を生きてる。もうひとりの同い年の人はやっぱり早期発見じゃないみたいで抗がん剤治療を今試してるんだけど思いのほか副作用が酷くて苦しんでるんだよね。そりゃ毎日むくみっぱなしで鏡で自分の姿を見るのも当時は嫌だったらしいよ。その人は結婚はしてないんだけど同棲してた彼氏さんはいたらしいんだけどこれまた最初だけは毎日のようにお見舞いに来てたのに段々と薬の副作用で髪の毛やらむくみなどのせいで前とは違う自分になってしまったらしいの……。そしたらその彼氏さんはお見舞いにくる回数も減り、ついには疲れたから別れてくれて言うてきたんだってさ。その人もそんな辛い思いをしたのに今ではとっても明るくて私達のムードメーカーみたいな存在なの。二人とも共通していえるのは病気のせいで今まで一番信じてきた人に裏切られ捨てられたということ。しかもおそらくは二人とも助からない可能性の方が強い……。それなのに二人ととっても明るくて前向きなの。そんな二人に比べたら私はラッキーかもって思ったんだよね。私の場合は早期発見だったから次の手術が上手くいけば抗がん剤を飲むこともなく打つこともしなくてすむ。それになにより私にはあなたが居てくれる。だからさ、私なんかよくよしてちゃ二人に申し訳ないって思った。だから私は今まで以上に明るく前向きに生きていこうって決めたんだよね。でも……。もしあなたも辛いなら別に無理しなくていいんだからね」

なるほど……。そんなことが彼女の周りで起きていたなんて。メールではその二人については一切ふれていなかった。でもその二人の友人のおかげで彼女は色々な事を感じ考え、前向きに明るくなったの

だ。そんな彼女の事をこれからもずっと支えていこうと私は思った。

「全然無理なんてしてないよ。それに俺は何処にもいかない。信じて欲しい。」

「わかっていたけどやっぱりそう言ってもらえると嬉しいや。私はあなたがいてくれたからこそまで元気よくなれた。それにあなたのおかげで勇気や希望をもたせてもらった。本当にありがとうね。私、絶対ガンなんかに負けないからね！」

「うん！その意気だよ。それからさ……姫ちゃん、こちらはこれからもずっと一緒だからね！姫の傍には俺がいるからね。次の手術頑張ってるね。」

「私頑張る。それに私もずっとあなたと一緒にいたいよ。また連絡するね。あと、スタバでコーヒーでも飲みながら毎日楽しみにメーイル待ってるからね。」

「スタバ！？病院にスタバなんてあるの？」

「うん。病棟の一階にスタバがあるんだ。晴れてる日で身体の調子がいいときなんかはコーヒー買って三人でテラスに言ってお茶してるんだよね。」

最近の病院はスタバまで入ってるのか……、凄いな。

「手術まであと五日かぁ。それまで有意義に過ごすとするかな。また連絡するね。電話で喋れそうな時は電話しようね。それでは。」

「了解！ また明日ね。」

私はそれから毎日メールをし、電話もした。
五日後に再手術。

そして運命の手術の日が訪れるのであった……………。

手術終了

そして手術当日。当然ながら私は自宅待機。ひたすら手術が成功するように祈りを捧げるのみ。

私はこの日がくるまえにひとりで神社に行き、お参りをして彼女のためにお守りを購入してきた。そのお守りを渡す事は出来ないけど渡せる日が来たら渡そうと思っている。だからそれまでは私がそのお守りを大事に握りしめ彼女の手術が成功するように祈ろうと思っていた。

そろそろ手術の時間だ……。はたして手術は成功するのだろうか……。：、成功してもらわなければ困るのだが実際そんな風にも思っていない。今回、彼女から聞いた手術内容は次の通りだった。

まずは頸椎に麻酔を打つわけなのだがこの麻酔の注射が相当痛いらしい。というか、私も腰を悪くしたときに同じ類いの注射を同じ場所に行っているのですの痛さはわかる。本当にこの注射は痛くてたまらない……。しかもゆっくりと注射の中の麻酔を打たなくてはならないので激痛がしばらく腰から身体全体にはしるのだ。麻酔が効いたら女性の性器からおへそのあたりまでメスで子宮が見えるまで開狭し子宮を取る。そしてその周りに転移している癌細胞を除去して終了とのことだった。その手術を想像するだけで血の気が引いてき

てしまう。メスで切った場所はもちろん縫い合わせるのだが傷痕は一生残ってしまうらしい。なんとも可哀相な彼女である。でも何があっても彼女を支えていく覚悟はできていた。

私はそろそろ終わる頃かなと自分の部屋で右往左往して落ち着きが全くなかった。とにかく何事もなく手術の成功をただひたすら祈るのみだ。手術が終わったとしてもこの日は彼女と連絡はとれないだろうし私の不安は募るばかりでいた。

全く眠れないでその日は朝を迎えた。仕事は連休だったので差し支えなかったのだが私は睡眠をとってないせいか目の下のクマがひどかった。そのせいかこの一日で体重が結構減っていた。

午後になり私はいてもたってもいられず彼女に自分の方からメールを送った。

メールを送ってから30分後ぐらいだろうか、彼女から電話がかかってきた。

「もしもし、大丈夫？手術どうなった？成功したの？心配で仕方な

いよ。」

「大丈夫だよ。手術は成功したよ！また検査うけてみてじゃないと正確にはわからないけど先生が言うには百パーセント手術は成功したからガンは大丈夫な可能性の方がつよいってさ。」

「ホントに？やったね！姫ちゃん良く頑張ったね。今は痛さはどう？」

「ハンパなく痛いね…。縫ったところがヤバイ痛いよ。後はオナラがでるまでご飯も食べれないからお腹へったよ。傷痕が凄いよ。見ると恐くなっちゃうよ。」

「そっかぁ。お腹減ってるのかぁ…。食べれないのはキツイね。早くオナラ出て欲しいね。」

「そうなんだけどね…。なかなか出そうにないな。お腹も痛いからまだ当分出なさそう」

「それはキツイね。他は平気なの？」

「今のところはやっぱり縫ったところが1番痛いかな。そのせいであんまし歩く事も出来ないんだよね。」

「そうなの！？歩くのも辛いのかぁ…。代われるなら代わってあげたいよ。」

「ありがとう。気持ちだけでも嬉しいよ。それからさ、まだしばらく入院なんだけど少したったら今度メールするからそしたらおいでよ。」

「いいの！？俺行って平気なの？」

「大丈夫だと思う。そのかわり午後から夕方とかだけだね。大体お見舞い来るときはみんな午前中から来るから大丈夫だと思うんだ。だから私がメールするからその時来れそうだったら来ていいよ。私も逢いたいからさ。」

「わかった。行ける日は必ず行くよ。」

「四、五日後になると思うからそしたらまた連絡するね。」

「了解。電話終わって寝れそうだったら寝ちやいなね。身体にはそれが1番だもん。あとは心配だからあまり無理して歩かないようにね。」

私の心配とは裏腹にとりあえず手術は成功してくれた。そして思いのほか彼女も元気だった。なによりである。私は電話を切った後、ホッと胸を撫で下ろした。

それから数日後、ついに病院に行ける日が来た。仕事を終えた私は急いで帰り、支度を整え彼女のもとに急いだ。途中で彼女の好きなケーキ屋さんに寄って、いくつかケーキを購入した。お決まりの花束も用意したし、後は病院に行くだけだ。着いたら連絡してくれとの事だった。私は病院の駐車場に車を止め彼女に連絡をした。どうやら面会するにあたってその患者さんの部屋番号と名前を記載し、バツヂを貰わなくては入れないそうだ。私は教わった通りに手続きして病院の中に入った。待ち合わせ場所は一階の売店。数分後…、ついに彼女が私の前に現れた。

お見舞い

3台あるうちの真ん中のエレベーターから彼女は私が買ってあげたパジャマ姿で降りてきた。久しぶりに見る彼女の姿は食事をあまりとれなかったせいから少し痩せていた。顔色は良さそうである。

「久しぶりっ！よく来たね、遠かったでしょ。」

「久しぶりだね。全然遠くなんかないよ、毎日でも来れるよ！少し痩せたかな？体調は大丈夫？」

「すこし痩せたかな。ダイエットしたかったから丁度良かったけどね。体調はまあまあかな。」

私達は久々の再会でお互いに喜んでいた。

「立ち話はキツイから座れるところ行こうか。案内するよ。」

そう言って彼女は私をテラスに案内してくれた。

「なんか素敵な場所だね。病院内にこんな場所があるんだ。」

「そうなんだよね。私も最初はビックリしたよ。なんかどっかのカフェっぽい造りだし。」

私達はその場所に腰掛け、私を買ってきたケーキを食べることにした。

「はいこれ、お土産。」

「これって私が好きなケーキ屋さんのケーキじゃん。超嬉しいよ！
ありがとう！わざわざ買ってきてくれたの？」

「うん。来る途中で寄り道してきた。それと、ありきたりだけどお花ね。」

「お花まで……。なんか気使ってもらっちゃったみたいでごめんね。」

「いえいえ、全然だよ。さ、どれ食べる？」

彼女は凄く喜んでくれていた。その表情を見て私も凄く幸せな気持ちになれた。

「わぁーっ。全部食べたいなあ……。でもさすがに全部食べれないから明日以降に残さなきゃね。とりあえずここのお店で1番好きなモンブラン食べよっ！っ！」

「全種類のケーキ一口だけ食べてけば？俺は余ったのでいいよ。とにかく姫ちゃんが食べたいの食べてね」

「はーい。うはっ！モンブラン最高！やっぱここのケーキは馬鹿旨だね。他のお見舞いでケーキ貰ったんだけどここのと比べちゃうと全然だわ。」

しばらくテラスでケーキを食べ、スタバのコーヒーを飲む。二人ともまるでデートをしているような感じになっていた。二人とも久しぶりだったので話しに華が咲いた。テラスの終了時間がきて私達は別の場所に移動した。

今度の場所はおもいきり病棟だった。ただ彼女がいるガン病棟ではなく、他の病気の入院患者がいる病棟の談話室みたいな所に行った。

「ここ大丈夫なの？ 姬ちゃんの病棟じゃないみたいだけど……。」

「大丈夫だよ。前にも来てるしね。私の病棟だと知り合いいるし私につく看護婦さんもいるからさ……。あなたと居るとこみられて家族とかに言われたら二人とも嫌な思いするかもしれないから一応ね。ここならその人達も来ないと思うし。」

確かに彼女の言ってる事は正しい。もし万が一私と彼女が仲良く一緒にいるところを知り合いの人達に見られて、それを彼女の旦那とかに言われたらたまったものではない。そうならないようにとの彼女のナイスアイデアだと思った。

「さすが姫ちゃんだね。考えてる。」

「一応前々から考えてたんだ。あなたが来たらどこで逢おうかなってね。」

彼女の病棟は3階の北病棟でここは6階の東病棟。談話室は以外にも広々としていて、テレビもある。私達は窓際の席に腰を下ろした。ここからは、ちっぽけだけど夜景が見える素敵な場所だ。私は彼女と行ったお台場の観覧車から見た夜景を思い出した。

「なんか夜景見てたら一緒にお台場行った時の事思い出しちゃったよ。あの時は凄く綺麗だったし楽しかったね。」

「そうだね。行ったねえ。もう何年前になるんだろ…また行きたいなあ…。」

「これからいくらでも行けるって！退院して元気になったらまた行くよ。」

それまでケーキを食べあんなにはしゃいでいた彼女が急に静かになった。今までとはなにかが違う空気が漂っていたように私はその時思えた。そしてそれは突然やってきた……………。

「あれ？どしたの姫ちゃん？どっか痛くなってきた？大丈夫？病室戻る？」

「私ね……………。子宮なくなっちゃったの……………。もう赤ちゃん産めないの……………。もう女じゃないの……………。生理もう来ないの……………。お腹パッキリ切られて子宮取られて、そのお腹の傷痕も一生消えない。もうなにもかも訳がわからなくなってきちゃった……………。いっそのこと……………」

私はそこで彼女の言葉を遮った。

「ストップ！！ちょ、急に何言い出してんの？」

「だって……………」

「だってじゃないよ！この前言ってたことは何だったんだよ！姫の周りには今の姫よりずっとずっと辛い環境の人がいるからその人達の分まで頑張らなきゃって言ってたじゃん！もう忘れちゃったの？手術は成功したし、こうして無事に何でも食べれるようになったし歩けるようになったじゃん！なのに何急に弱気になってんの？前にも言ったけど別に子宮があるうがなからうが姫が女であることにはかわらないよ！別に子供が産めなくたって姫は姫でしょ！そんな事ぐらいで俺は別れないし何処にも行かないよ！」

「その……、ゴメン。なんか久しぶりにあなたに逢って昔の事とか思い出してたら急にあなたが居なくなっちゃうような気になってきちゃって……。後は……今までは自分でも気を張ってたのだけどあなたと逢って話してたら……ごめんね。」

彼女は私が訪ねて来たことによって今まで張っていた気が一気に緩み、周りには強がってみせてたけど、私の前では抱え込んでいた弱みが全部出てしまったのだろう。でもそれが普通かもしれない。考えてみたらやっぱり女性としては凄く辛い事だ。今まで電話やメールでは一切弱いところを見せてこなかったのが、いざ私の顔を見て話しをしたら爆発してしまったのだと思う。でもだからこそ彼女は今でも女性だ。女性だから今まで頑張ってた。男性だったら弱いから簡単に弱音を吐くにちがいないであろう。彼女は立派だ。

「姫ちゃん。大丈夫だよ。子宮が無くて子供が産めなくても、一生残る傷があろうとも、俺は裏切らない！俺はいなくならないよ。それに何処からどうみたって姫は立派な女性だよ。」

「ごめんね……。私もなんでさっきあんなこと言ってしまったのか……。それから、ありがとう。やっぱり私はあなたと一緒にじゃなきゃダメだ。これからも私の事よろしくお願いします」

「もちろんだよ。俺の前でならさっきみたいになぶつけてきていいからね。全部受け止めてあげるからさ。そのかわし結構キツイ事言うかも知れどね。でもそれも姫ちゃんのことを思っただけだからね。これからよろしくね。もうこんな時間だし俺はそろそろ帰ろうかな。」

「明日も来れる？」

「もちろん！」

「じゃあまた明日残ったケーキ一緒に食べよう！また明日連絡するね。気をつけて帰ってね。今日は来てくれて本当にありがとう。」

まあ色々あったからさすがに今日は疲れた…。
でも彼女も体調は良さそうだったしこのまま何事もなければ退院する日も近そうである。後はまた検査結果次第か……………。

今度こそバッチリだよな……………、手術も完璧だったみたいだし。良い結果がでるように今からお祈りしなきゃな。あっ！！！！お守り渡すの忘れてた。まっ、明日も来るしその時にでも…。とにかく元氣そうで、まずは一安心だった。

そしてまた検査の日がやってきて……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7392t/>

夢見る心

2011年10月6日08時05分発行